

泊発電所3号炉 津波評価について(資料2)

令和6年2月15日
北海道電力株式会社

津波評価の検討フロー

今回の説明範囲

○本資料(資料2)は、以下に係る検討内容について、これまでの審査で説明した内容を踏まえ、最終的な評価結果を取りまとめた資料である。

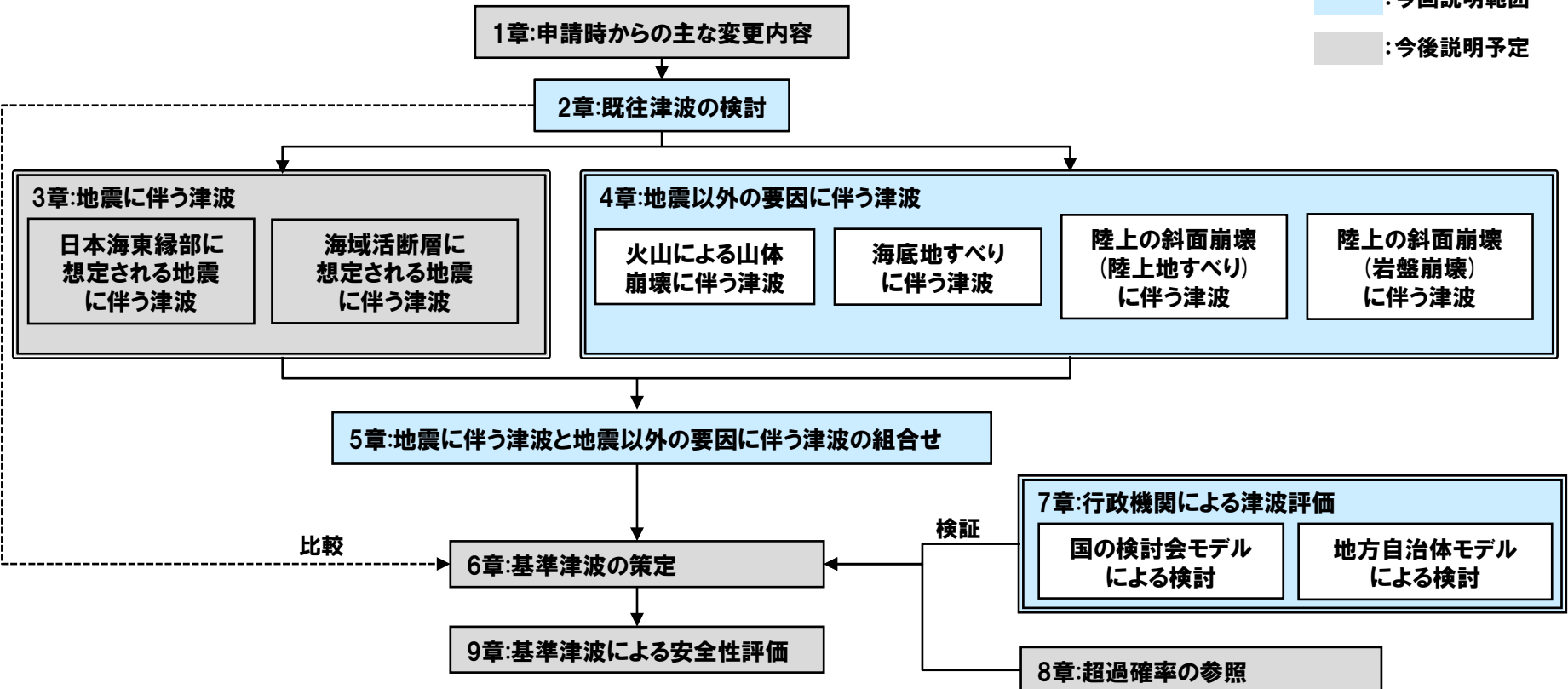
- 2章:既往津波の検討
- 4章:地震以外の要因に伴う津波
- 5章:地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ
- 7章:行政機関による津波評価

※上記以外の検討については、今後説明する。

【津波評価の全体の検討フロー】

■ : 今回説明範囲

■ : 今後説明予定

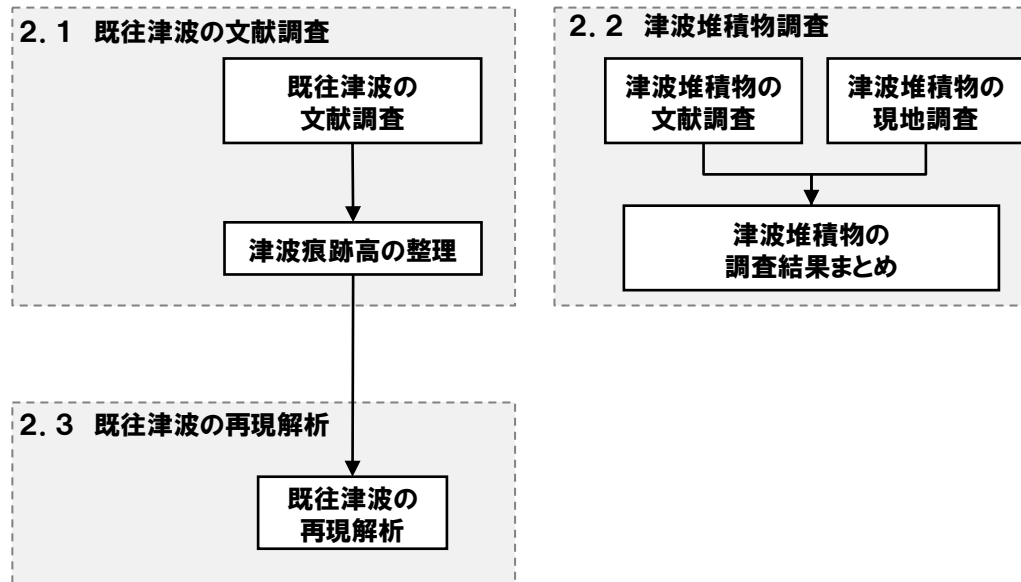


1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

2. 既往津波の検討

検討概要

- 2.1章において、基準津波の策定に当たり適切な規模の津波波源を考慮するため、泊発電所の敷地周辺に来襲した可能性のある既往津波の調査を行い、その津波痕跡高を整理する。
- 2.2章において、泊発電所の敷地周辺及び地域特性を考慮した調査範囲における津波堆積物調査を実施する。
- 2.3章において、基準津波の策定に用いる数値シミュレーションの地形モデル、計算手法等が妥当であることを確認するため、既往津波の再現解析を行う。



2. 1 既往津波の文献調査

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2. 1 既往津波の文献調査	5
2. 2 津波堆積物調査	9
2. 3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3. 1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3. 2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4. 1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4. 2 海底地すべりに伴う津波	34
4. 3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4. 4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5. 1 評価方針	55
5. 2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5. 3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5. 4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5. 5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6. 1 基準津波	
6. 2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7. 1 国の検討会モデルによる検討	120
7. 2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

2.1 既往津波の文献調査

既往津波の文献調査 概要

【目的】

- 基準津波の策定に当たり適切な規模の津波波源を考慮するため、泊発電所の敷地周辺に來襲した可能性のある既往津波の事例を調査する。

【既往津波の文献調査】

- 泊発電所の敷地周辺に來襲した可能性のある既往津波として、「日本海を波源域とし、北海道から本州に來襲した既往津波」を対象に、発生時期、規模、発生要因等についての文献調査を実施し、できるだけ過去に遡ってとりまとめる。
 - 全36件の既往津波をとりまとめた。
- とりまとめた結果を踏まえ、特に泊発電所の敷地周辺への影響が大きかったと考えられる既往津波として、「波源域から泊発電所までの距離が短く、泊発電所の敷地周辺を含む北海道西岸（稚内から松前）にて津波規模の大きい既往津波」を抽出する。
 - 日本海東縁部を波源域とする、以下5件の既往津波を抽出した。
 - ✓ 1741年（渡島西岸）津波
 - ✓ 1792年（後志）地震津波
 - ✓ 1940年積丹半島沖地震津波
 - ✓ 1983年日本海中部地震津波
 - ✓ 1993年北海道南西沖地震津波

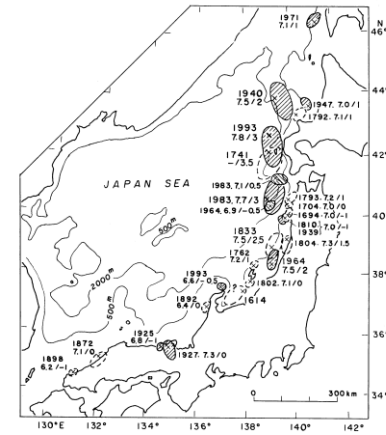
【津波痕跡高の整理】

- 既往津波の調査結果を踏まえ、抽出した既往津波を対象に、津波痕跡高についての文献調査を実施し、泊発電所を含む北海道西岸における津波痕跡高を整理する。
- 津波痕跡高の整理結果を踏まえ、泊発電所の敷地周辺に最も影響を与えた既往津波として、「泊発電所の敷地周辺で津波痕跡高が最も大きい既往津波」を抽出する。
 - 泊発電所の敷地周辺に最も影響を与えた既往津波として、「1993年北海道南西沖地震津波」を抽出した。
 - 「1993年北海道南西沖地震津波」の津波痕跡高は、泊村で3.04m、岩内町で3.56mであった。

2.1 既往津波の文献調査

既往津波の文献調査

- 泊発電所の敷地周辺に来襲した可能性のある既往津波として、「日本海を波源域とし、北海道から本州に来襲した既往津波」を対象に文献調査を実施し、全36件の既往津波をとりまとめた。(資料3の2.1「既往津波の文献調査」参照)
- 特に泊発電所の敷地周辺への影響が大きかったと考えられる既往津波として、「波源域から泊発電所までの距離が短く、泊発電所の敷地周辺を含む北海道西岸(稚内から松前)にて津波規模の大きい既往津波」を対象に、日本海東縁部を波源域とする以下5件の既往津波を抽出した。
 - 1741年(渡島西岸)津波
 - 1792年(後志)地震津波
 - 1940年積丹半島沖地震津波
 - 1983年日本海中部地震津波
 - 1993年北海道南西沖地震津波



日本海で発生した地震と津波波源域
(羽鳥(1995)より引用)

発生年月日 元号	波源域*1	震央*2		地震規模*2 (M)	津波規模*3 (m)	地震津波の概要*4	発電所近傍の 痕跡高*5 (m)
		経度(° E)	緯度(° N)				
1741年8月29日 寛保1年	北海道南西沖	41.6°	139.4°	6.9	<3.5>	・渡島大島この月の下旬より活動。13日に噴火した。19日早朝に津波。北海道で死1467、流出家屋729、船1521破壊。津波で田畑の損も多く、流失潰家約100、死37。佐渡・能登・若狭にも津波。 ・江の川河口(島根県江津市)で1~2mの津波が観測された。(羽鳥・片山(1977)(12)) ・津波地震によるものか、火山噴火に伴うものか、あるいは他の現象(たとえば海底地すべり)によるものか不明。江津(島根県)でも津波の影響があった。津波の高さは1~2mである。(渡辺(1998)) ・渡島大島の山体崩壊によって生じたとされている。(佐竹・加藤(2002)(13))	記録なし
1792年6月13日 寛政4年	北海道西方沖	43 3/4°	140.0°	≒7.1	—	・津波があった。忍路で港頭の岸壁が崩れ、海岸に引き上げていた夷船漂流、出漁中の夷人5人溺死。英国でも溺死若干。	記録なし
1940年8月2日 昭和15年	北海道西方沖 「積丹半島沖地震」	44° 22'	139° 49'	7.5	2	・被害はほとんどなく、津波による被害が大きかった。波高は、羽機・天塩2m、利尻3m、金沢・宮津1m、天塩河口で溺死10。	岩内:1.7 泊:(1.2)
1983年5月26日 昭和58年	秋田・青森県沖 「日本海中部地震」	40° 21.6'	139° 04.7'	7.7	3	・被害は秋田県で最も多く、青森・北海道がこれに次ぐ。日本全体で死104(うち津波によるもの100)、傷163(同104)、建物全壊934、半壊2115、流失52、一部破壊3258、船沈没255、流失451、破壊 1187。津波は早い所で津波警報発令以前に沿岸に到達した。石川・京都・島根など遠方の府県にも津波による被害が発生した。	岩内:0.6、1.21 泊:1.29、1.39
1993年7月12日 平成5年	北海道南西沖 「北海道南西沖地震」	42° 46.9'	139° 10.8'	7.8	3	・地震に加えて津波による被害が大きく、死202、不明28、傷323。特に地震発後もなく津波に襲われた奥尻島の被害は甚大で、島南端の青苗地区は火災もあって壊滅状態。夜10時すぎの間のなかで多くの人命、家屋等が失われた。津波の高さは青苗の市街地で10mを越えたところがある。 ・津波は日本海沿岸の各地に達した。船の転覆沈没は新潟県で24、石川県24、島根県70隻で島根では床下浸水50世帯を出した。(宇佐美ほか(2013))	岩内:2.27~3.56 泊:2.62、3.04

※1: 渡辺(1998)、羽鳥(1984)、及び宇佐美ほか(2013)を参照。

※2: 宇佐美ほか(2013)を参照。

※3: 宇佐美ほか(2013)を参照。但し、<>は羽鳥(1984)、()は羽鳥(1996)の値。

各文献で値が異なる場合は、最も大きな値を記載。

津波規模mについて、羽鳥(1986)は下式で表し、規模階級は0.5間隔で区分できるとした。

$$m = 2.7 \log H + 2.7 \log \Delta - 4.3 \quad (\text{単位} H: \text{m}, \Delta: \text{km})$$

H: 津波の高さ、Δ: 距離(震央から観測点までの海洋上の最短距離)

また各津波規模の概況について、宇佐美ほか(2013)は、下表のように示した。

※4: 地震・津波の概要に出典の記載がないものは国立天文台編(2016)による。

※5: 東北大学・原子力規制庁(2014)を参照。信頼度Aの値を記載。

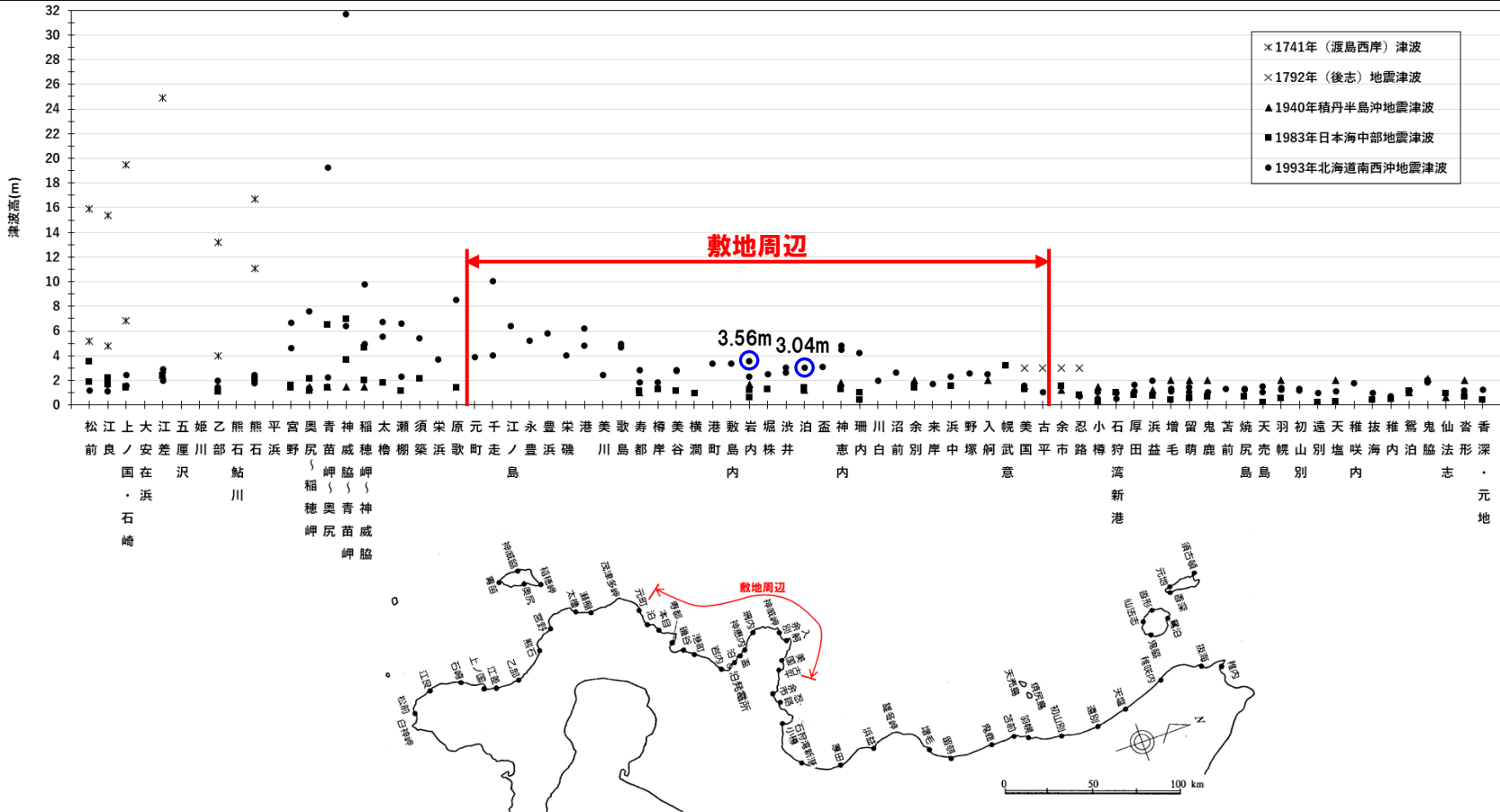
津波規模 m ※3	概況 ※3
-1	波高50cm以下、無被害。
0	波高1m前後で、ごくわずかの被害がある。
1	波高2m前後で、海岸の家屋を損傷し船艇をさらう程度。
2	波高4~6mで、家屋や人命の損失がある。
3	波高10~20mで、400km以上の海岸線に顕著な被害がある。
4	最大波高30m以上で、500km以上の海岸線に顕著な被害がある。

2.1 既往津波の文献調査

津波痕跡高の整理

一部修正 (H26/12/5審査会合)

- 既往津波の調査結果を踏まえ、抽出した5件の既往津波を対象に、津波痕跡高についての文献調査を実施し、泊発電所を含む北海道西岸における津波痕跡高を以下に整理した。
- 津波痕跡高の整理結果から、泊発電所の敷地周辺における津波痕跡高が最も高かったのは1993年北海道南西沖地震津波であり、その津波痕跡高は泊村及び岩内町において、それぞれ、3.04m及び3.56mである。



○「泊発電所の敷地周辺に最も影響を与えた既往津波」として1993年北海道南西沖地震津波を選定する。

2.2 津波堆積物調査

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

2.2 津波堆積物調査

津波堆積物調査 概要

【目的】

- 基準津波の策定に当たり適切な規模の津波波源を考慮するため、泊発電所の敷地周辺及び地域特性を考慮した調査範囲における津波堆積物調査を実施する。

【津波堆積物の文献調査】

- 「2.1 既往津波の文献調査」における津波痕跡高の整理結果を踏まえ、1993年北海道南西沖地震津波の津波痕跡高が大きかった「泊発電所の敷地周辺を含む北海道南西部西岸（古平町から松前町）及び奥尻島」を対象に、津波堆積物の有無、広域的な分布、供給源、津波の発生時期及び規模（津波高、浸水域等）等についての文献調査を実施し、結果をとりまとめる。
 - 文献調査の結果、津波堆積物は泊発電所の敷地周辺では確認されず、泊発電所より南方約100km以遠の8地点において確認された。文献調査結果に基づき地点毎の津波堆積物の分布標高を整理した。

【津波堆積物の現地調査】

- 泊発電所の敷地周辺における津波堆積物の有無を詳細に確認するため、泊発電所から約30km圏内である神威岬から尻別川河口の沿岸部で地表地質踏査を実施するとともに、特に敷地近傍の岩内平野では北海道（2013）の調査地点を補完する位置で、かつ津波堆積物が保存されている可能性が高い砂丘や湿地に着目して対象範囲とした。
 - 地表地質踏査結果より、人工改変されていない海食崖基部や河口付近の河川沿いで堆積物が認められる露頭において、陸成層（崖錐堆積物含む）中に円礫からなる砂礫層や砂層のような津波堆積物を示唆する海成層の挟在は確認できなかった。
 - 北海道（2013）及び当社が実施した岩内平野におけるボーリング調査の結果、少なくとも約7,000年前以降について、津波堆積物を示唆するような地層は確認されなかった。

【津波堆積物の調査結果まとめ】

- 以上の調査結果から津波堆積物の分布標高を整理する。
 - 文献調査及び現地調査の結果、津波堆積物は泊発電所の敷地周辺では確認されず、文献調査の結果から泊発電所より南方約100km以遠の8地点において確認された。

2.2 津波堆積物調査

津波堆積物の文献調査

- 「泊発電所の敷地周辺を含む北海道南西部西岸(古平町から松前町)及び奥尻島」を対象に行った文献調査の結果、津波堆積物は泊発電所の敷地周辺では確認されず、南方約100km以遠の8地点(せたな町平浜～上ノ国町大安在浜及び奥尻島)において確認された(資料3の2.2「津波堆積物調査」参照)。
- 文献調査結果に基づき、地点毎の津波堆積物の分布標高及び層厚を整理した。

地域	渡島半島榊山地域						奥尻島		
	上ノ国町 大安在浜	江差町 五厘沢	乙部町 姫川	八雲町 熊石鮎川	せたな町 平浜	奥尻町 赤川	奥尻町 ワサビヤチ	奥尻町 貝取淵	
1993年北海道南西沖地震津波								I 約9.6m 詳細な記載なし	
1741年(渡島西岸)津波	I, II, III 6.88m I 約6.9m II 7m III 詳細な記載なし	II 約5.5m～約6.5m(Ey-1) 数cm～約75cm※	I, II 1.95m～2.4m(Oh-1) 2～17cm	IV 約2.4m～約2.7m(Ku-2) 約16cm～約64cm※	IV 約4.0m(Th-1) 約7cm～約20cm※			I 約9.3m 約7.3m(Ok-1) 詳細な記載なし	
11～ 15世紀	14～15世紀頃		I 4.8m～7.1m 約35cm※						
	13～15世紀							I 約7.1m(Ok-2) 詳細な記載なし	
	11～13C頃						I 約4.3m～約4.7m(Ow-1) 3cm～30cm		
	13世紀頃			I, II 約1.0m(Oh-2) 約10cm※		I 約5.4m～約5.6m(Oa-1) 数mm以下			
	12世紀, 12世紀頃	II 6.4m～6.9mの間 詳細な記載なし	II 約4.8m～約6.2m(Ey-2) 数cm～約60cm※		IV 約3.5m(Th-2) 数cm～約35cm※				
BC110 ～4世紀	紀元前100年～ 4世紀							I 約6.9m(Ok-3) 詳細な記載なし	
	BC110～3世紀					I 約4.9m～約5.2m(Oa-2) 数mm以下			
	1～3C頃						I 約4.1m～約4.3m(Ow-2) 3cm～5cm		
2500年前頃	2000年前頃						I 約4.2m(Ow-3) 2cm		
	2500年前頃				IV 約4.8m(Th-3) 約21cm※	I 約4.3m(Oa-3) 数mm以下	I 約3.6m～約4.1m(Ow-4) 10cm～20cm		
2.8～3.1ka	3000年前頃						I 約3.2m～約3.7m(Ow-5) 10cm～60cm		
	3100年前頃						I 約3.0m～約3.6m(Ow-6) 10cm～21cm		
年代不詳	I 5.1m～8.5m	I 5m							

- I : 川上ほか(2015) : 北海道の日本海・オホーツク海沿岸における津波履歴 : 重点研究「北海道の津波災害履歴の研究-未解明地域を中心に-」成果報告書
- II : Kawakami et al.(2017b) : Stratigraphic record tsunami along the Japan Sea, southwest Hokkaido, northern Japan
- III : 川上ほか(2017a) : 日本海東縁の津波とイベント堆積物
- IV : 東大地震研(2017) : 平成29年度「日本海地震・津波調査プロジェクト」成果報告書

凡例

引用文献 I～IV	上段:津波堆積物の標高
	下段:津波堆積物の層厚

※当社にて柱状図より判読

2.2 津波堆積物調査

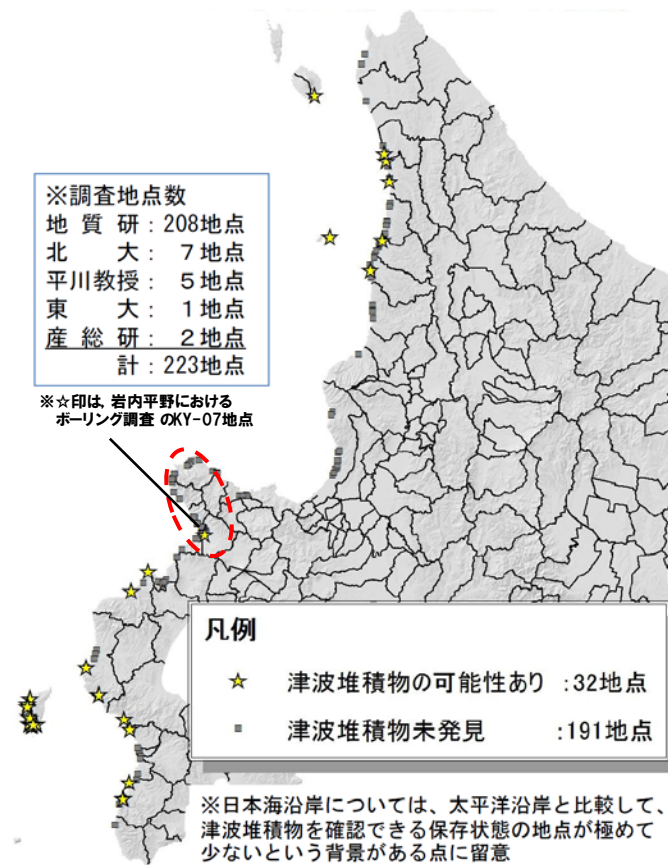
津波堆積物の現地調査：地表地質踏査結果

一部修正 (H26/1/29審査会合)

- 泊発電所の敷地周辺における津波堆積物の有無を詳細に確認するため、泊発電所から約30km圏内である神威岬から尻別川河口の沿岸部において、地表地質踏査を実施した。
- 踏査結果より、人工改変されていない海食崖基部や河口付近の河川沿いで堆積物が認められる露頭において、陸成層（崖錐堆積物含む）中に円礫からなる砂礫層や砂層のような津波堆積物を示唆する海成層の挟在は確認できなかった（資料3の2.2「津波堆積物調査」参照）。
- なお、行政機関の調査（北海道（2013））においても、当該範囲の沿岸部においては津波堆積物が未発見とされている。



地表地質踏査範囲



日本海側における津波堆積物調査地点
(北海道(2013)に加筆)

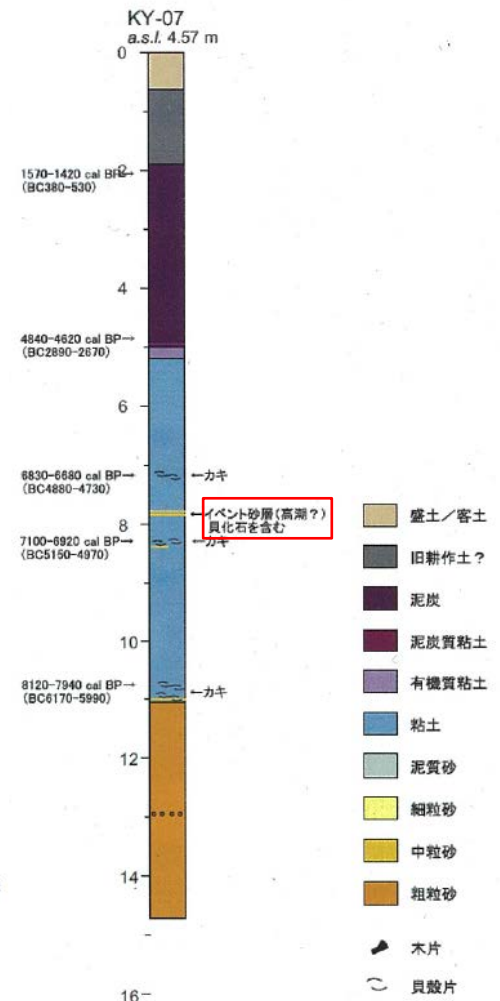
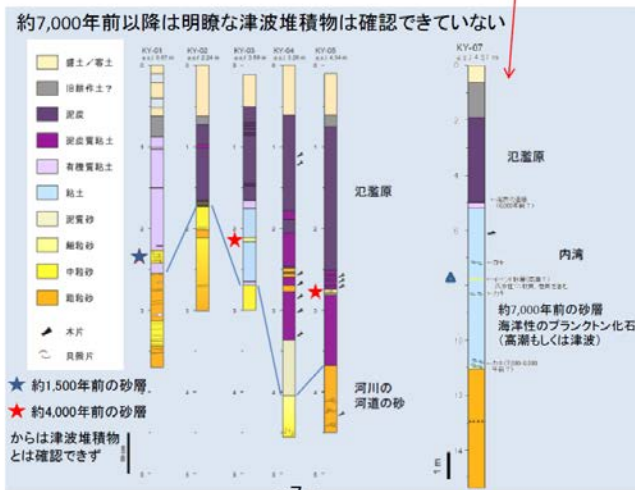
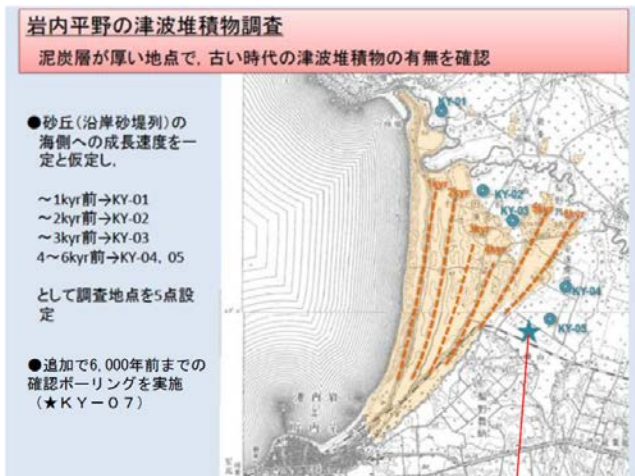
2.2 津波堆積物調査

津波堆積物の現地調査:ボーリング調査結果(北海道(2013))

一部修正(H26/1/29審査会合)

- 北海道(2013)の調査では、発電所敷地近傍の堀株南岸域において、海岸部に広い沿岸砂丘が発達するため、主に砂丘背後の低地、及び砂丘を切って広がる氾濫原でイベント堆積物の探索を行っている。
- 北海道(2013)による岩内平野におけるボーリング調査の結果を以下に記載する。

(参考1-4) ボーリング等による調査



- KY-07地点のコア観察結果より、深度7.8m付近に薄い砂層(イベント砂層)が2枚挟まれており、周辺深度のカキの貝殻片の¹⁴C法年代測定結果より、イベント砂層の年代は約7,000年前と推定している。
- 現段階では、イベント砂層は、津波堆積物の可能性を示唆するものではあるが、高潮起源である可能性を完全に否定することはできず、津波起源であったとしても著しく大きな津波であったかどうかの判断はできないとしている。
- 周辺で実施した地層引き抜き調査(KY-01~KY-05)では、約1,600年前または約4,000年前の地層の層準で、イベント砂層が認められる場合があったが、珪藻分析等の結果から、河川の洪水起源によるものと考えられ、現在のところ津波起源の明瞭な証拠は得られてはいないとしている。
- 北海道の調査では、約1,600年前以降の最新期の地層データが欠如しており、その時代の堆積物の確認について、課題の1つとして抽出している。

※北海道(2013)より

2.2 津波堆積物調査

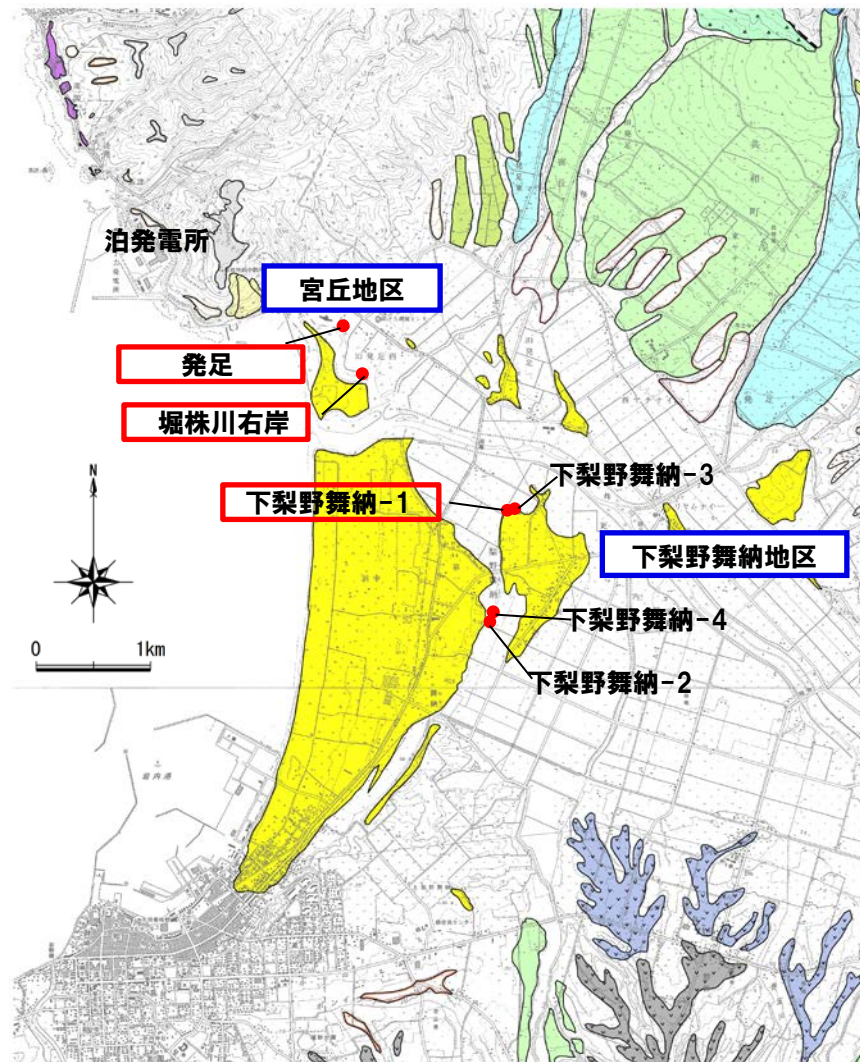
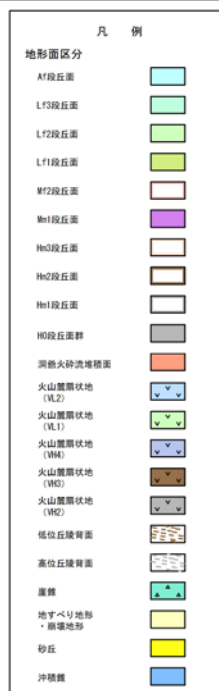
津波堆積物の現地調査：ボーリング調査結果（当社）（1/2）

一部修正（H26/1/29審査会合）

- 北海道（2013）の調査では、岩内平野内で相当数の掘削調査を行っているが、人工改変等の影響により、約1,600年前以降の地層データがほとんど得られていないとされている。
- 上記を踏まえ、北海道の調査結果を補完する目的で、岩内平野内で湿地性堆積物（腐植質シルト層）、内湾性堆積物（シルト層）が堆積している可能性がある海岸部に発達する沿岸砂丘背後の低地、及び砂丘を横切って広がる氾濫原においてボーリング調査を実施した。
- ボーリング調査結果より、津波堆積物の可能性のあるイベント堆積物が推定される地層を、発足、堀株川右岸、下梨野舞納において抽出した（資料3の2.2「津波堆積物調査」参照）。
- イベント堆積物が推定される地層について、 ^{14}C 法年代測定、珪藻分析を実施した。結果は次頁に示す。

ボーリング調査内容一覧

地区名	ボーリング名	坑口 標高	掘削 深度	^{14}C 法年代 測定	珪藻分析
宮丘地区	発足	3.39m	12m	1試料	23試料
	堀株川右岸	1.74m	18m	3試料	39試料
下梨野舞納地区	下梨野舞納-1	3.04m	6m	3試料	32試料
	下梨野舞納-2	4.30m	10m	—	—
	下梨野舞納-3	2.98m	9m	—	—
	下梨野舞納-4	4.34m	9m	2試料	—



津波堆積物の可能性のある地層が抽出されたボーリング地点

ボーリング調査位置図

2.2 津波堆積物調査

津波堆積物の現地調査：ボーリング調査結果（当社）（2/2）

- イベント堆積物が推定される地層について¹⁴C法年代測定、珪藻分析を実施した結果、津波堆積物を示す明瞭な根拠は確認できなかった。
 ○以上より、北海道の調査において課題とされた約1,600年前以降の最新期の地層について、当社が実施したボーリング調査によりイベント堆積物が推定される地層を一部確認することができ、その結果、明瞭な津波堆積物は確認できなかった。

地区名	ボーリング名	坑口 標高	掘削 深度	¹⁴ C法年代測定			珪藻分析			評価
				試料数	深度 (m)	年代値	試料数	深度 (m)	分析結果	
宮丘地区	発足	3.39m	12m	1試料	5.8	5,170±30yBP (BC3,250~BC3,190)	23試料	3.5~4.9	○主に河川性の堆積物または氾濫原堆積物を確認	○分析結果より津波起源を示すような明瞭な証拠は得られない。
	堀株川右岸	1.74m	18m	3試料	1.38-1.40	190±20yBP (AD1,740-AD1,780)	39試料	1.3~5.6	○主に河川性の堆積物または氾濫原堆積物を確認	○分析結果より津波起源を示すような明瞭な証拠は得られない。
					2.08-2.10	780±20yBP (AD1,150-AD1,190)				
					9.75	6,430±30yBP (BC4,510-BC4,450)				
下梨野舞納地区	下梨野舞納-1	3.04m	6m	3試料	0.94-0.95	450±20yBP (AD1,480-AD1,520)	32試料	2.0~4.8	○主に河川性の堆積物または氾濫原堆積物を確認	○分析結果より津波起源を示すような明瞭な証拠は得られない。
					2.14-2.15	640±20yBP (AD1,290-AD1,330)				
					2.73-2.74	4,950±30yBP (BC3,030-BC2,970)				
	下梨野舞納-2	4.30m	10m	—	—	—	—	—	○津波起源を示すようなイベント堆積物の層準は確認されない。	
	下梨野舞納-3	2.98m	9m	—	—	—	—	—	○津波起源を示すようなイベント堆積物の層準は確認されない。	
下梨野舞納-4	4.34m	9m	2試料	0.65-0.68	2,120±30yBP (BC200-BC140)	—	—	—	○津波起源を示すようなイベント堆積物の層準は確認されない。	
				2.08-2.10	3,340±30yBP (BC1,420-BC1,360)					

2.2 津波堆積物調査

津波堆積物の現地調査:まとめ

一部修正 (H26/1/29審査会合)

①地表地質踏査

- 神威岬から尻別川河口の沿岸部において、陸成層（崖錐堆積物含む）中に挟在する海成層の有無に着目した踏査を実施。

○津波堆積物の可能性を示唆する堆積物が認められる露頭は確認できなかった。

②ボーリング調査

- 空中写真判読結果, 地表地質踏査結果, 北海道による津波堆積物調査結果等を踏まえ, 北海道の調査データを補完する目的で, 津波堆積物が分布する可能性が考えられる岩内平野においてボーリング調査を行った。

○3地点においてイベント堆積物が推定される地層を抽出した。

③年代測定, 珪藻分析

- ボーリング調査結果より, 抽出された地層について¹⁴C法年代測定, 珪藻化石分析を実施。

○抽出した地層では, 津波堆積物を示す明瞭な証拠は得られなかった。

④堆積物の評価

- ①～③の調査結果を踏まえ, 北海道の津波堆積物調査結果を考慮して, 津波堆積物の分布について評価を行った。

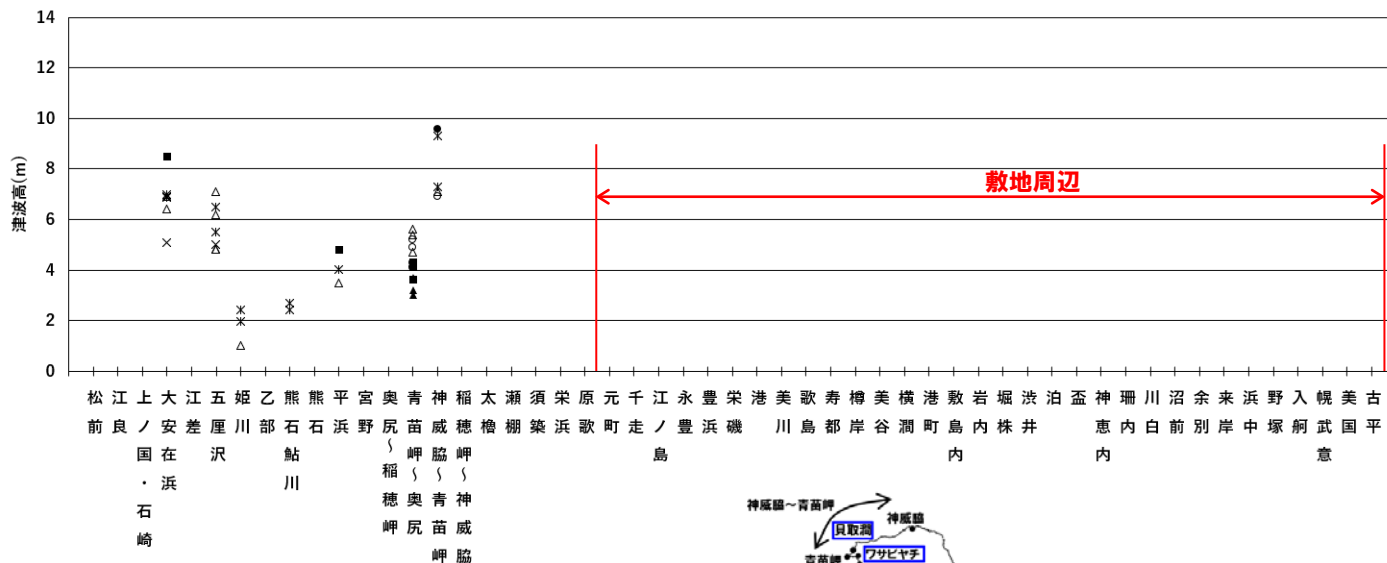
○ボーリング調査結果より, 津波堆積物の可能性を示唆するような地層は確認できなかった。
○また, 北海道におけるボーリング調査のKY-07地点で確認される地層に対比される地層は確認できなかった。

○現地調査結果(自社)及び北海道(2013)の調査結果では, 少なくとも約7,000年前以降について, 岩内平野に津波堆積物を示唆するような地層は確認されていない。

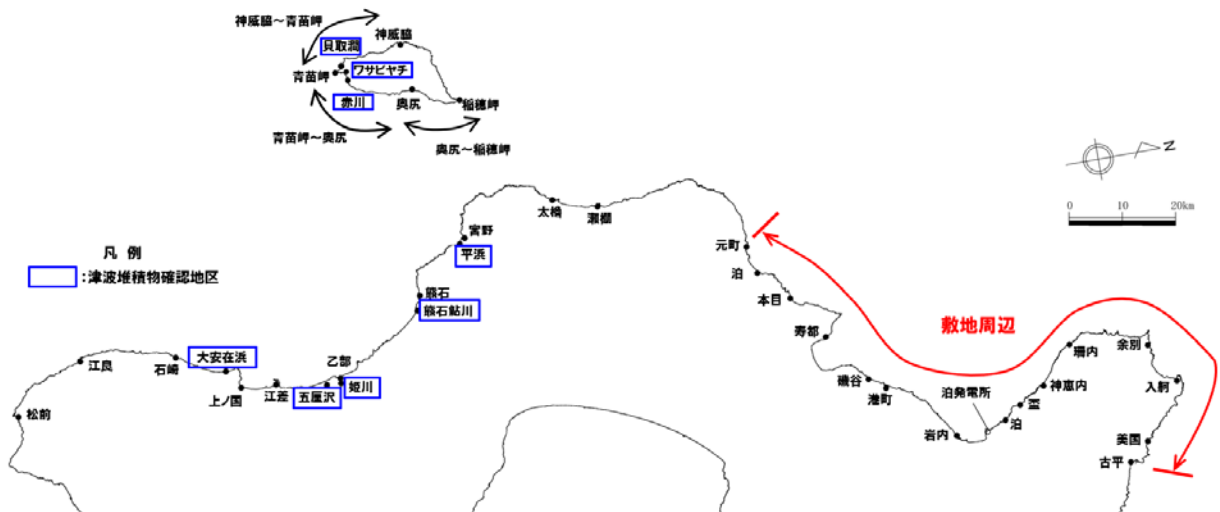
2.2 津波堆積物調査

津波堆積物の調査結果まとめ

- 文献調査及び現地調査の結果より、津波堆積物は泊発電所の敷地周辺では確認されず、文献調査結果より泊発電所の敷地から100km以上南方の檜山地域沿岸のせたな町平浜～上ノ国大安在浜、奥尻島の8地点（下図に青枠で示す地点）において確認された。
- 文献調査結果に基づき確認された津波堆積物の分布標高を整理した。



- ×年代不詳
- ▲2.8～3.1ka
- 2500年前頃
- BC110～4世紀
- △11～15世紀頃
- ✱1741年 渡島西岸津波
- 1993年 北海道南西沖地震津波



津波堆積物の分布標高と津波痕跡高の比較

余白

2.3 既往津波の再現解析

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

2.3 既往津波の再現解析

既往津波の再現解析 概要

一部修正 (H26/12/5審査会合)

【目的】

○基準津波の策定に用いる水位変動の数値シミュレーションについて、地形モデル、計算手法等が妥当であることを確認するため、既往津波を対象に数値シミュレーションによる再現解析を実施する。

【既往津波の再現解析】

- 「2.1 既往津波の文献調査」において抽出された「泊発電所の敷地周辺に最も影響を与えた既往津波」である1993年北海道南西沖地震津波について、津波痕跡高が大きかった「泊発電所の敷地周辺を含む北海道南西部西岸(古平町から松前町)及び奥尻島」を対象に、数値シミュレーションによる解析結果(計算津波高)と津波痕跡高との比較を実施し、相田(1977)による幾何平均値 K 及び幾何標準偏差 κ を用いて、再現性を確認する。
- 再現性の目安としては、土木学会(2016)を参考にする。
 - 「1993年北海道南西沖地震津波」について再現性を確認した結果、相田(1977)による幾何平均値 K 及び幾何標準偏差 κ は土木学会(2016)に示される再現性の目安を満足しており、数値シミュレーションが妥当であることを確認した。

相田(1977)による幾何平均値 K と幾何標準偏差 κ

$$\log K = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \log K_i \quad \log \kappa = \left\{ \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (\log K_i)^2 - (\log K)^2 \right\}^{1/2} \quad K_i = \frac{R_i}{H_i}$$

ここで、

R_i : i 番目の地点の観測値 (既往津波高)

H_i : 計算値 (計算津波高)

n : 既往津波高の個数

再現性の目安(土木学会(2016))

$$0.95 < K < 1.05, \quad \kappa < 1.45$$

2.3 既往津波の再現解析

既往津波の再現解析

一部修正 (H26/12/5審査会合)

- 1993年北海道南西沖地震津波について、数値シミュレーションによる解析を行う(地形モデル及び計算条件は資料3の2.3「既往津波の再現解析」参照)。
- 計算津波高との比較対象とする津波痕跡地点は、東北大学・原子力規制庁(2014)の津波痕跡地点とする。
- 計算津波高と津波痕跡高との比較を網羅的に行うため、対象範囲における全ての津波痕跡高データを用いた。
- なお、対象範囲における津波痕跡高データに信頼度Xのものはなく、大部分が信頼度A又はBである。

津波痕跡高データベースの地点数

対象範囲	北海道南西部西岸及び奥尻島
出典	東北大学・原子力規制庁(2014)
信頼度	A~Z
地点数	北海道南西沖地震津波 151地点(209データ)

信頼度の判断基準

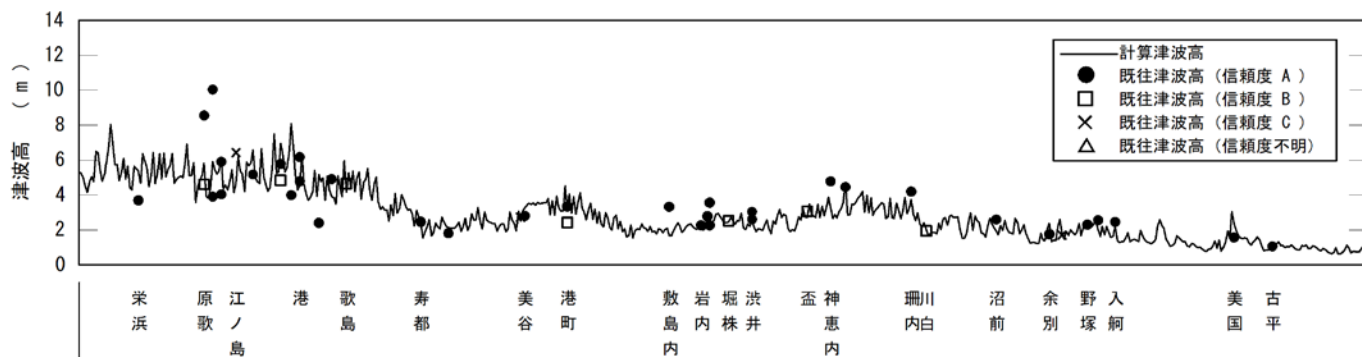
項目	判断基準
信頼度	A 信頼度大なるもの。 痕跡明瞭にして、測量誤差もつとも小なるもの。
	B 信頼度中なるもの。 痕跡不明につき、聞き込みにより、周囲の状況から信頼ある水位を知るもの。測量誤差小。
	C 信頼度小なるもの。 その他砂浜などで異常に波が這い上がったと思われるもの、あるいは測点が海辺より離れ測量誤差が大なるもの。
	D 信頼度極小なるもの。 高潮、台風などの影響で痕跡が重複し、不明瞭なもの、等。
	X 明らかに引用の間違い、記載間違いであるもの。 利用すべきでないもの、除外すべきもの。 歴史津波の場合で、古文書史料などの精査により文献信頼度を×と判定したもの。
	Z カタログ類と分類された場合:カタログ作成の元になった原文献に戻って判定すべきもの。 重複及びその地区(かなり広い範囲)の値を総括した値と思われるもの。 浸水計算の確認に利用できる定性的な情報。

2.3 既往津波の再現解析

既往津波の再現解析結果（北海道南西部西岸（1/2））

一部修正（H26/12/5審査会合）

- 再現性確認の結果、再現性を示すK, κ について比較範囲全体では $K=0.99$, $\kappa = 1.36$ を示し、土木学会（2016）の目安である $0.95 < K < 1.05$, $\kappa < 1.45$ を満たしている。
- 北海道南西部西岸では $K=0.93$, $\kappa = 1.32$ で、土木学会（2016）で示される目安を概ね満たしている。

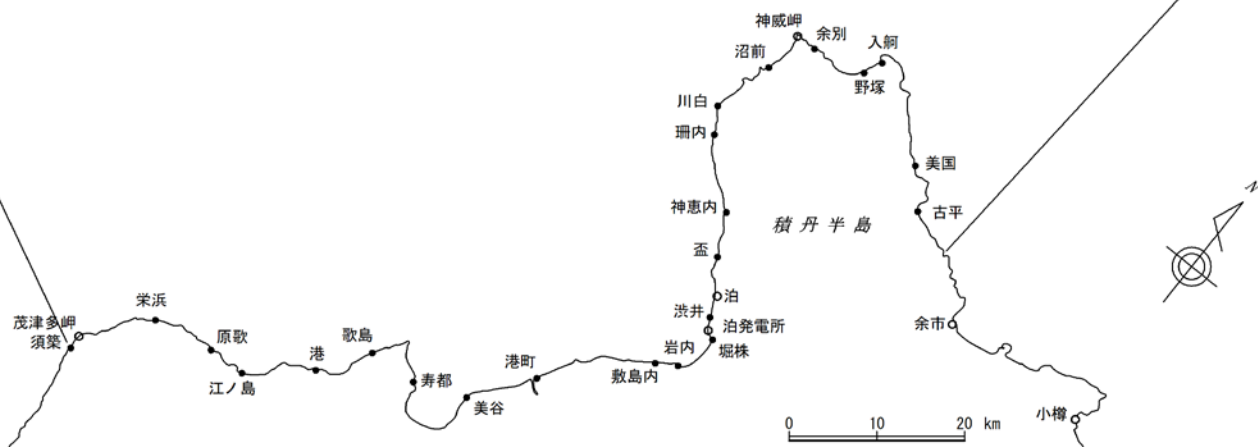


再現性の指標

全体	K=	0.99
	κ =	1.36
	n=	151
北海道南西部西岸	K=	0.93
	κ =	1.32
	n=	69

n:津波痕跡高地点数

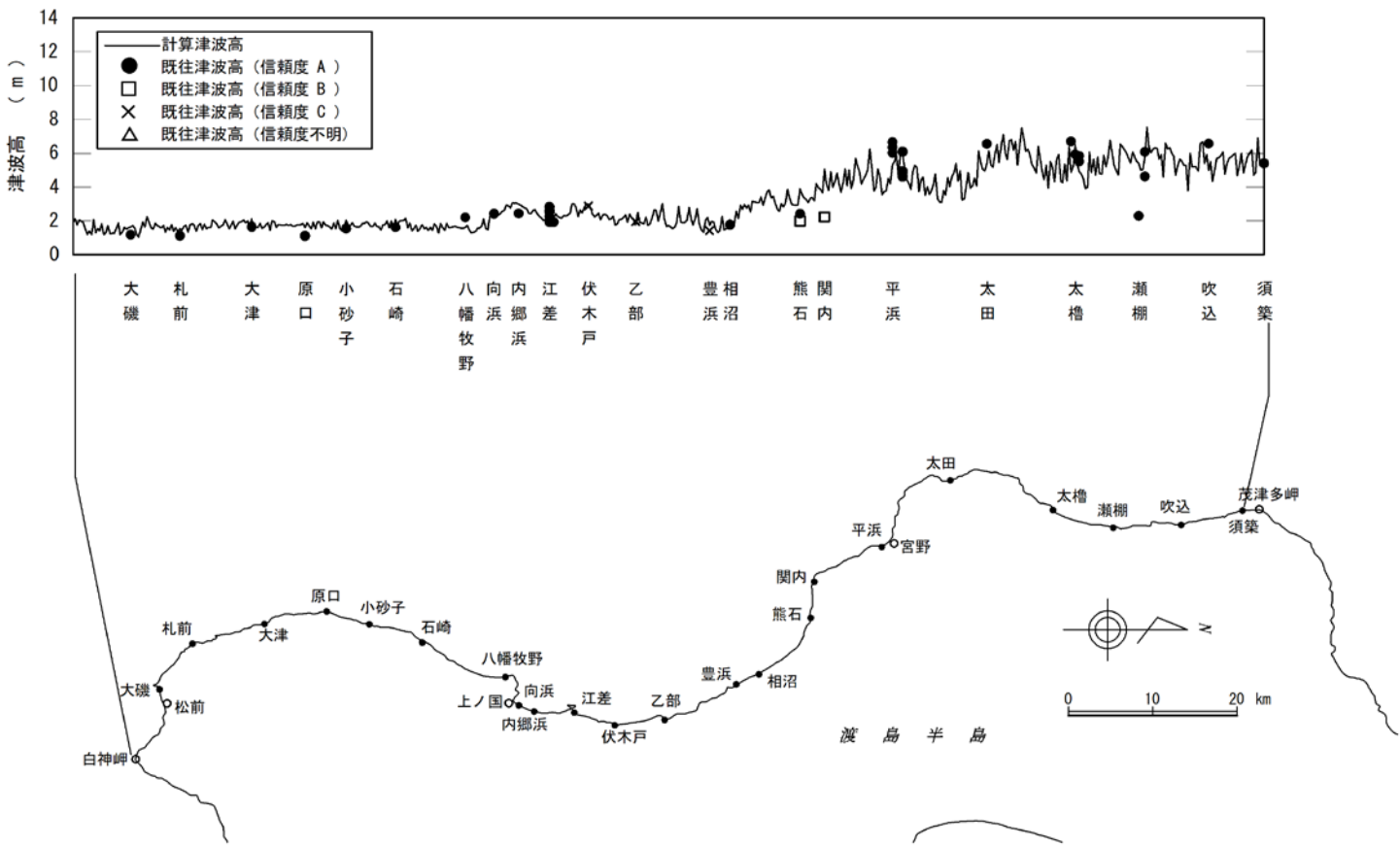
本頁では、北海道南西部西岸のうち、泊発電所の敷地周辺におけるグラフを抜粋した。栄浜以南（須築から松前町）のグラフは次頁参照。



2.3 既往津波の再現解析

既往津波の再現解析結果（北海道南西部西岸（2/2））

一部修正（H26/12/5審査会合）



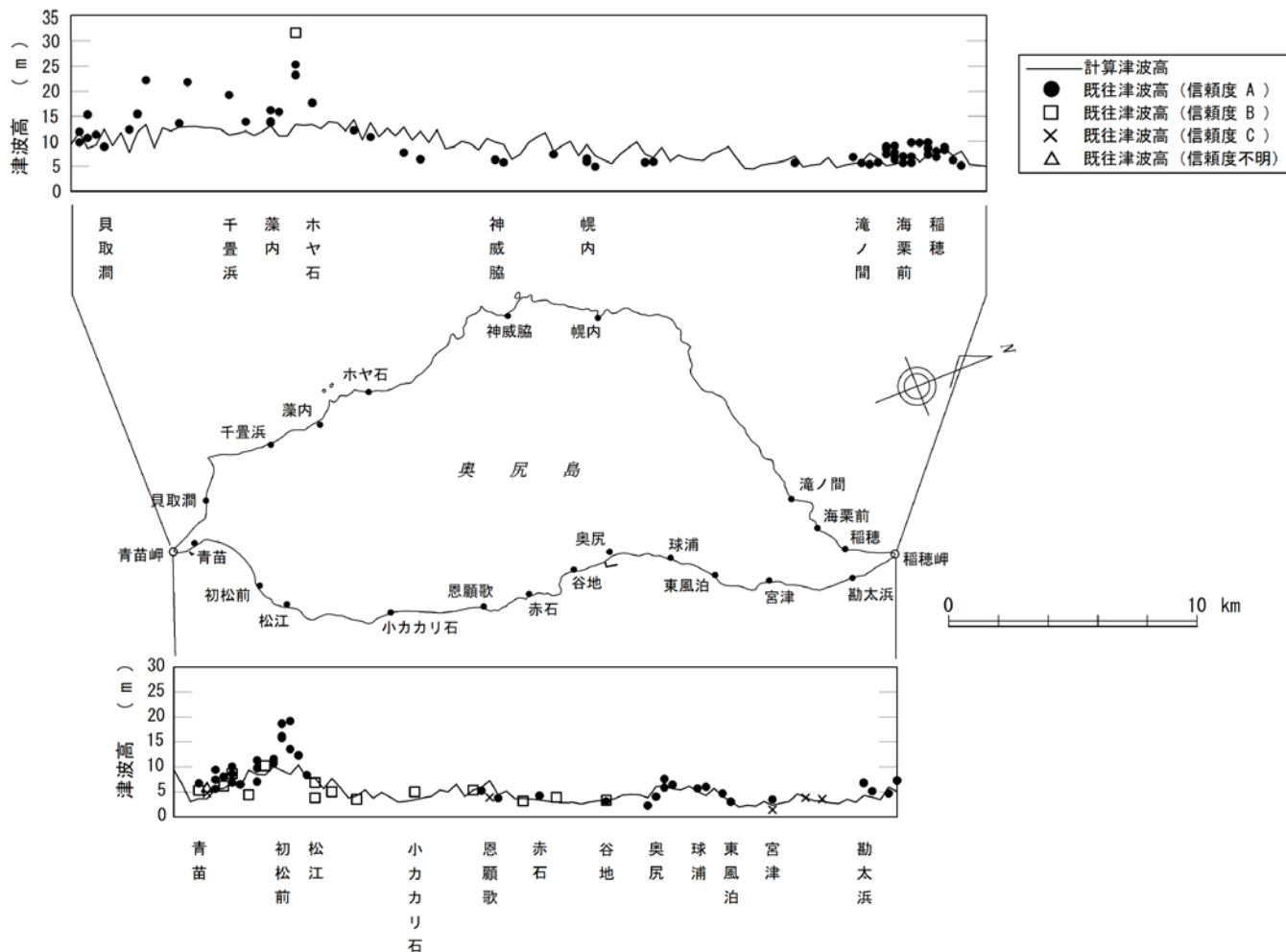
北海道南西部西岸における既往津波の津波痕跡高と計算津波高の比較 - 1993年北海道南西沖地震津波 -

2.3 既往津波の再現解析

既往津波の再現解析結果 (奥尻島)

一部修正 (H26/12/5審査会合)

- 再現性確認の結果、再現性を示すK, κ について比較範囲全体では $K=0.99$, $\kappa = 1.36$ を示し、土木学会 (2016) の目安である $0.95 < K < 1.05$, $\kappa < 1.45$ を満たしている。
- 奥尻島では $K=1.04$, $\kappa = 1.39$ で、土木学会 (2016) で示される目安を満たしている。



再現性の指標

全体	K=	0.99
	κ =	1.36
	n=	151
奥尻島	K=	1.04
	κ =	1.39
	n=	82

n: 津波痕跡高地点数

4. 地震以外の要因に伴う津波

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

4. 地震以外の要因に伴う津波

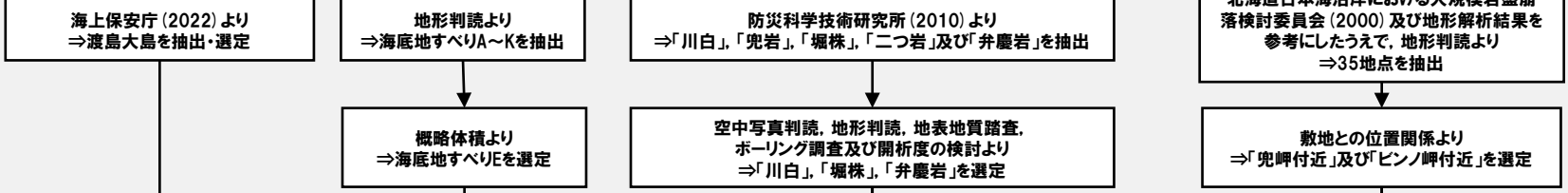
検討概要

- 地震以外の要因に伴う津波として、火山による山体崩壊に伴う津波、海底地すべりに伴う津波、陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波及び陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波について検討した。
- 敷地周辺における各事象の既往津波の記録及び敷地周辺に影響を与える可能性のある各事象について文献調査を実施し、事象毎に評価対象の抽出・選定を行った。
- 事象毎に数値シミュレーションを実施し、その結果から最大ケースとなる波源として、陸上地すべり（川白）を津波発生要因の組合せの検討対象波源とした。



敷地周辺における各事象による既往津波の調査

評価対象の抽出・選定

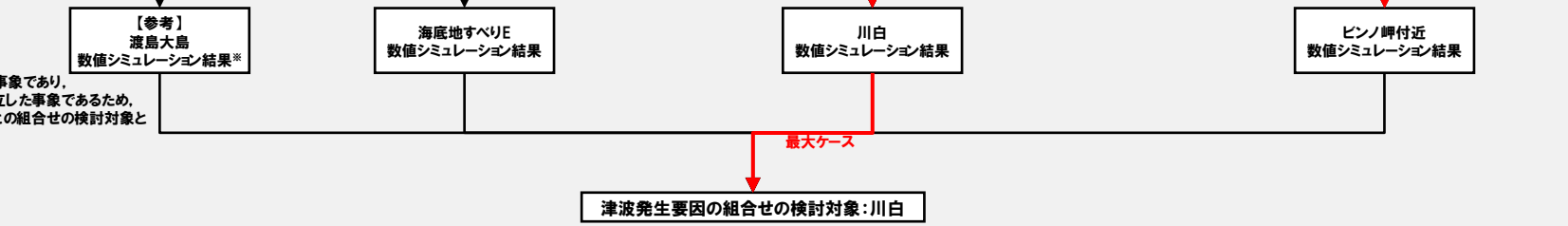


津波の数値シミュレーション*

*Kinematic landslideモデル及び二層流モデルによる津波シミュレーションの比較検討を実施し、安全側の評価となる手法を用いる。



津波発生要因の組合せの検討対象



※火山噴火に伴う事象であり、地震事象とは独立した事象であるため、地震に伴う津波との組合せの検討対象としない。

4. 1 火山による山体崩壊に伴う津波

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

検討方針

一部修正 (H27/5/15審査会合)

○敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある火山現象について、以下のフローで検討を実施した。

検討フロー

【検討1:敷地周辺における火山現象による既往津波の確認】

○文献調査により、敷地周辺において火山現象による既往津波の記録の有無及び敷地周辺に影響を与える可能性がある火山現象を確認する。

【検討2:検討対象火山の抽出(海域火山・陸域火山)】

《海域火山》

○以下のうち、完新世に活動があった又は完新世に活動を行っていないものの将来の活動可能性が否定できないものを抽出する。

- 海上保安庁(2022)の海域火山データベースにて日本海に分布しているもの
- 敷地から半径160km以内にある第四紀火山のうち、日本海に分布しているもの

《陸域火山》

○以下のうち、完新世に活動があった又は完新世に活動を行っていないものの将来の活動可能性が否定できないもので、敷地との距離・位置関係を考慮して山体崩壊等により津波が発生する可能性があるものを抽出する。

- 敷地から半径160km以内にある第四紀火山のうち、日本海沿岸に面した火山

【検討3:崩壊規模の評価】

○検討2で抽出した火山現象から、過去に発生した山体崩壊と今後発生する可能性のある山体崩壊を比較し、崩壊規模がより大きくなる条件を選定する。

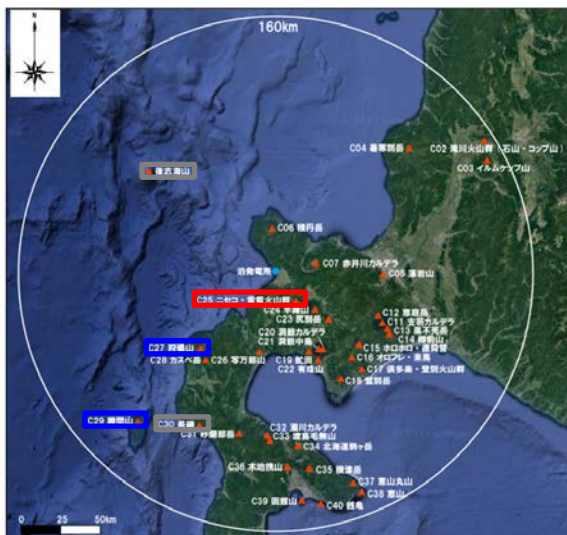
【検討4:数値シミュレーションの実施】

○数値シミュレーションにより敷地への影響を評価する。
○二層流モデル及びkinematic landslideモデルを比較したうえで、安全側の評価手法を用いる。

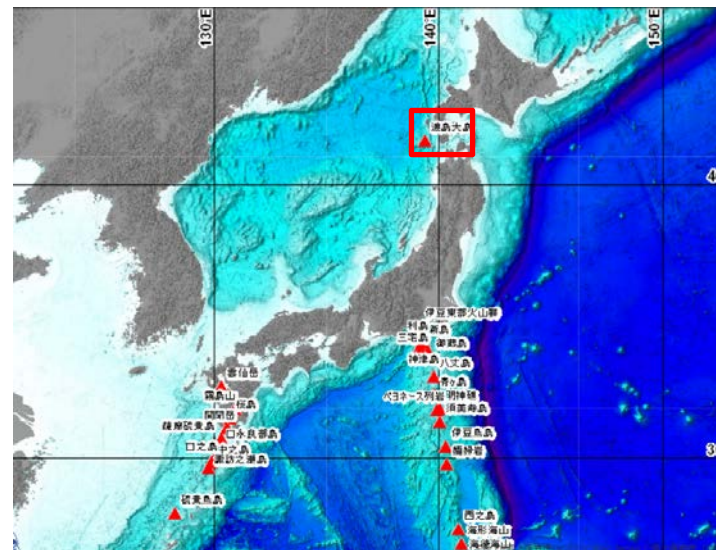
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

検討対象抽出・選定

- 文献調査の結果、敷地周辺において火山現象による歴史津波の記録はなかった。
 - 火山事象に起因する津波の敷地への影響が想定される第四紀火山のうち、敷地から半径160km以内の範囲かつ日本海に分布する火山として、中野ほか編(2013)「日本の火山(第3版)」及び中野ほか編(2013)に基づくweb版のデータベース(以降、産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」と呼ぶ)並びに西来ほか編(2012)より、ニセコ・雷電火山群、狩場山、勝潤山、長磯及び後志海山を抽出した。
 - また、日本海に分布する海底火山として、海上保安庁(2022)の海域火山データベースより、渡島大島を抽出した。
 - 上記のうち、第四紀以降の火山であり、完新世に活動があった又は完新世に活動を行っていないものの将来の活動可能性が否定できないものとして「渡島大島」を選定した。
- ※1:抽出した火山のうち条件を満たすニセコ・雷電火山群、狩場山及び勝潤山については火山活動に伴う大規模崩壊が発生する可能性は小さいことから敷地への影響が想定される火山として選定しない(資料3の4.1「火山による山体崩壊に伴う津波」参照)
- ※2:後志海山は活動年代は約90万年前前後(古くても130万年)とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。また、全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価し、敷地への影響が想定される火山として選定しない。



敷地から半径160km以内の範囲にある第四紀火山の位置図
(第四紀火山の位置は産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」、西来ほか編(2012)に基づく。
地質図Navi(ver.1.2.1.20230302)を基に作成)



海域火山データベース
(海上保安庁(2022)より引用)

- 完新世に活動があった火山*
- 完新世に活動を行っていないものの将来の活動可能性が否定できない火山*
- 将来の活動可能性が十分に小さい火山*

*津波評価に影響のある火山として、日本海に分布する火山を抽出した。

4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

評価対象の選定

一部修正 (H27/5/15審査会合)

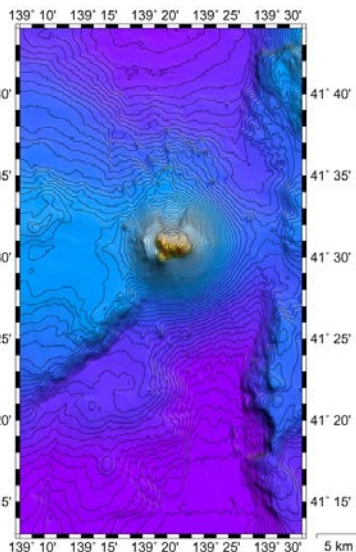
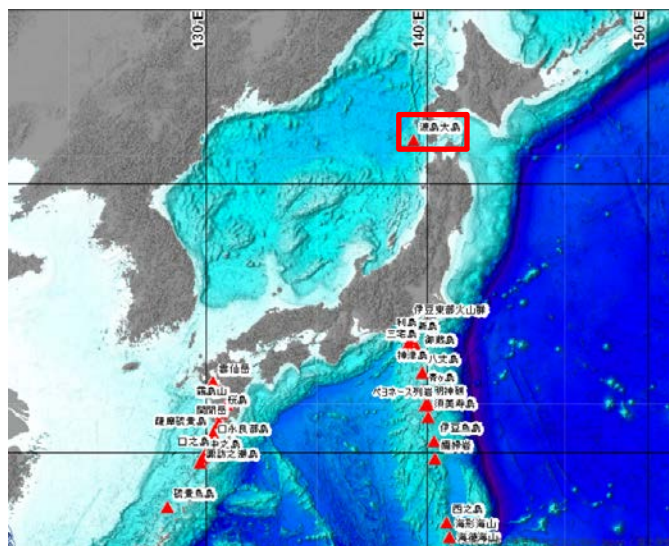
○敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある火山現象として、文献から渡島大島の山体崩壊を選定した。

位置

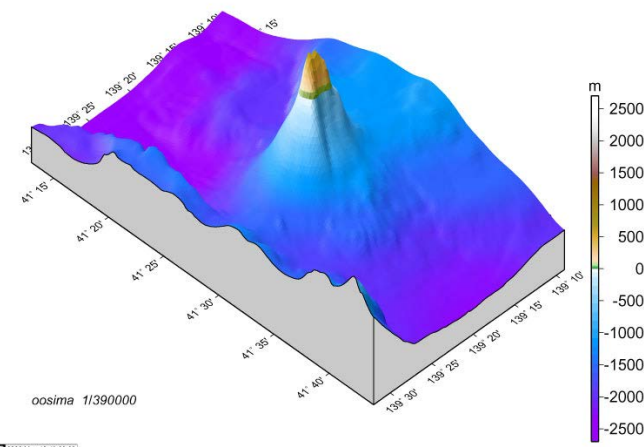
緯度	経度	標高	点名	出典
41° 30' 36"N	139° 22' 02"E	732m	江良岳 (三角点・大島)	日本活火山総覧 (第4版), 世界測地系

概要

火山名	概要	火山地形	年代
渡島大島 (松前大島)	溶岩流堆積物 (70 cu.km) 火砕流堆積物 (0.1 cu.km以下) 降下テフラ堆積物 (10 cu.km)	主要な山体は火砕丘と溶岩流で構成され、まれに溶岩ドーム、山頂付近に馬蹄形カルデラが認められる。	更新世末期 or 完新世～1790年 噴火記録:1741～1742, 1759, 1786, 1790



海底地形図



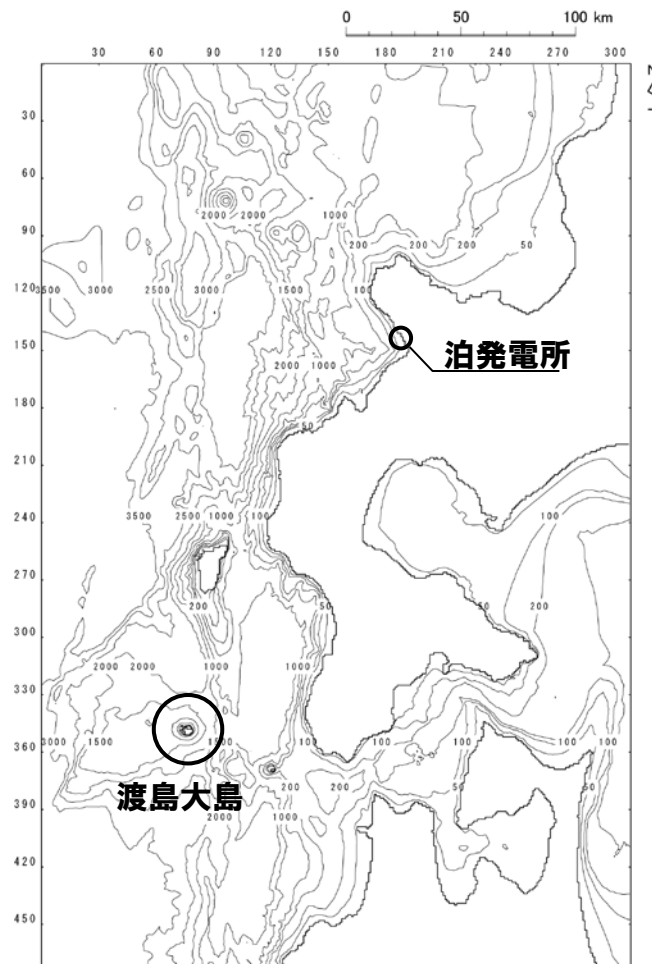
海上保安庁 (2022) : 海底火山データベース

4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

津波の数値シミュレーション(渡島大島)(1/3) 検討方針

一部修正(H27/5/15審査会合)

○渡島大島の山体崩壊に伴う津波の影響を確認する目的で、Satake(2007)に基づく1741年(渡島西岸)津波の再現計算を実施する。



渡島大島位置図

4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

津波の数値シミュレーション (渡島大島) (2/3) 計算条件

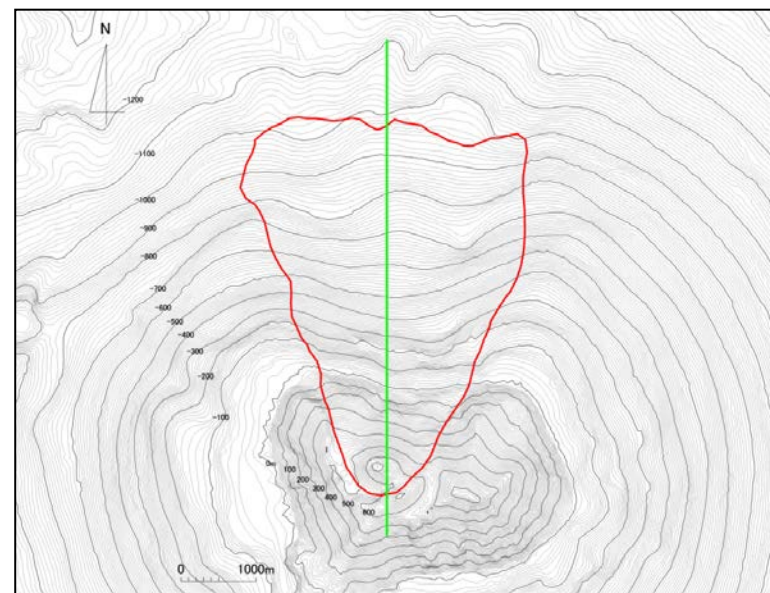
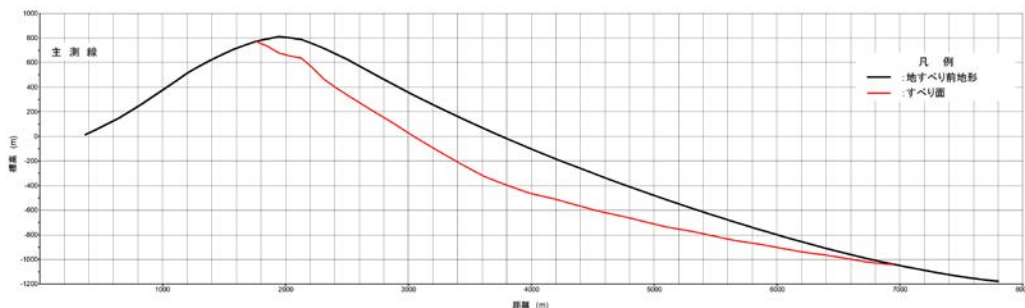
一部修正 (H27/8/21審査会合)

○Satake (2007) に示されている渡島大島周辺の測深図に基づく地形変化から推定された1741年山体崩壊の地形変化量分布を用いて、Kinematic landslideモデル及び二層流モデルによる津波シミュレーションの比較検討を実施し、安全側の評価となるKinematic landslideモデルの手法を用いた (津波シミュレーションの比較検討は資料3の4.1「火山による山体崩壊に伴う津波」参照)。

【津波シミュレーション (Kinematic landslideモデル)】

入力データ	入力値	備考
計算時間間隔 Δt (s)	0.1	○計算安定条件を満たすように設定した。
計算時間 (時間)	3	-
比高変化 (m)	最大388	○Satake (2007) による崩壊前後の地形を基に設定した。
鉛直変位ライズタイム (s)	120	○Satake (2007) に基づき設定した。
変動伝播速度 (m/s)	40	○Satake (2007) に基づき設定した。

渡島大島 (Satake2007)



Stake (2007) に基づき設定した
地形変化量分布

4.1 火山による山体崩壊に伴う津波

津波の数値シミュレーション（渡島大島）（3/3） 数値シミュレーション結果

一部修正（H27/8/21審査会合）

○火山による山体崩壊（渡島大島）の数値シミュレーション結果は、以下のとおりである。

火山による山体崩壊（渡島大島）の数値シミュレーション結果

区分	火山による山体崩壊 （渡島大島）※
	評価値
防潮堤前面 （上昇側）	1.59m
3号炉 取水口 （上昇側）	1.32m
1, 2号炉 取水口 （上昇側）	1.22m
放水口 （上昇側）	1.13m
3号炉 取水口 （下降側）	1.01m
「貯留堰を 下回る時間」	0s

※火山噴火に伴う事象であり、地震事象とは独立した事象であるため、地震に伴う津波との組合せの検討対象としない。

4. 2 海底地すべりに伴う津波

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

4.2 海底地すべりに伴う津波

海底地すべりに起因する津波の検討フロー

一部修正 (H26/12/5審査会合)

○敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある海底地すべりについて、以下のフローで検討を実施した。

検討フロー

【検討1: 敷地周辺における海底地すべりによる既往津波の確認】

- 文献調査により、敷地周辺において海底地すべりによる既往津波の記録の有無及び敷地周辺に影響を与える可能性がある海底地すべりを確認する。

【検討2: 敷地前面海域の海底地すべり地形の抽出】

- 海底地形データを用いた海底地形判読を実施し、さらに音波探査記録により海底地すべりの有無について確認して、海底地すべり地形を抽出する。

【検討3: 発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある海底地すべり地形の抽出】

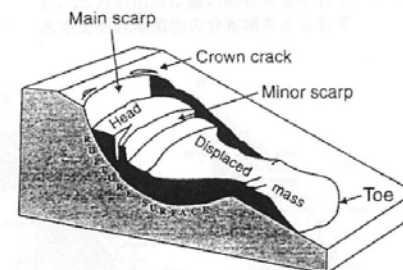
- 検討2で抽出した海底地すべり地形のうち発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある海底地すべり地形について、以下を基本方針として抽出する。
 - 隣接する海底地すべりについては、安全評価上、同時崩壊するものとする。

【検討4: 検討対象海底地すべり地形の選定】

- 検討3で抽出した発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある海底地すべり地形から、崩壊規模、敷地との距離・位置関係等を考慮して敷地への影響が最も大きくなる海底地すべり地形を検討対象海底地すべり地形として選定する。

【検討5: 数値シミュレーションの実施】

- 数値シミュレーションにより敷地への影響を評価する。
- 二層流モデル及びkinematic landslideモデルを比較したうえで、安全側の評価手法を用いる。



海底地すべりの模式図
(Hampton and Lee (1996) より引用)

《海底地すべり地形の特徴》

- 馬蹄形あるいはコの字型の滑落崖があり、これに對をなして、その下方に舌状の傾斜面の土塊がある。

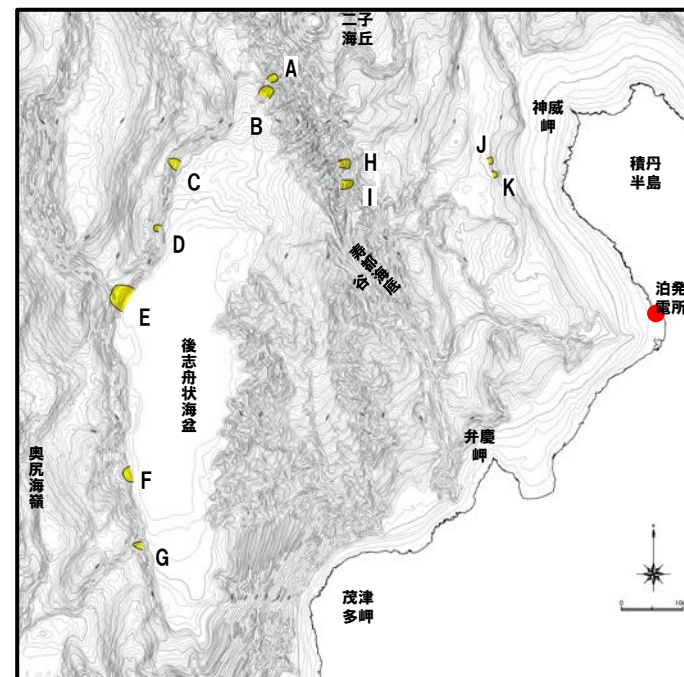
4.2 海底地すべりに伴う津波

評価対象の選定

一部修正 (H26/12/5審査会合)

- 広域的概査として文献調査の結果、敷地周辺において海底地すべりによる既往津波の記録はなかった。
- また、敷地周辺海域には、海底地すべり地形は認められなかった。
- 局地的精査として敷地前面海域は、日本水路協会のM7000シリーズ海底地形データを用いた。
- 海底地形図による地形判読及び海上音波探査記録により、以下の観点から、海底地すべりの可能性がある地形として、海底地すべりA～Kを抽出した。
 - 馬蹄形、半円形及びコの字形などの平面形で、凹地を呈する滑落崖状、抜け跡状の地形。
 - 下方に地すべり土塊(台地状、扇状地状の地形)がある。
 - 下方の地すべり土塊は、薄く広がる特徴がある。
- 抽出した海底地すべりA～Kについて、概略体積を算出した。

海底地すべり	長さ (m)	幅 (m)	高低差 (m)	推定厚さ (m)	長さ×推定厚さ (m ²)	概略体積 (m ³)	敷地からの距離 (km)
A	2,000	1,200	180	56	111,000	44,000,000	72
B	2,200	2,000	230	61	134,000	90,000,000	71
C	2,000	1,600	280	56	111,000	59,000,000	80
D	1,000	1,000	260	28	28,000	9,000,000	81
E	3,000	3,100	350	83	250,000	258,000,000	87
F	1,400	2,200	140	39	54,000	40,000,000	89
G	1,700	1,000	280	47	80,000	27,000,000	91
H	1,600	1,400	420	44	71,000	33,000,000	55
I	1,700	1,400	480	47	80,000	37,000,000	54
J	700	1,000	120	19	14,000	5,000,000	37
K	900	1,000	130	25	23,000	8,000,000	35



- 海底地すべりA～Kのうち、概略体積が最も大きくなるのは海底地すべりEであることから、敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある津波として、海底地すべりEを選定した。

4.2 海底地すべりに伴う津波

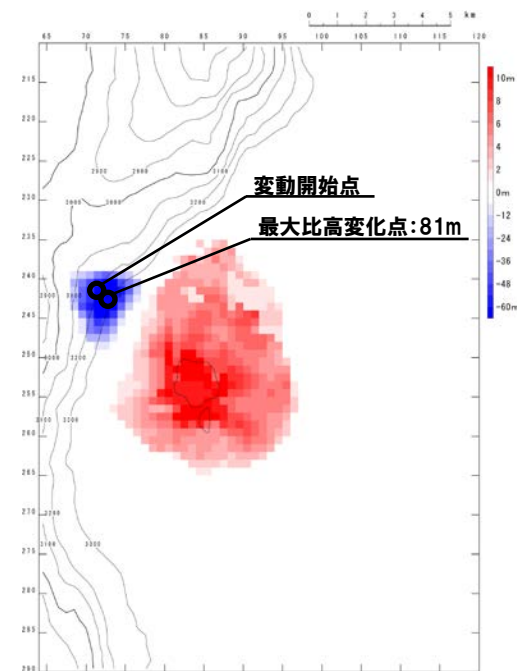
津波の数値シミュレーション(海底地すべりE) (1/2) 計算条件

一部修正 (H27/8/21審査会合)

○FLOW-3Dによる10分後の地形変化量分布を用いて、Kinematic landslideモデル及び二層流モデルによる津波シミュレーションの比較検討を実施し、安全側の評価となるKinematic landslideモデルの手法を用いた(津波シミュレーションの比較検討は資料3の4.2「海底地すべりに伴う津波」参照)。

【津波シミュレーション(Kinematic landslideモデル)】

入力データ	入力値	備考
計算時間間隔 Δt (s)	0.1	○計算安定条件を満たすように設定した。
計算時間(時間)	3	-
比高変化 (m)	最大81	○FLOW-3Dによる10分後の地形変化量から設定した。
鉛直変位ライズタイム (s)	240	○FLOW-3Dによる鉛直方向の変化率から安全側の評価として設定した。
変動伝播速度 (m/s)	8	○FLOW-3Dによる最大速度から安全側の評価として設定した。



FLOW-3Dによる10分後の地形変化量分布

4.2 海底地すべりに伴う津波

津波の数値シミュレーション(海底地すべりE) (2/2) 数値シミュレーション結果

一部修正 (H27/8/21審査会合)

○海底地すべりEの数値シミュレーション結果は、以下のとおりである。

海底地すべりEの数値シミュレーション結果

区分	海底地すべりE
	評価値
防潮堤前面 (上昇側)	0.24m
3号炉 取水口 (上昇側)	0.22m
1, 2号炉 取水口 (上昇側)	0.22m
放水口 (上昇側)	0.24m
3号炉 取水口 (下降側)	0.16m
「貯留堰を 下回る時間」	0s

4. 3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定（位相の観点の検討）	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価（水位の観点の検討）	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に起因する津波の検討フロー

一部修正（H27/5/15審査会合）

○敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）について、以下のフローで検討を実施した。

検討フロー

【検討1：敷地周辺における陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）による既往津波の確認】

○文献調査により、敷地周辺において陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）による既往津波の記録の有無及び敷地周辺に影響を与える可能性がある陸上地すべりを確認する。

【検討2：敷地周辺の地すべり地形の確認】

○防災科学技術研究所（2010）の地すべり地形分布図データベースに示されている地すべり地形のうち、敷地から半径30km程度の範囲かつ沿岸部に分布する地すべり地形を確認する。

【検討3：発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある地すべり地形の抽出】

○検討2で確認した地すべり地形のうち発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある地すべり地形を空中写真判読、地表地質踏査等により抽出する。

【検討4：評価対象地すべり地形の選定】

○検討3で抽出した発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある地すべり地形について、以下を基本方針として選定する。
 > 地すべりブロックについては、安全側の評価として同時崩壊するものとする。

【検討5：数値シミュレーションの実施】

○数値シミュレーションにより敷地への影響を評価する。
 ○二層流モデル及びkinematic landslideモデルを比較したうえで、安全側の評価手法を用いる。

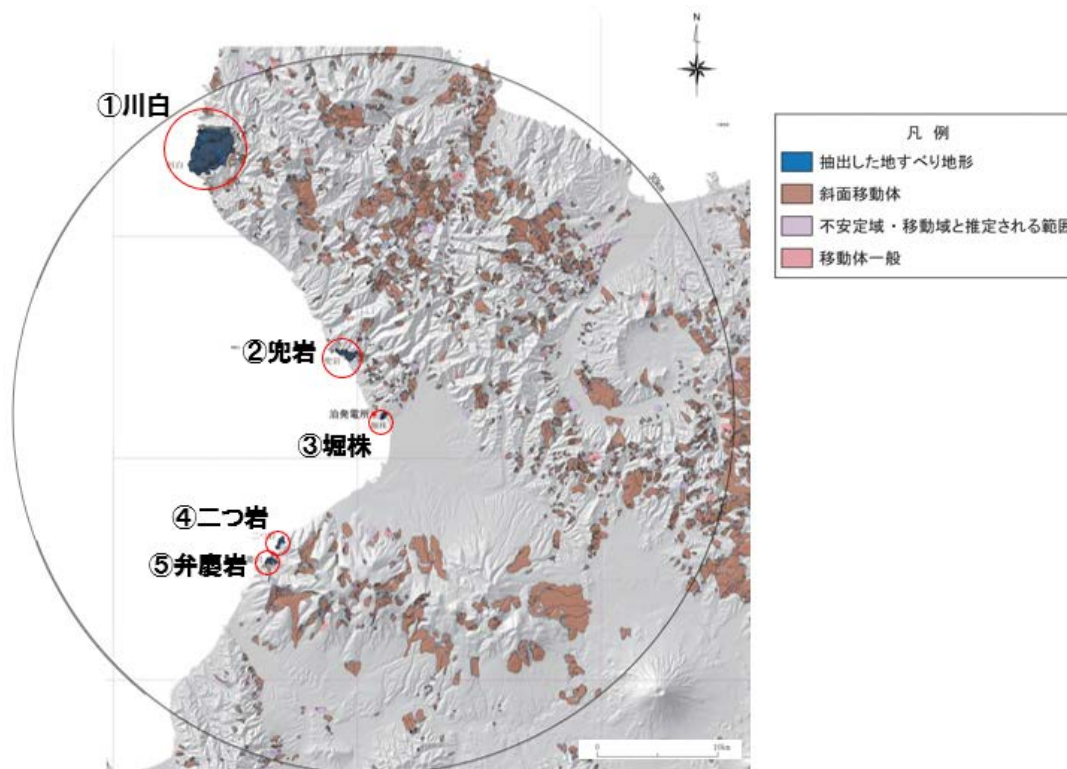
4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

評価対象の選定

一部修正 (H27/5/15審査会合)

- 文献調査の結果、敷地周辺において陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）による既往津波の記録はなかった。
- 防災科学技術研究所（2010）に示される地すべり地形のうち、敷地から半径30km程度の沿岸に分布する地すべり地形として、「川白」、「兜岩」、「堀株」、「二つ岩」及び「弁慶岩」を確認した。
- 空中写真判読、地表地質踏査及びボーリング調査結果から発電所に影響のある津波を発生させる可能性がある地すべり地形として「川白」、「堀株」※及び「弁慶岩」を抽出した。

※空中写真判読の結果、発電所に影響のある津波を発生させる可能性はないと考えられるが、敷地までの距離を考慮し抽出した。



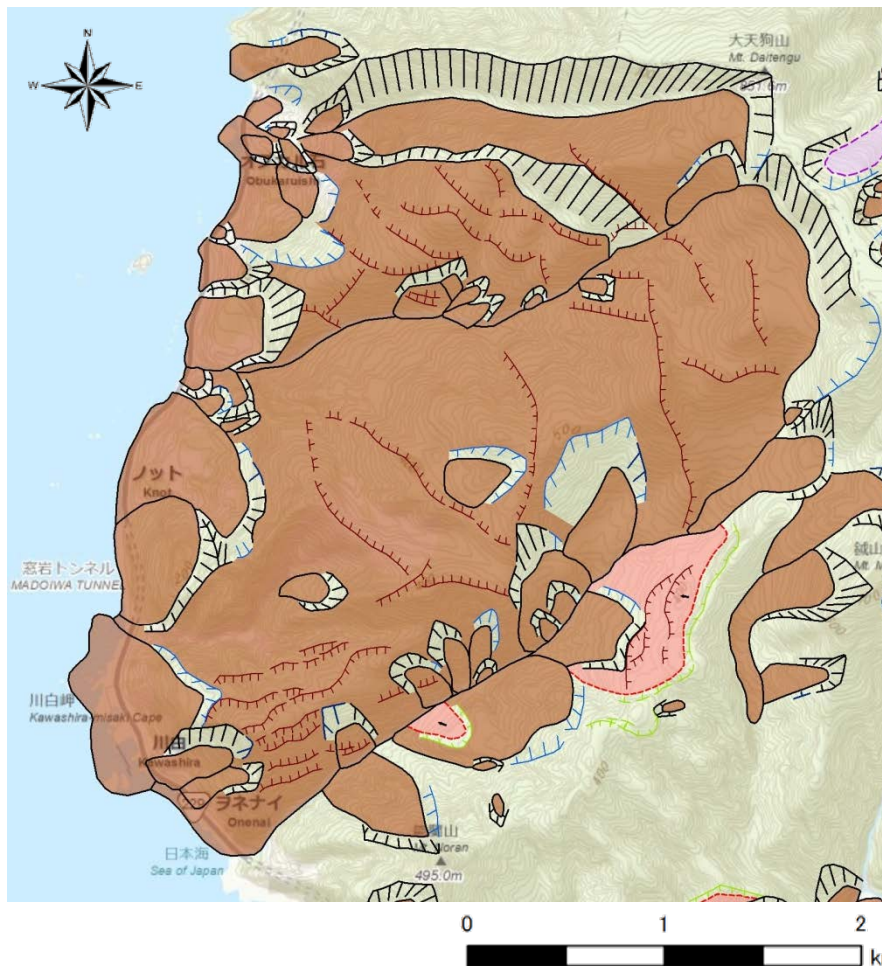
地すべり地形位置図
(防災科学技術研究所(2010)に一部加筆)

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

評価対象地すべり地形の選定 (1/4) 川白 (1/2)

一部修正 (H27/5/15審査会合)

○防災科学技術研究所 (2010) では、川白地点において多数のブロックからなる地すべり地形が示されている。



地すべり地形位置図 (川白)
(防災科学技術研究所 (2010) より引用)

I. 輪郭構造 Boundary Structures

A. 滑落崖と側方崖 Main scarp and lateral scarp (flank)

1. 新鮮なまたは開析されていない冠頂をもつ滑落崖
Main and/or lateral scarp of which crown is fresh or not dissected.
2. 部分的に開析されている冠頂をもつ滑落崖
Partially dissected crown.
3. 冠頂が著しく開析された滑落崖
Mostly dissected crown.
4. 冠頂が丸味をおびて不明瞭になった滑落崖
Roundedly subaead and vague crown.
5. 開析されて無くなってしまった冠頂・滑落崖の推定復元位置
The missing part of the scarp and crown by dissection.
6. 共通の冠頂をもち、互いに反対方向を向く滑落崖
Joint crown which divides two main scarps throwing opposite slope directions.
7. 中・細粒の流れ崖すべり崖が露出し、滑落崖にある急峻な斜面を反対側向きの反対側向きのすべり崖との交差
Deposited slide surface without sharp scarp slip of the slide surface is mostly jointed to "B". The crown is defined by the intersection between the opposite slope and the slide surface.

8. 後方崖、多重稜線等 Lunar or crown cracks, multiple scarps and ridges.

B. 移動体の輪郭・境界 Margin of moving mass

1. 後方に滑落崖があり、移動体の輪郭が明確ないし判定可能
Definite and probable margin of the moving mass with a main scarp at the backward or upper slope.
2. 後方の滑落崖は不明瞭であるが、移動体の輪郭の判定が困難
The questionable part of the margin. (Brown outline)
3. 滑落崖はほとんど開析されてしまったが、過去の移動体の一部 (不安定土塊) が残存している
Moving mass margin without main scarp and crown symbols: The scarp has been almost eroded away. (Gray outline)
4. ほかの移動体や堆積物におおわれた部分
A part of margin overlain by another moved mass or deposits.
5. 斜面体の移動体の初期状態、基岩から分離していないとしても不安定域、移動域と推定される
Margin of a mass movement at the initial stage from the original slope. Probable boundary of an area inferred as an unstable or quasi-moving mass without clear detachment structures between the mass and bedrocks.
6. 斜面移動体かどうか判定できない山体・小丘
A mountain or hill difficult to identify whether mass is moving or not.

II. 内部構造 Interior Structures

1. 二次・小滑落崖、崖線の開析程度に応じて輪郭構造の場合と同様に表わす
Secondary scarp: The crown is similarly shown in a main scarp.
2. サブユニットの境界、内部 (二次) 移動体輪郭
Boundary between sub-units or an interior moving mass.
3. 移動体内の小尾根
Ridge (interior).
4. 幅の広い溝状凹地、亀裂
Wide trench or open crack.
5. 幅の狭い溝状凹地、亀裂
Narrow trench or open crack.
6. 雁行亀裂
Echelon cracks.
7. 線状窪地・小谷底線
Linear depression or valley floor line. Arrow shows the downstream.

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

評価対象地すべり地形の選定（2/4） 川白（2/2）

一部修正（H27/5/15審査会合）

○各ブロックを対象に、空中写真判読、地表地質踏査及び開析度の検討を実施し、不安定ブロックの可能性を評価した。

不安定ブロックの可能性の評価

地すべりブロック	空中写真判読※1	地表地質踏査※1	開析度の検討※2	不安定ブロックの可能性の評価※3
1	○	△	×	不安定ブロックである可能性を否定できない。
2	△	○	—	不安定ブロックである可能性を否定できない。
3	×	×	×	不安定ブロックである。
4	×	×	○	不安定ブロックではない。
5	×	×	—	不安定ブロックである可能性が大きい。
6	×	×	—	不安定ブロックである可能性が大きい。
7	×	×	—	不安定ブロックである可能性が大きい。
8	△	○	×	不安定ブロックである可能性を否定できない。
9	△	○	○	不安定ブロックではない。
10	△	△	×	不安定ブロックである可能性が大きい。
11	△	△	—	不安定ブロックである可能性が大きい。
12	×	×	—	不安定ブロックである可能性が大きい。
13	○	○	○	不安定ブロックではない。
14	○	○	○	不安定ブロックではない。
15	○	○	○	不安定ブロックではない。
16	○	○	○	不安定ブロックではない。
17	○	○	○	不安定ブロックではない。

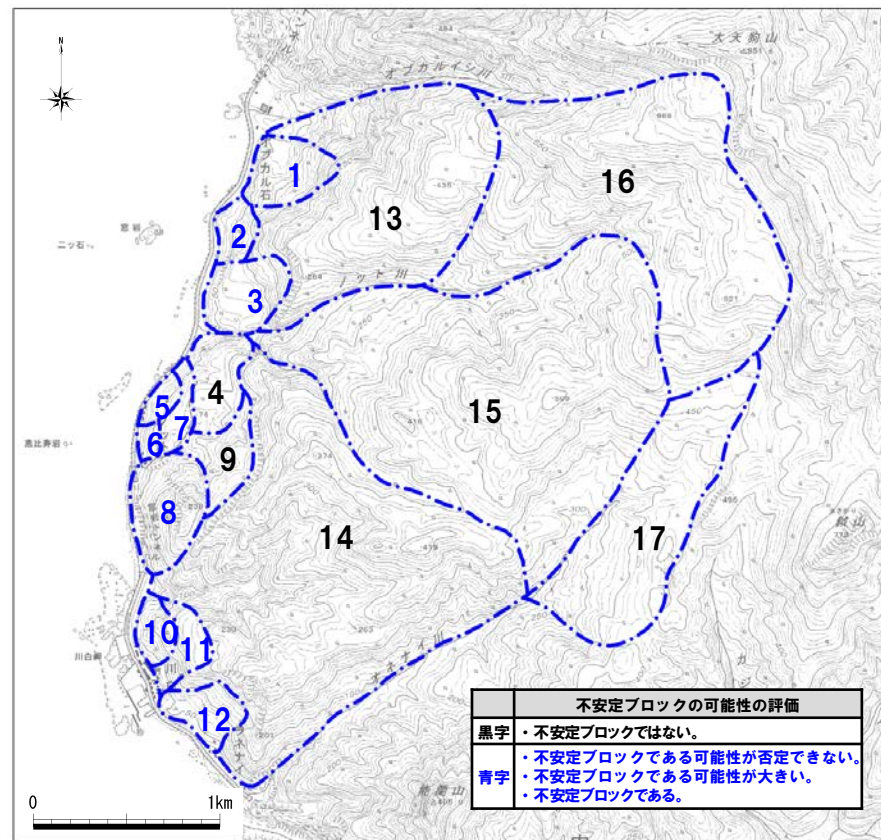
※1 ○：不安定ブロックではない。若しくは、不安定ブロックである可能性を否定できない。
△：不安定ブロックである可能性が大きい。

×：不安定ブロックである。

※2 ○： $F_s \geq 1.10$ である。

×： $F_s < 1.10$ である。

※3 空中写真判読、地表地質踏査及び開析度の検討より総合的に評価している。



地すべりブロック図

○不安定ブロックの可能性を評価結果を踏まえると、ブロック1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12の崩壊が想定されることから、敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある津波として、川白を選定した。

○なお、安全側の評価としてブロック1～17が一括崩壊した場合を想定した。

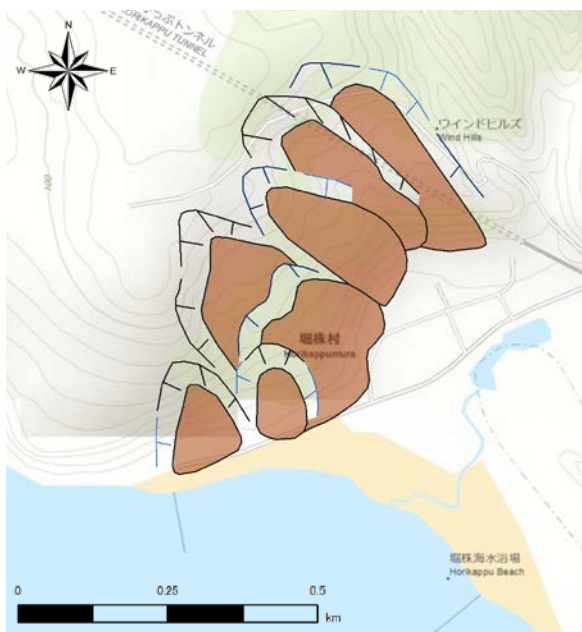
4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

評価対象地すべり地形の選定（3/4） 堀株

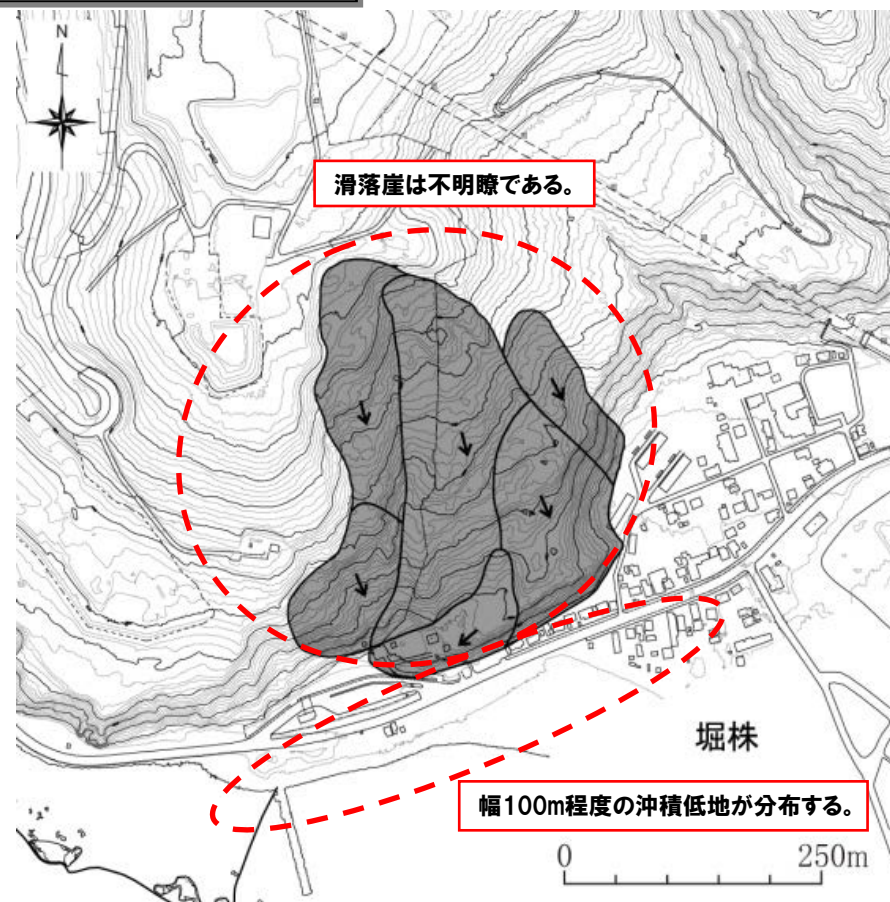
一部修正（H27/5/15審査会合）

【空中写真判読結果】

- 地すべり地形は、三角形に近い馬蹄形を呈し、滑落崖の比高は数mと推定されるが、不明瞭である。
- 幅100m程度の沖積低地が分布することから、これらの堆積物の滑動による津波を起こす恐れはないと評価した。



地すべり地形位置図（堀株）
（防災科学技術研究所（2010）より引用）



空中写真判読結果（堀株）

- 空中写真判読結果を踏まえると、敷地に影響のある津波を発生させる可能性はないと考えられるが、敷地までの距離を考慮し、堀株を選定した。

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

評価対象地すべり地形の選定（4/4） 弁慶岩

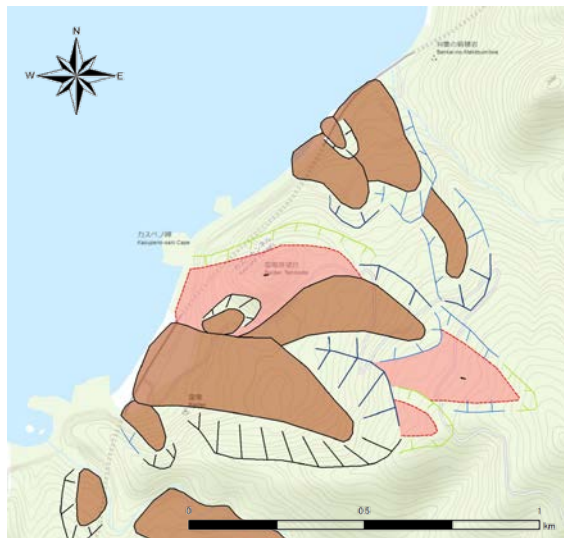
一部修正（H27/5/15審査会合）

【空中写真判読結果】

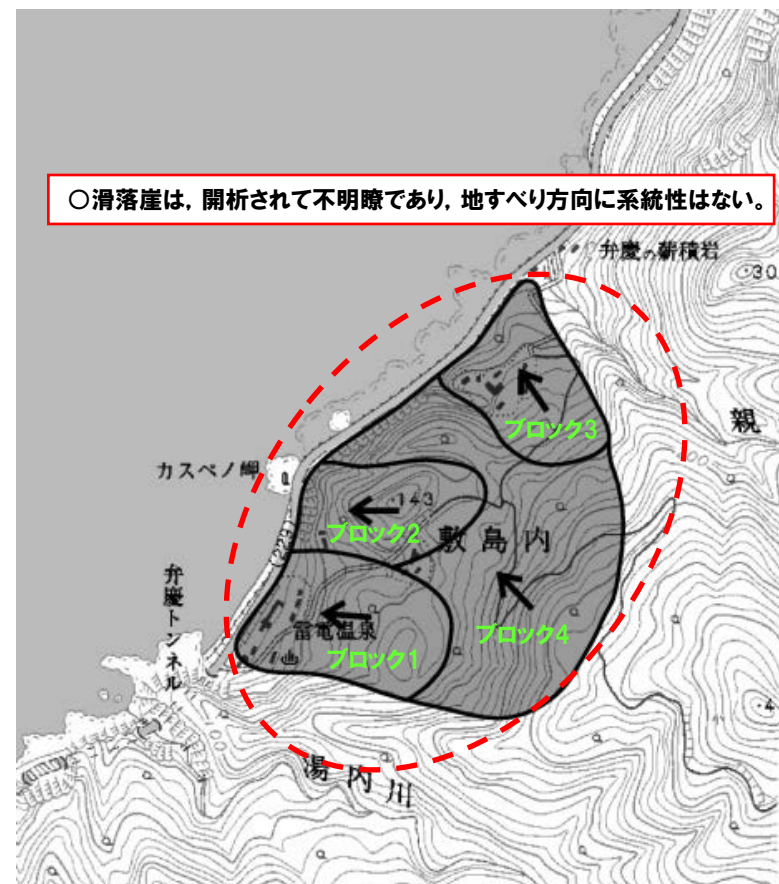
- 地すべり地形は4箇所のブロックから構成される。
- 滑落崖は、開析されて不明瞭であり、地すべり方向に系統性はない。

【地表地質踏査結果】

- ブロック2・4は、海岸部に堅硬な火砕岩類が連続して分布し、地すべりを示唆する状況は認められない。
- ブロック1・3は、地すべり地形の特徴を確認した。



地すべり地形位置図（弁慶岩）
（防災科学技術研究所（2010）より引用）



空中写真判読結果（弁慶岩）

- 空中写真判読結果及び地表地質踏査を踏まえ、ブロック1・3の崩壊を想定し、敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある津波として、弁慶岩を選定した。
- なお、安全側の評価としてブロック1・3が一括崩壊した場合を想定した。

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

津波の数値シミュレーション（陸上地すべり）（1/2） 計算条件

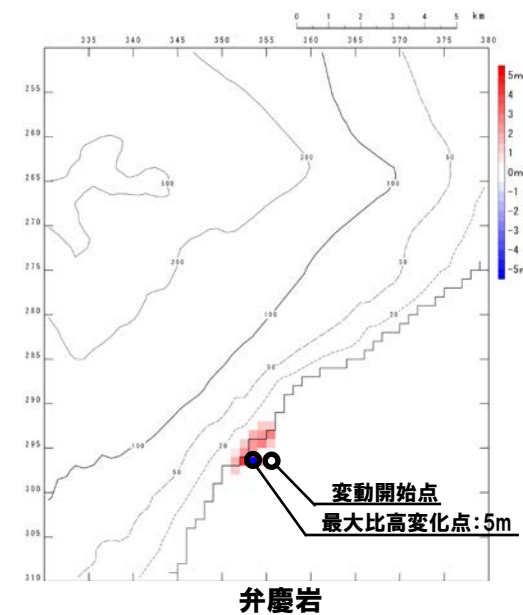
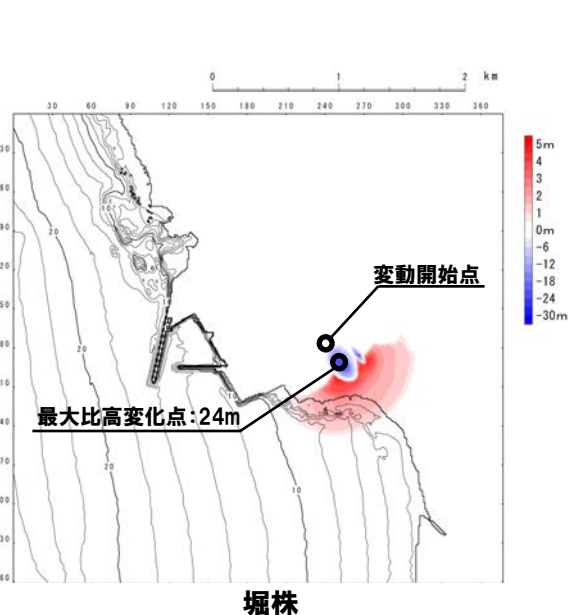
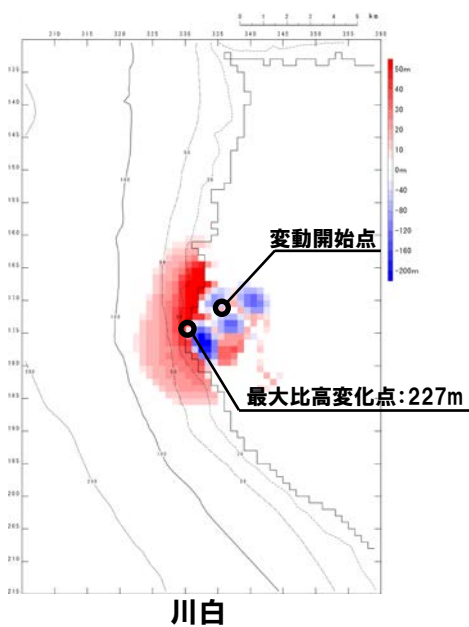
一部修正（H27/8/21審査会合）

○陸上地すべり（川白、堀株及び弁慶岩）を対象とし、TITAN2Dによる10分後の地形変化量分布を用いて、Kinematic landslideモデル※による津波の数値シミュレーションを実施した。

※陸上地すべり（川白）の二層流モデルによる津波シミュレーションとの比較検討結果は資料3の4.3「陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波」参照

【津波シミュレーション（Kinematic landslideモデル）】

入力データ	入力値			備考
	川白	堀株	弁慶岩	
計算時間間隔 Δt (s)	0.1			○計算安定条件を満たすように設定した。
計算時間 (時間)	3			-
比高変化 (m)	最大227	最大24	最大5	○TITAN2Dによる10分後の地形変化量から設定した。
鉛直変位ライズタイム (s)	60	240	120	○TITAN2Dによる鉛直方向の変化率から安全側の評価として設定した。
変動伝播速度 (m/s)	13	3	6	○TITAN2Dによる最大速度から安全側の評価として設定した。



TITAN2Dによる10分後の地形変化量分布

4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波

津波の数値シミュレーション（陸上地すべり）（2/2）数値シミュレーション結果

一部修正（H27/8/21審査会合）

- 陸上地すべり（川白、堀株及び弁慶岩）の数値シミュレーションを実施した結果、川白が最大ケースであった。
- 津波発生要因の組合せの検討対象として、陸上地すべり（川白）を選定する。

陸上地すべり（川白、堀株及び弁慶岩）の数値シミュレーション結果

区分	陸上地すべり		
	川白	堀株	弁慶岩
	評価値	評価値	評価値
防潮堤前面 （上昇側）	4.92m	0.07m	0.21m
3号炉 取水口 （上昇側）	3.45m	0.04m	0.12m
1, 2号炉 取水口 （上昇側）	3.64m	0.03m	0.12m
放水口 （上昇側）	5.91m	0.01m	0.07m
3号炉 取水口 （下降側）	4.18m	0.03m	0.14m
「貯留堰を 下回る時間」	38s	0s	0s

※黄ハッチングは評価項目の最大ケースである。

4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定（位相の観点の検討）	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価（水位の観点の検討）	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波

陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に起因する津波の検討フロー

一部修正（H27/8/21審査会合）

○敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）について、以下のフローで検討を実施した。

検討フロー

【検討1：敷地周辺における陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）による既往津波の確認】

- 文献調査により、敷地周辺において陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）による既往津波の記録の有無及び敷地周辺に影響を与える可能性がある岩盤崩壊を確認する。

【検討2：評価対象の抽出】

- 文献調査による崩壊事例を参考に、地形解析により岩盤崩壊の可能性がある急傾斜地を抽出する。

【検討3：評価対象の選定】

- 抽出された地形のうち、敷地への影響が大きいと想定される地点において地形判読を行い、崩壊地形を設定する。
- 崩壊地形として設定した地点について、概略体積を算出する。

【検討4：数値シミュレーションの実施】

- 数値シミュレーションにより敷地への影響を評価する。
- 陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）の検討結果から、安全側の評価となるモデルの手法を用いる。

4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波

評価対象の選定

一部修正 (H27/8/21審査会合)

- 文献調査の結果、敷地周辺において陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）による既往津波の記録はなかった。
- 北海道日本海沿岸における大規模岩盤崩落検討委員会（2000）を参考に、大規模な急傾斜地が存在する川白～ピンノ岬付近の範囲で地形判読を実施した結果、崩壊地形として35地点を抽出し、その概略体積を算出した。

崩壊地点の概略体積

No.	幅 (m)	長さ (m)	厚さ (m)	概略体積 (m ³)
1	50	80	10	1.33×10 ⁴
2	20	20	40	5.33×10 ²
3	80	30	16	1.28×10 ⁴
4	40	40	8	4.27×10 ³
5	30	40	6	2.40×10 ³
6	20	20	4	5.33×10 ²
7	90	20	18	1.08×10 ⁴
8	180	50	26	7.80×10 ⁴
9	80	10	16	4.27×10 ³
10	20	20	4	5.33×10 ²
11	110	30	16	1.76×10 ⁴
12	50	40	10	6.67×10 ³
13	100	100	20	6.67×10 ⁴
14	110	50	16	2.93×10 ⁴
15	210	80	30	1.68×10 ⁵
16	140	50	20	4.67×10 ⁴
17	60	20	12	4.80×10 ³
18	200	50	29	9.67×10 ⁴

No.	幅 (m)	長さ (m)	厚さ (m)	概略体積 (m ³)
19	140	90	20	8.40×10 ⁴
20	130	60	88	4.94×10 ⁴
21	110	80	89	4.69×10 ⁴
22	170	80	24	1.09×10 ⁵
23	170	90	24	1.22×10 ⁵
24	400	270	40	1.44×10 ⁶
25	610	310	61	3.85×10 ⁶
26	460	260	46	1.83×10 ⁶
27	620	150	62	1.92×10 ⁶
28	420	340	42	2.00×10 ⁶
29	360	470	36	2.03×10 ⁶
30	320	310	32	1.06×10 ⁶
31	180	240	26	3.74×10 ⁵
32	110	150	16	8.80×10 ⁴
33	200	150	29	2.90×10 ⁵
34	150	200	21	2.10×10 ⁵
35	260	70	37	2.24×10 ⁵

□ : 兜岬付近

□ : ピンノ岬付近



崩壊地形箇所

- 崩壊地形として抽出した35地点のうち、敷地に影響のある津波を発生させる可能性がある斜面崩壊（岩盤崩壊）の地点として、敷地との距離が近い兜岬付近及びピンノ岬付近を選定した。
- なお、安全側の評価としてそれぞれ隣接する崩壊範囲が一括崩壊した場合を想定した。

4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波

津波の数値シミュレーション（岩盤崩壊）（1/2） 計算条件

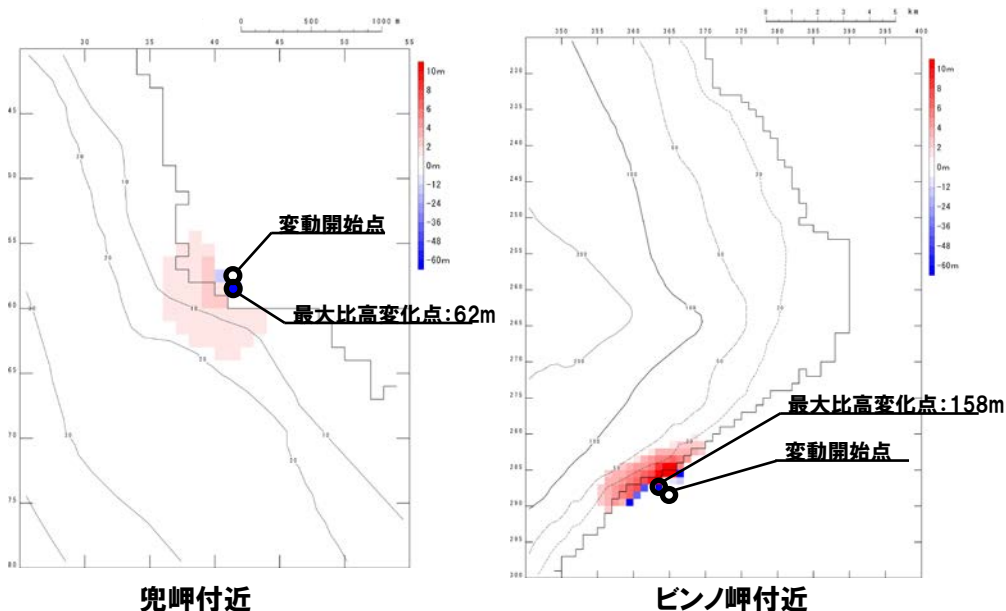
一部修正（H27/8/21審査会合）

- 岩盤崩壊（兜岬付近及びピンノ岬付近）を対象とし、TITAN2Dによる10分後の地形変化量分布を用いて、Kinematic landslideモデル※による津波の数値シミュレーションを実施した。
- なお、その他の計算条件は日本海東縁部に想定される地震に伴う津波の計算条件と同様とし、健全地形モデルを用いた。

※陸上の斜面崩壊（陸上地すべり）の検討結果から、安全側の評価となるKinematic landslideモデルの手法を用いる。

【津波シミュレーション（Kinematic landslideモデル）】

入力データ	入力値		備考
	兜岬付近	ピンノ岬付近	
計算時間間隔 Δt (s)	0.1		○計算安定条件を満たすように設定した。
計算時間 (時間)	3		-
比高変化 (m)	最大62	最大158	○TITAN2Dによる10分後の地形変化量から設定した。
鉛直変位ライズタイム (s)	60	60	○TITAN2Dによる鉛直方向の変化率から安全側の評価として設定した。
変動伝播速度 (m/s)	21	29	○TITAN2Dによる最大速度から安全側の評価として設定した。



TITAN2Dによる10分後の地形変化量分布

4.4 陸上の斜面崩壊（岩盤崩壊）に伴う津波

津波の数値シミュレーション（岩盤崩壊）（2/2） 数値シミュレーション結果

一部修正（H27/8/21審査会合）

- 岩盤崩壊（兜岬付近及びピンノ岬付近）の数値シミュレーションを実施した結果、ピンノ岬付近が最大ケースであった。
- 津波発生要因の組合せの検討対象として、岩盤崩壊（ピンノ岬付近）を選定する。

岩盤崩壊（兜岬付近及びピンノ岬付近）の数値シミュレーション結果

区分	岩盤崩壊	
	兜岬付近	ピンノ岬付近
	評価値	評価値
防潮堤前面 （上昇側）	0.19m	2.41m
3号炉 取水口 （上昇側）	0.09m	1.53m
1, 2号炉 取水口 （上昇側）	0.08m	1.41m
放水口 （上昇側）	0.15m	1.71m
3号炉 取水口 （下降側）	0.19m	1.57m
「貯留堰を 下回る時間」	0s	0s

※黄ハッチングは評価項目の最大ケースである。

余白

5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ

検討フロー（水位上昇側）

5.1章:評価方針

組合せ対象の選定

- 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波
- 陸上地すべり(川白)に伴う津波

評価方針

【水位上昇側（水位上昇量）】

《泊発電所の波源の特徴（水位上昇側）》

- ① 泊発電所の周辺の海岸地形により、地震に伴う津波は、波源からの入射波（第1波）に加え、岩内側からの反射波（第2波）が発生し、入射波（第1波）と反射波（第2波）の2つのピークが、8分程度の短い間隔で連続して発生する。
- ② 地震に伴う津波は、「日本海東縁部の範囲」内において東西方向位置の変動を考慮する余地があり、この東西方向位置の変動を考慮することによって、敷地に津波が到達する時間（ピークの発生時間の変動幅：約5分～約9分）が大きく変化する。
- ③ 地震以外の要因に伴う津波としては、陸上地すべり(川白)の第1波のピークの水位が高い。

《評価方針（水位上昇側）》

- 組合せ評価（水位上昇側）では、敷地に対して大きな影響を及ぼす波源として、水位上昇量が最大となる波源を選定する。
- 波源の特徴①～③を踏まえると、地震に伴う津波の東西方向位置（位相）の変動を考慮することで、敷地に津波が到達する時間が大きく変化する。地震に伴う津波の第1波・第2波のピークと陸上地すべり(川白)の第1波が重なり、組合せ評価の水位が高くなる。
- 以上から、陸上地すべり(川白)の水位のピークと重なる地震に伴う津波の断層パラメータを網羅的に検討して特定する「**A: ピークが重なる波源の組合せ評価**」を実施する。
- なお、ピークが重ならなくても、地震に伴う津波のうち水位が高い波源であれば、組合せ評価の水位が高くなる可能性があるため、「**B: 水位が高い波源の組合せ評価**」も実施する。
- 以上の「**ピークが重なるかどうか**」に着目した「**A: ピークが重なる波源の組合せ評価**」及び「**水位**」に着目した「**B: 水位が高い波源の組合せ評価**」より、網羅的に敷地に対して大きな影響を及ぼす波源を選定する。

5.2章:ピークが重なる波源の組合せ評価

A:ピークが重なる波源の組合せ評価

- 地震に伴う津波の全波源を検討対象として、位相に影響する断層パラメータを変動させた検討により、ピークが重なる波源を特定する。
- そのうえで、水位に影響する断層パラメータを変動させた検討により、ピークの水位が高くなる波源を選定し、組合せ評価を実施する。

5.3章:水位が高い波源の組合せ評価

B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価

- 「地震に伴う津波」の最大ケース(計18ケース)を検討対象波源として、組合せ評価を実施する。

ピークの水位が高い波源を選定

B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

- 第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位を、陸上地すべり(川白)の第1波のピークと重なる東西方向に、波源位置（位相）の変動を考慮した組合せ評価を実施する。

A・B-1・B-2の組合せ評価結果の中から最大ケースを選定

5.4章:敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

【水位上昇側の最大ケースの妥当性確認】

- 「A:ピークが重なる波源の組合せ評価」及び「B:水位が高い波源の組合せ評価」を実施することで、全波源の中から津波の水位上昇量が最大となる波源を網羅的に選定できていることを確認する。

5.5章:茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ

検討フロー（水位下降側）

5.1章:評価方針

組合せ対象の選定

- 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波
- 陸上地すべり(川白)に伴う津波

評価方針

【水位下降側（貯留堰を下回る時間）】

《泊発電所の波源の特徴（水位下降側）》

- ④泊発電所における水位下降側の津波の特徴として、地震に伴う津波の上昇側の第2波・第4波の間に長い引き波の時間が生ずる。
- ⑤地震に伴う津波の上昇側の第2波と第4波の間の時間は伝播経路の違いによるものであり、波源位置を東西に移動させた場合においても概ね一定である。
- ⑥地震に伴う津波において、水位変動量が大きい波源は振幅が大きいことから、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向がある。

《評価方針（水位下降側）》

- 組合せ評価（水位下降側）では、敷地に対して大きな影響を及ぼす波源として、「貯留堰を下回る時間」が最大となる波源を選定する。
- 組合せ評価において考慮する対象波源は、「**検討対象波源①：地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケース**」に加え、波源の特徴⑥を踏まえ、「**検討対象波源②：地震に伴う津波の水位変動量が大きい波源**」も検討対象とする。
- 上記の検討対象波源を用いた組合せ評価により、地震に伴う津波の上昇側の第2波・第4波の間の引き波時（組合せ評価において水位時刻歴波形の着目する時間帯）において、「地震に伴う津波の下降側の波」と「陸上地すべり(川白)の下降側の波」が組合せ後の「貯留堰を下回る時間」に対する影響が大きくなるように重なり合い、組合せ前の時間より長くなる波源として、敷地に対して大きな影響を及ぼす波源を選定する。

※水位下降側の組合せ評価は、本頁の方針に基づき検討するが整理としては、水位上昇側（前頁参照）のフローに従って整理する。

地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケースの組合せ評価※

検討対象波源①：地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケースの組合せ評価

- 地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを検討対象波源とした組合せ評価※1を実施し、組合せ評価における「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを選定する。

※1:具体的には以下の組合せ評価である（前頁参照）。

- B-1:地震に伴う津波の最大ケース（「貯留堰を下回る時間」の最大ケース）の組合せ評価

地震に伴う津波の水位変動量が大きい波源の組合せ評価※

検討対象波源②：地震に伴う津波の水位変動量が大きい波源の組合せ評価

- 左記の検討対象波源①に加えて、泊発電所の波源の特徴⑥より、水位変動量の大きい波源は振幅が大きく、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向があることを踏まえ、水位変動量が大きい波源を検討対象波源とした組合せ評価※2からも「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを選定する。

※2:具体的には以下の組合せ評価である（前頁参照）。

- A :ピークが重なる波源の組合せ評価
- B-1:地震に伴う津波の最大ケース（水位上昇量・下降量の最大ケース）の組合せ評価
- B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

検討対象波源①・検討対象波源②の組合せ評価結果の中から最大ケースを選定

5.4章:敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

【「貯留堰を下回る時間」の最大ケースの妥当性確認】

- 波源の特徴④⑤を踏まえ、「地震に伴う津波」と「陸上地すべり(川白)」の下降側の波が、組合せ後の「貯留堰を下回る時間」への影響が大きくなる重なり方となっていることを確認する。

余白

5.1 評価方針

組合せ対象 (1/2) 地震に伴う津波

一部修正 (R4/7/1審査会合)

○地震及び地すべり若しくは斜面崩壊等の組合せについて考慮するために、地震に伴う津波及び地震以外の要因に伴う津波の水位検討結果を踏まえ、敷地に影響が大きい津波発生要因の組合せ対象を抽出する。

○組合せ対象 (地震に伴う津波) は、阿部 (1989) の簡易予測式により推定津波高を算定し、敷地に影響が大きい波源を選定する。

簡易予測式より算定した推定津波高

名称	断層長さ L (km)	幅 W (km)	すべり量 D (m)	地震 モーメント M_0 (N·m)	モーメント マグニチュード M_w	津波の 伝播距離 Δ (km)	推定 津波高 H_t (m)	
日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	320	40.0	6.00	2.69×10^{21}	8.2	71	10.2	
海域活断層に想定される 地震に伴う津波	岩内堆東撓曲	23.7	15.8	1.69	2.21×10^{19}	6.8	34	0.9
	寿都海底谷の断層	42	17.3	2.99	7.61×10^{19}	7.2	47	1.5
	神威海脚西側の断層	31.5	17.3	2.24	4.28×10^{19}	7.0	48	1.0
	F _B -2断層	101	17.3	7.19	4.40×10^{20}	7.7	85	2.6
	F _S -10断層 ～岩内堆東撓曲 ～岩内堆南方背斜	98	17.3	6.98	4.15×10^{20}	7.7	42	5.1
	積丹半島北西沖の断層 (走向0°, 基本ケース)	22.6	15.1	1.61	1.90×10^{19}	6.8	24	1.2
	積丹半島北西沖の断層 (走向20°, 基本ケース)	22.6	15.1	1.61	1.90×10^{19}	6.8	21	1.3
	積丹半島北西沖の断層 (走向40°, 基本ケース)	22.6	15.1	1.61	1.90×10^{19}	6.8	19	1.5
	積丹半島北西沖の断層 (走向0°, 不確かさ考慮ケース)	32	17.3	2.28	4.40×10^{19}	7.0	22	2.2
	積丹半島北西沖の断層 (走向20°, 不確かさ考慮ケース)	32	17.3	2.28	4.40×10^{19}	7.0	17	2.6
	積丹半島北西沖の断層 (走向40°, 不確かさ考慮ケース)	32	17.3	2.28	4.40×10^{19}	7.0	14	2.6



○組合せ対象 (地震に伴う津波) として、推定津波高が高い日本海東縁部に想定される地震に伴う津波 (以降、「地震に伴う津波」と呼ぶ) を選定した。

5.1 評価方針

組合せ対象 (2/2) 地震以外の要因に伴う津波

一部修正 (R4/7/1審査会合)

○組合せ対象 (地震以外の要因に伴う津波) は, 津波の数値シミュレーション結果より, 敷地に影響が大きい波源を選定する。

地震以外の要因に伴う津波 数値シミュレーション結果

評価項目	【参考】 火山による山体崩壊 (渡島大島)※	海底地すべりE	陸上地すべり (川白)	岩盤崩壊 (ピンノ岬付近)
	評価値	評価値	評価値	評価値
防潮堤前面 (上昇側)	1.59m	0.24m	4.92m	2.41m
3号炉取水口 (上昇側)	1.32m	0.22m	3.45m	1.53m
1, 2号炉取水口 (上昇側)	1.22m	0.22m	3.64m	1.41m
放水口 (上昇側)	1.13m	0.24m	5.91m	1.71m
「貯留堰を下回る時間」	0s	0s	38s	0s

※火山噴火に伴う事象であり, 地震事象とは独立した事象であるため, 地震に伴う津波との組合せの検討対象としない。



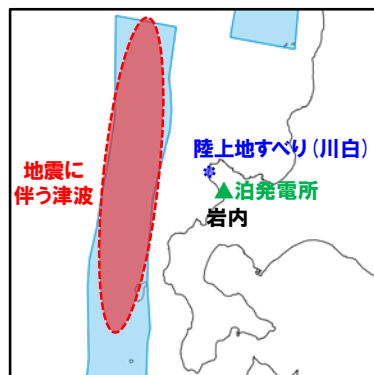
○組合せ対象 (地震以外の要因に伴う津波) として, 評価値 (水位上昇量, 貯留堰を下回る時間) が大きい陸上地すべり (川白) を選定した。

5.1 評価方針

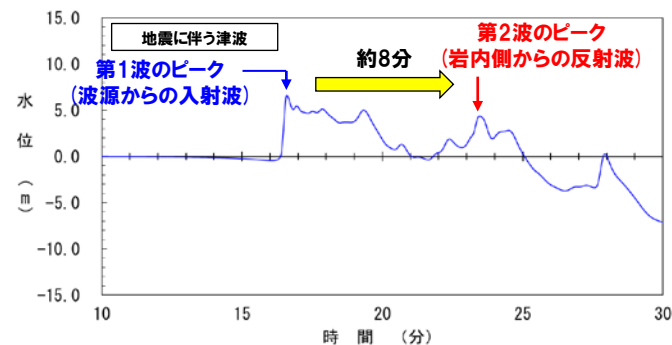
泊発電所の波源の特徴 (水位上昇側) (1/3) 地震に伴う津波の特徴 (1/2)

一部修正 (R5/10/20審査会合)

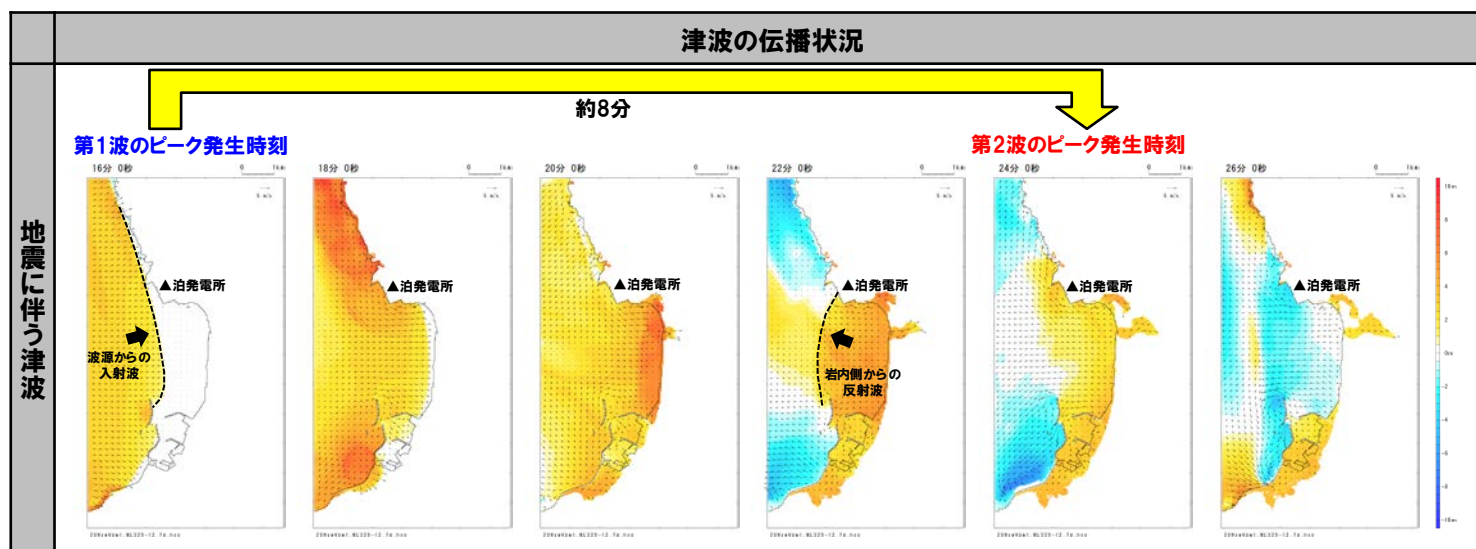
① 泊発電所の周辺の海岸地形により、地震に伴う津波は、波源からの入射波 (第1波) に加え、岩内側からの反射波 (第2波) が発生し、入射波 (第1波) と反射波 (第2波) の2つのピークが、8分程度の短い間隔で連続して発生する。



【波源位置と泊発電所の位置関係】



【水位時刻歴波形】



※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。
 ※波源: 断層パターン7, 波源位置: 矩形モデル (基準位置), アスぺリティ位置: de, 断層面上縁深さ: 1km, 地形モデル: 防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.1 評価方針

泊発電所の波源の特徴 (水位上昇側) (2/3) 地震に伴う津波の特徴 (2/2)

一部修正 (R5/10/20審査会合)

②地震に伴う津波は、「日本海東縁部の範囲」内において東西方向位置の変動を考慮する余地があり、この東西方向位置の変動を考慮することによって、敷地に津波が到達する時間 (ピークの発生時間の変動幅: 約5分～約9分*) が大きく変化する。

※波源 (断層パターン (矩形モデル・くの字モデル)) の違いによって、それぞれ東西の移動量が異なるため、ピークの発生時間の変動幅も異なる。

【波源位置の設定範囲】

	東西方向位置の設定範囲 (「日本海東縁部の範囲」を 網羅できる移動量)	東西方向位置の変動による ピークの発生時間の変動幅
断層パターン5 (矩形モデル)	西へ45km～東へ30km	約7.5分 (450秒)
断層パターン5 (くの字モデル)	西へ55km～東へ35km	約9分 (540秒)
断層パターン6 (矩形モデル)	西へ45km～東へ5km	約5分 (300秒)
断層パターン6 (くの字モデル)	西へ55km～東へ10km	約6.5分 (390秒)
断層パターン7 (矩形モデル)	西へ35km～東へ15km ^{※2}	約5分 (300秒)
断層パターン7 (くの字モデル)	西へ45km～東へ20km	約6.5分 (390秒)
断層パターン8 (矩形モデル)	西へ60km～東へ15km	約7.5分 (450秒)
断層パターン8 (くの字モデル)	西へ70km～東へ20km	約9分 (540秒)

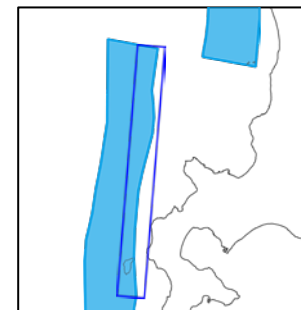
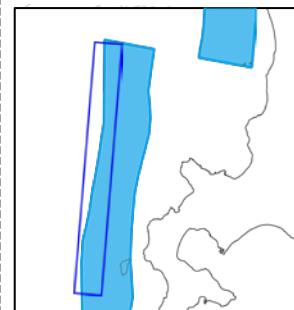
換算 (30s/5km)^{※1}

例示

※2: 波源位置の設定範囲の例: 断層パターン7 (矩形モデル)

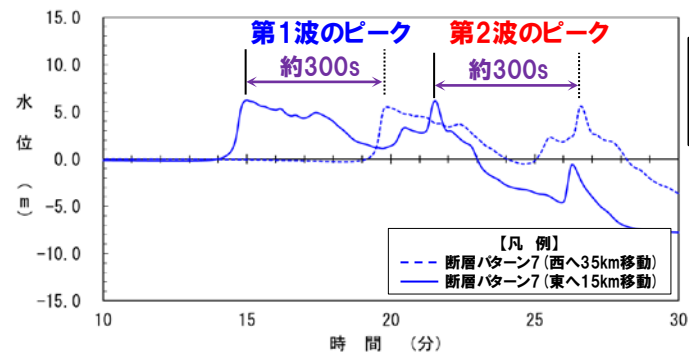
西へ35km移動

東へ15km移動

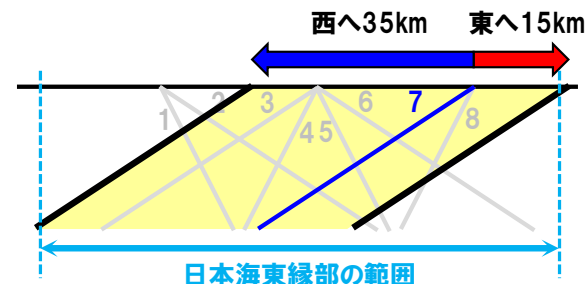


《平面図》

※1: 東西方向位置の変動による位相への影響



東西方向位置を50km変動させた場合に、ピークの発生時間は約300s変動する (5kmでは約30s変動する)。



《断面図》

※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

※波源: 断層パターン7, 波源位置: 矩形モデル (東へ15km, 若しくは, 西へ35km), アスベリティ位置: de, 断層面上縁深さ: 1km, 地形モデル: 防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.1 評価方針

泊発電所の波源の特徴(水位上昇側)(3/3) 陸上地すべり(川白)に伴う津波の特徴

一部修正 (R5/10/20審査会合)

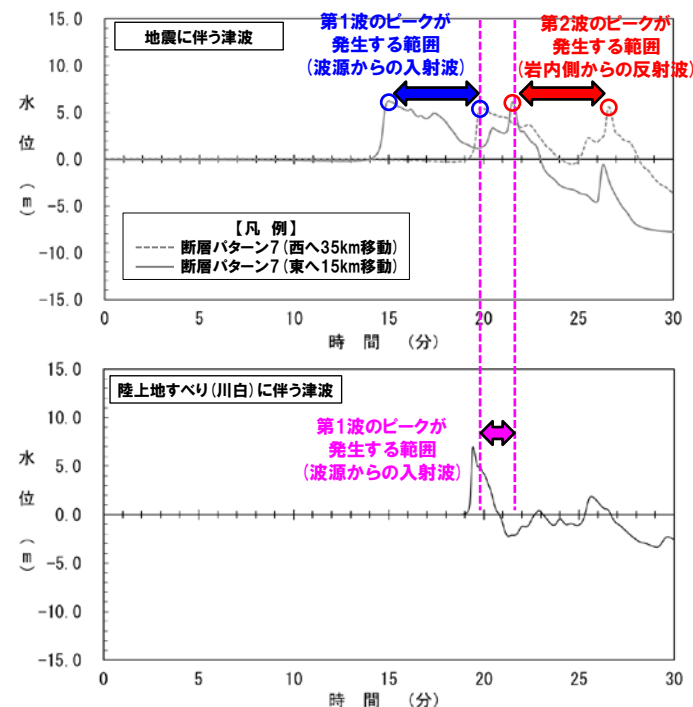
【陸上地すべり(川白)に伴う津波の特徴】

③地震以外の要因に伴う津波としては、陸上地すべり(川白)の第1波のピークの水位が高い。

【泊発電所の波源の特徴(水位上昇側)のまとめ(P60~62参照)】

- ①泊発電所の周辺の海岸地形により、地震に伴う津波は、波源からの入射波(第1波)に加え、岩内側からの反射波(第2波)が発生し、入射波(第1波)と反射波(第2波)の2つのピークが、8分程度の短い間隔で連続して発生する。
- ②地震に伴う津波は、「日本海東縁部の範囲」内において東西方向位置の変動を考慮する余地があり、この東西方向位置の変動を考慮することによって、敷地に津波が到達する時間(ピークの発生時間の変動幅:約5分~約9分)が大きく変化する。
- ③地震以外の要因に伴う津波としては、陸上地すべり(川白)の第1波のピークの水位が高い。

- 以上より、地震に伴う津波の波源の東西方向位置の変動を考慮することで、敷地に津波が到達する時間が大きく変化する。地震に伴う津波の第1波・第2波のピークと陸上地すべり(川白)の第1波が重なる(右図参照)。
- また、ピークが重なった場合には、組合せ評価の水位が高くなる。



※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。
 ※波源:断層パターン7, 波源位置:矩形モデル(基準位置), アスぺリティ位置:de, 断層面上縁深さ:1km, 地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.1 評価方針

組合せ評価方針（水位上昇側）

一部修正 (R5/10/20審査会合)

- 陸上地すべり（川白）に伴う津波のピークと、地震に伴う津波のピークが重なる場合、組合せ評価の水位が高くなるため、組合せ評価においては「**ピークが重なるかどうか**」に着目する。
- なお、ピークが重ならなくても、地震に伴う津波のうち水位が高い波源であれば、組合せ評価の水位が高くなる可能性があるため、「地震に伴う津波の**水位**」についても着目する。
- 以上を踏まえ、「**ピークが重なるかどうか**」に着目した「A:ピークが重なる波源の組合せ評価※¹」及び「**水位**」に着目した「B:水位が高い波源の組合せ評価※²」により、網羅的※³に敷地に対して大きな影響を及ぼす波源を選定する。

※1:陸上地すべり（川白）に伴う津波のピークと地震に伴う津波のピークが重なる波源の組合せ評価

※2:地震に伴う津波のうち水位が高い波源の組合せ評価

※3:A、Bの組合せ評価以外にも、地震に伴う津波の「ピークが重ならない、かつ、水位が低い」波源があるが、これは水位が高くなることはないことから、検討対象外とする（A、Bの組合せ評価より網羅的に敷地に対して大きな影響を及ぼす波源が選定できる）。

「A:ピークが重なる波源の組合せ評価」

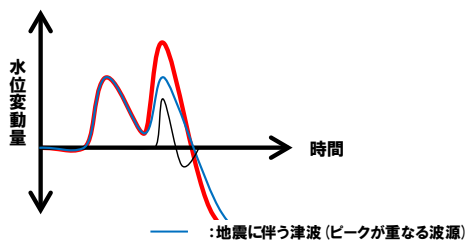
- 陸上地すべり（川白）に伴う津波のピークと、地震に伴う津波の**ピークが重なる場合**、組合せ評価の水位が高くなる。
- そこで、地震に伴う津波の全波源を検討対象として、位相に影響する断層パラメータを変動させた検討により、ピークが重なる波源を特定する。
- そのうえで、水位に影響する断層パラメータを変動させた検討により、ピークの水位が高くなる波源を選定し、組合せ評価を実施する。

「B:水位が高い波源の組合せ評価」

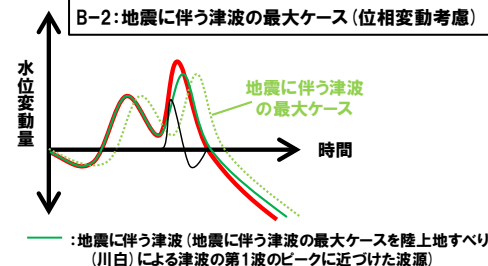
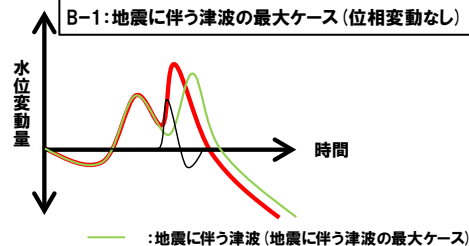
- 地震に伴う津波のうち、陸上地すべり（川白）に伴う津波のピークと重ならない場合でも、**水位が高い波源**であれば、組合せ評価の水位が高くなる。
- 地震に伴う津波のうち水位が高い波源を対象とし、以下に示す陸上地すべり（川白）に伴う津波との組合せ評価を実施する。
 - ✓ B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価
 - ✓ B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

組合せ評価（水位上昇側）の対象とする波源選定のイメージ図

【A:ピークが重なる波源の組合せ評価】



【B:水位が高い波源の組合せ評価】



【共通の凡例】
 — : 陸上地すべり（川白）
 — : 組合せ評価

5.1 評価方針

組合せ評価方法 (水位上昇側)

一部修正 (R5/10/20審査会合)

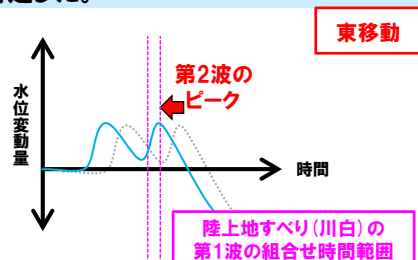
- 泊発電所の波源の特徴 (水位上昇側) を踏まえ、以下の組合せ評価を実施する。
 - A: ピークが重なる波源の組合せ評価
 - B: 水位が高い波源の組合せ評価
- 組合せの時間差 ($T_s \sim T_s + T_d$) の範囲でパラメータスタディを実施した評価結果から、水位上昇側の最大ケースを選定する。

「地震に伴う津波」(全波源)

「A: ピークが重なる波源の組合せ評価」

《ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)》

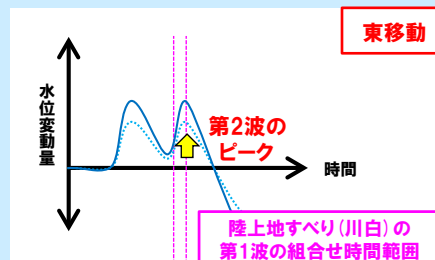
- 各断層パターンを検討対象波源として、「東西方向位置」・「矩形モデル」・くの字モデル」を変動させた検討より、**組合せ時間範囲**において、地震に伴う津波の**第2波・第1波**のピークが重なる波源を特定した。



西移動 (地震に伴う津波の第1波を対象) も検討しているが、
東移動 (地震に伴う津波の第2波を対象) の場合のイメージ図を例示

《ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)》

- そのうえで、全ての断層パラメータが水位に影響を与えることから、各断層パラメータの変動を考慮し、**第2波・第1波**のピークの水位が高くなる波源を選定のうえ、組合せ評価を実施した。



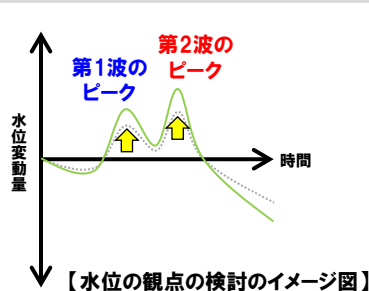
西移動 (地震に伴う津波の第1波を対象) も検討しているが、
東移動 (地震に伴う津波の第2波を対象) の場合のイメージ図を例示

A,B-1,B-2 それぞれの組合せ評価結果の中から最大ケースを選定

組合せ評価の最大ケース

「3章 地震に伴う津波」

- 地震に伴う津波の全波源を対象として、各断層パラメータの変動を考慮したパラメータスタディから、ピークの水位が高い波源を選定した (水位の観点の検討)。
- 各評価項目の最大ケースとして計18ケースが選定された。



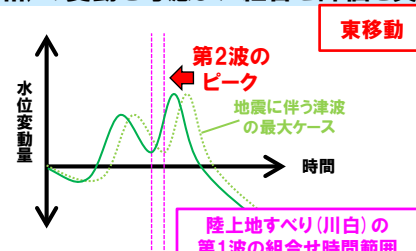
「B: 水位が高い波源の組合せ評価」

「B-1: 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価」

- 「地震に伴う津波」の最大ケース (計18ケース) を検討対象波源として、組合せ評価を実施した。

「B-2: 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価」

- 「地震に伴う津波」の最大ケース (計18ケース) のうち、**第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源**を検討対象波源として、**陸上地すべり(川白)の第1波のピークと重なる東西方向に、波源位置 (位相) の変動を考慮した組合せ評価**を実施した (位相の観点の検討)。



西移動 (地震に伴う津波の第1波を対象) も検討しているが、
東移動 (地震に伴う津波の第2波を対象) の場合のイメージ図を例示

余白

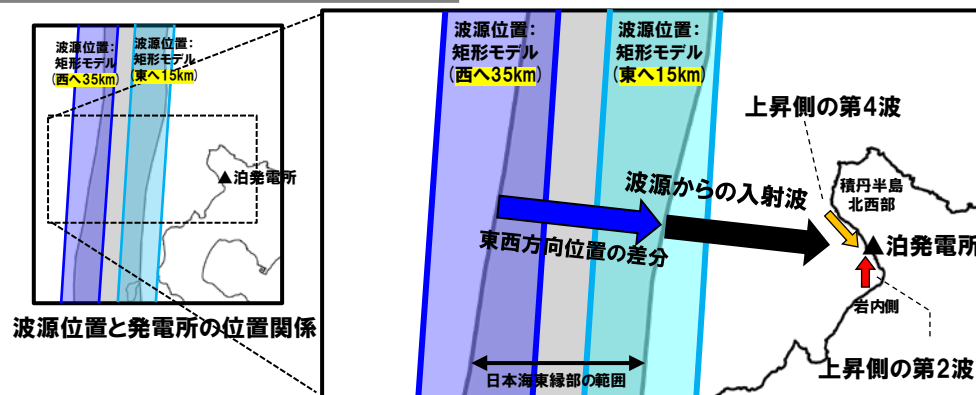
5.1 評価方針

泊発電所の波源の特徴 (水位下降側) (1/2)

一部修正 (R5/12/8審査会合)

○泊発電所の波源の特徴 (水位下降側)として、**上昇側の第2波・第4波**は、以下の伝播経路により、泊発電所に到達する。

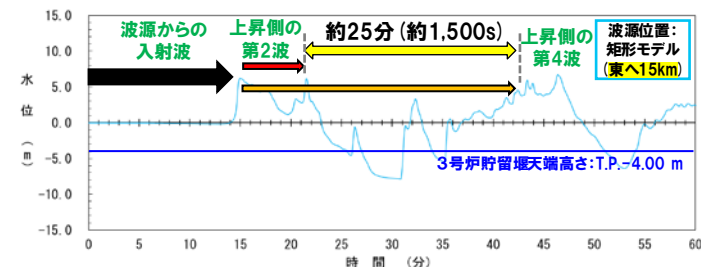
- **上昇側の第2波**: 波源からの入射波が、岩内側に伝播し、泊発電所に第2波として到達する。
- **上昇側の第4波**: 波源からの入射波が、積丹半島北西部に伝播し、泊発電所に第4波として到達する。



【上昇側の第2波・第4波の伝播経路イメージ】

○**上昇側の第2波** (岩内側から伝播した津波)と**上昇側の第4波** (積丹半島北西部から伝播した津波)は、伝播経路の違いにより、泊発電所における第2波と第4波の到達時刻に約25分 (約1,500s) の差が発生する。

○波源位置を東西に移動させた場合においても、水位時刻歴波形の位相のずれが生じるだけ (右図青矢印参照)であり、第2波と第4波の到達時刻の差に大きな変化は生じない。

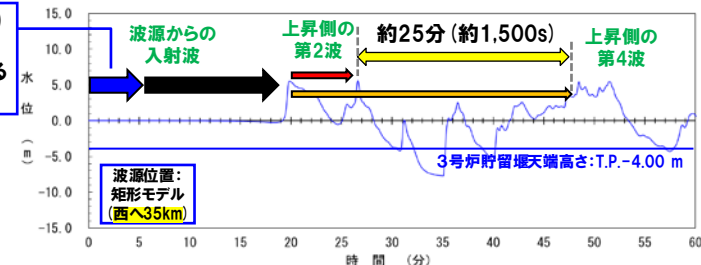


※波源: 断層パターン7, 波源位置: 矩形モデル (東へ15km), アスベリティ位置: de, 断層面上縁深さ: 5km, 地形モデル: 防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。
※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

【地震に伴う津波の特徴】

- 泊発電所における水位下降側の津波の特徴として、地震に伴う津波の上昇側の第2波・第4波の間に長い引き波の時間が生ずる。
- 地震に伴う津波の上昇側の第2波と第4波の間の時間は伝播経路の違いによるものであり、波源位置を東西に移動させた場合においても概ね一定である。

東西方向位置の差分 (50km) として、約5分 (300s) 位相が遅くなる (上記平面図における青矢印)。



※波源: 断層パターン7, 波源位置: 矩形モデル (西へ35km), アスベリティ位置: de, 断層面上縁深さ: 5km, 地形モデル: 防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。
※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

【東西方向位置の違いによる水位時刻歴波形の影響】

5.1 評価方針

泊発電所の波源の特徴 (水位下降側) (2/2)

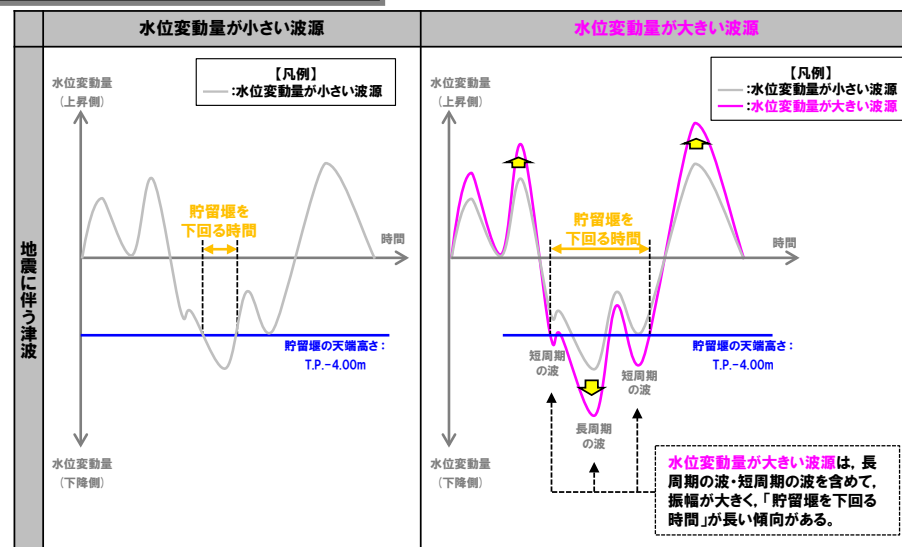
一部修正 (R5/12/8審査会合)

【地震に伴う津波の特徴】

- ⑥地震に伴う津波において、水位変動量大きい波源は振幅が大きいことから、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向がある(右図参照)。

【泊発電所の波源の特徴 (水位下降側) のまとめ (P66～67参照)】

- ④泊発電所における水位下降側の津波の特徴として、地震に伴う津波の上昇側の第2波・第4波の間に長い引き波の時間が生ずる。
 ⑤地震に伴う津波の上昇側の第2波と第4波の間の時間は伝播経路の違いによるものであり、波源位置を東西に移動させた場合においても概ね一定である。
 ⑥地震に伴う津波において、水位変動量大きい波源は振幅が大きいことから、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向がある。



【評価方針】

- 組合せ評価 (水位下降側) では、敷地に対して大きな影響を及ぼす波源として、「貯留堰を下回る時間」が最大となる波源を選定する。
 ○波源の特徴⑥を踏まえ、地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケース (検討対象波源①) に加え、地震に伴う津波の水位変動量大きい波源 (検討対象波源②) も検討対象とする。
 ○検討対象波源①・②を用いて、組合せの時間差 ($T_s \sim T_s + T_d$) の範囲でパラメータスタディを実施した評価結果から、「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを選定する。

《検討対象波源①》

- 地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを検討対象波源とした組合せ評価※1を実施し、組合せ評価における「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを選定する。

※1:具体的には以下の組合せ評価である (P55参照)。

- B-1:地震に伴う津波の最大ケース (「貯留堰を下回る時間」の最大ケース) の組合せ評価

《検討対象波源②》

- 左記の検討対象波源①に加えて、泊発電所の波源の特徴⑥より、水位変動量の大きい波源は振幅が大きく、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向があることを踏まえ、水位変動量大きい波源を検討対象波源とした組合せ評価※2からも「貯留堰を下回る時間」の最大ケースを選定する。

※2:具体的には以下の組合せ評価である (P55参照)。

- A:ピークが重なる波源の組合せ評価
 ➢ B-1:地震に伴う津波の最大ケース (水位変動量の最大ケース) の組合せ評価
 ➢ B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

検討方針・検討フロー

一部修正 (R5/10/20審査会合)

【検討方針】

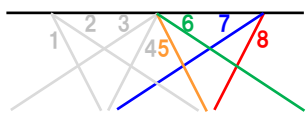
- 陸上地すべり(川白)の第1波と重なるのは、地震に伴う津波の第2波・第1波であることから、これらを組合せ評価の対象とする。
- 各断層パターンの波源位置(「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」)を変動させることで、位相が変動する(下記の「断層パラメータの変動による影響・変動範囲」を参照)。
- これより、各断層パターンを検討対象波源として、位相に影響する断層パラメータを変動させた検討より、組合せ時間範囲において陸上地すべり(川白)の第1波のピークと地震に伴う津波の第2波・第1波のピークが重なる波源を特定する。
- そのうえで、水位に影響する断層パラメータ(「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」・「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」)を変動させた検討より、地震に伴う津波の第2波・第1波のピークの水位が高くなる波源を選定のうえ、組合せ評価を実施する。

【検討フロー】

(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)

①検討対象波源(断層パターン)

- 断層パターン5~8を検討対象波源とする。
断層パターン1~4については、断層パターン5~8をそれぞれ西へ25km移動した位置にある同じ傾斜となる断層パターンの波源であることから、断層パターン5~8を基準位置として東西への移動を検討することで、断層パターン1~4を評価可能である。



②波源位置の設定範囲

- 「日本海東縁部に想定される地震に伴う津波」の評価と同様にする(「日本海東縁部の範囲」を網羅できる「東西方向位置」とする)。

③ピークが重なる波源※1

- 「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」を変動させた検討により、組合せ時間範囲において、地震に伴う津波の第2波・第1波のピークが重なる波源を特定する。

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)※2

④概略検討※3

- 「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」の変動を考慮し、ピークの水位が高くなる波源を選定する。

⑤詳細検討※3

- 「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」の変動を考慮し、ピークの水位が高くなる波源を選定する。

⑥組合せ評価

- 組合せの時間差の変動を考慮した組合せ評価を実施する。
- 時間差の変動範囲は、 $T_s \sim T_s + T_d$ (5sピッチ)を検討する。

【断層パラメータの変動による影響・変動範囲】

断層パラメータ	位相への影響	水位への影響	解析対象とする変動範囲
断層パターン	—(水位時刻歴波形が異なるため、網羅的に検討する)		「③ピークが重なる波源」のうち最も東へ位置する波源
波源位置	東西方向位置 ○:有り	○:有り	
	矩形モデル・くの字モデル ○:有り	○:有り	
アスペリティ位置※4	×:無し	○:有り	de~ef(10kmピッチ)
断層面上縁深さ	×:無し	○:有り	0km,3km,5km

※4:アスペリティ位置の変動については、泊発電所に正対する位置とした場合にピークの水位が大きくなることから、「de~ef」を考慮する。

※1:「防波堤の損傷を考慮した地形モデル①」の3号炉取水口前面の水位時刻歴波形を代表に、ピークの重なる波源の特定を行う。
 なお、代表以外の地形モデル・評価項目については、後段の「④概略検討」にて陸上地すべり(川白)の第1波のピークと地震に伴う津波の第2波・第1波のピークが重なることを確認する。
 ※2:全ての地形モデルを対象に、3号炉取水口前面・1、2号炉取水口前面・放水口前面の水位時刻歴波形を用いて、ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価を行う。
 ※3:防潮堤前面(上昇側)は、評価範囲が広いことから、3号炉取水口及び1、2号炉取水口に対する評価で代表させる。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

断層パラメータの変動による影響 (検討フローの考え方) (1/2)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○各断層パラメータの変動を考慮した場合において、水位時刻歴波形の位相・水位に与える影響を下表のとおり整理した (変動を考慮する断層パラメータは、次頁参照)。

	波源位置		アスペリティ位置 (de付近) ^{*1}		断層面上縁深さ	
	東西方向位置	矩形モデル・くの字モデル	アスペリティ位置 (de付近) ^{*1}	アスペリティ位置 (de付近) ^{*1}	断層面上縁深さ	断層面上縁深さ
波源位置 (泊発電所との距離)	<p>断層パターン6 (西へ25km移動) (距離が大きい場合)</p> <p>断層パターン6 (距離が近い場合)</p>	<p>矩形モデル (東へ5km移動) (距離が近い場合)</p> <p>くの字モデル (東へ10km移動) (距離が大きい場合)</p>	<p>※1:アスペリティ位置の変動については、泊発電所に正対する位置とした場合にピークの水位が大きくなることから、「de付近 (de~ef)」を考慮するものとし、「ab~gh」の変動は検討対象外とする。</p> <p>アスペリティ位置: de</p> <p>アスペリティ位置: de南20</p> <p>アスペリティ位置 (de付近)^{*1}の変動により波源位置と泊発電所の距離は変わらない</p>		<p>断層面上縁深さ: 0km</p> <p>断層面上縁深さ: 5km</p> <p>断層面上縁深さの変動により波源位置と泊発電所の距離は変わらない</p>	
水位時刻歴波形						
位相に及ぼす影響	○「東西方向位置」の変動を考慮することで、位相は大きく変動する。 ○これは、波源位置と泊発電所との距離に応じて、津波が泊発電所へ到達する時刻が変わるためであり、「東西方向位置」が位相に最も影響を与える断層パラメータである。	○「矩形モデル・くの字モデル」の変動を考慮することで、位相は変動する。 ○これは、波源位置と泊発電所との距離に応じて、津波が泊発電所へ到達する時刻が変わるためであり、「矩形モデル・くの字モデル」は位相に影響を与える断層パラメータである。	○「アスペリティ位置 (de付近) ^{*1} 」の変動を考慮した場合には、位相は変動しない。 ○これは、アスペリティ位置 (de付近) ^{*1} の変動により波源位置と泊発電所の距離は変わらず、津波が泊発電所へ到達する時刻が変わらないためである。		○「断層面上縁深さ」の変動を考慮することで、位相は変動しない。 ○これは、断層面上縁深さの変動により波源位置と泊発電所の距離は変わらず、津波が泊発電所へ到達する時刻が変わらないためである。	
水位に及ぼす影響	○「東西方向位置」の変動を考慮することで、水位は変動し、東に位置する場合に水位が高くなる。 ○これは、波源位置が発電所近づくことで、水位が高くなるためである。	○「矩形モデル・くの字モデル」の変動を考慮することで、水位は変動し、「くの字モデル」とした場合に水位が高くなる。 ○これは、泊発電所を囲むような波源位置 (くの字モデル) にしたことで、水位が高くなるためである。	○「アスペリティ位置 (de付近) ^{*1} 」の変動を考慮することで、水位は変動する。		○「断層面上縁深さ」の変動を考慮することで、水位は変動する。	
まとめ	位相に及ぼす影響: ○ 有り 水位に及ぼす影響: ○ 有り	位相に及ぼす影響: ○ 有り 水位に及ぼす影響: ○ 有り	位相に及ぼす影響: × 無し 水位に及ぼす影響: ○ 有り		位相に及ぼす影響: × 無し 水位に及ぼす影響: ○ 有り	

※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。 ※波源:「地震に伴う津波」の各STEPの検討ケース、地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

断層パラメータの変動による影響（検討フローの考え方）（2/2）

再掲（R5/10/20審査会合）

○各断層パラメータの変動を考慮した場合において、水位時刻歴波形の位相・水位に与える影響（前頁参照）を踏まえ、各検討において変動を考慮する断層パラメータを、以下のとおり設定した。

【（1）ピークが重なる波源の特定（位相の観点の検討）】

- 波源位置（「東西方向位置」・「矩形モデル」・「くの字モデル」）の変動を考慮することで、位相が変動する。
- これは、波源位置と泊発電所との距離に応じて、津波が泊発電所へ到達する時刻が変わるためであり、**位相に大きな影響を与える断層パラメータは、「東西方向位置」・「矩形モデル」・「くの字モデル」**である。
- 以上より、位相に大きな影響を与える断層パラメータである「東西方向位置」・「矩形モデル」・「くの字モデル」の変動を考慮することで、ピークが重なる波源を特定する*。

*アスペリティ位置の変動については、泊発電所に正対する位置とした場合にピークの水位が大きくなることから、「de付近（de～ef）」を考慮するものとし、「ab～gh」の変動は検討対象外とする（次頁参照）。

【（2）ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価（水位の観点の検討）】

- **全ての断層パラメータが水位に影響を与える**ことから、網羅的に「東西方向位置」・「矩形モデル」・「くの字モデル」・「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」の変動を考慮し、ピークの水位が高くなる波源を選定する。
- 具体的には、（1）で特定したピークが重なる波源を対象に、以下の「概略検討」及び「詳細検討」の2ステップにてピーク水位の高くなる波源の選定を行う。

《概略検討》

- ✓ 「（1）ピークが重なる波源の特定（位相の観点の検討）」において検討する断層パラメータである「東西方向位置」・「矩形モデル」・「くの字モデル」を対象に、水位の観点から影響の大きいパラメータをそれぞれ選定する。

《詳細検討》

- ✓ 「概略検討」の後に、変動を考慮していない残りの断層パラメータである「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」を対象に、水位の観点から影響の大きい断層パラメータの変動を考慮する。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

アスペリティ位置の検討対象について(「de付近 (de~ef)」の変動を考慮する理由)

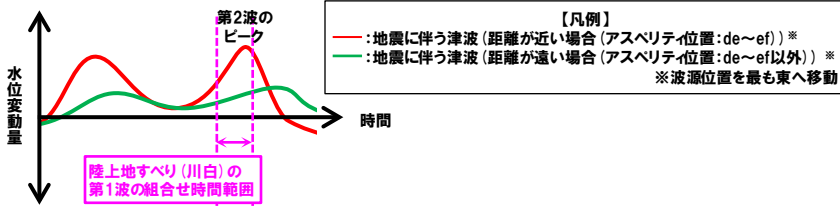
再掲 (R5/10/20審査会合)

【アスペリティ位置の検討対象】

- アスペリティ位置の変動については、泊発電所に正対する位置とした場合にピークの水位が大きくなることから、「de付近 (de~ef)」を考慮する。
- アスペリティ位置「ab~gh」の変動は、「アスペリティ位置」と泊発電所との距離が遠くなることでピークの水位が小さくなるため、検討対象としない(詳細は以下参照)。

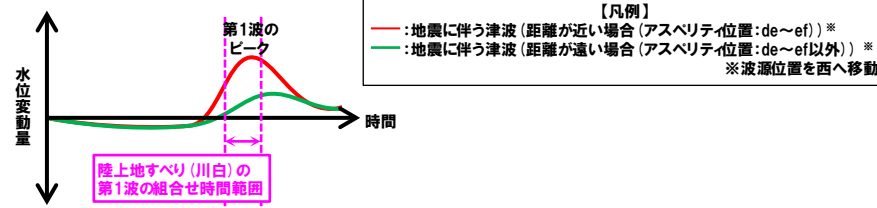
《地震に伴う津波の第2波(東移動)》

- 地震に伴う津波の第2波ピーク (de~ef) は、波源位置を最も東へ移動させた場合に、陸上地すべり(川白)の第1波のピークと重なる。
- 一方、地震に伴う津波の第2波ピーク (de~ef以外) は、波源位置を最も東へ移動させても重ならない(水位も上記より低い)ため、検討対象外とする。



《地震に伴う津波の第1波(西移動)》

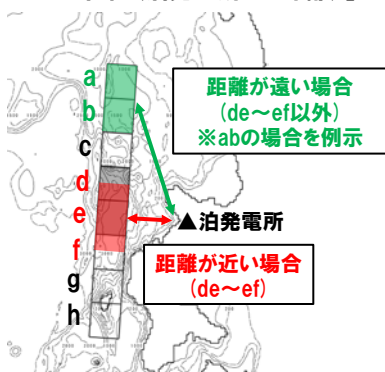
- 地震に伴う津波の第1波ピーク (de~ef) は、波源位置を西へ移動させた場合に、陸上地すべり(川白)の第1波のピークと重なる。
- 地震に伴う津波の第1波ピーク (de~ef以外) は、波源位置を上記より更に西に移動させた場合に重なるが、上記より水位は低くなるため、検討対象外とする。



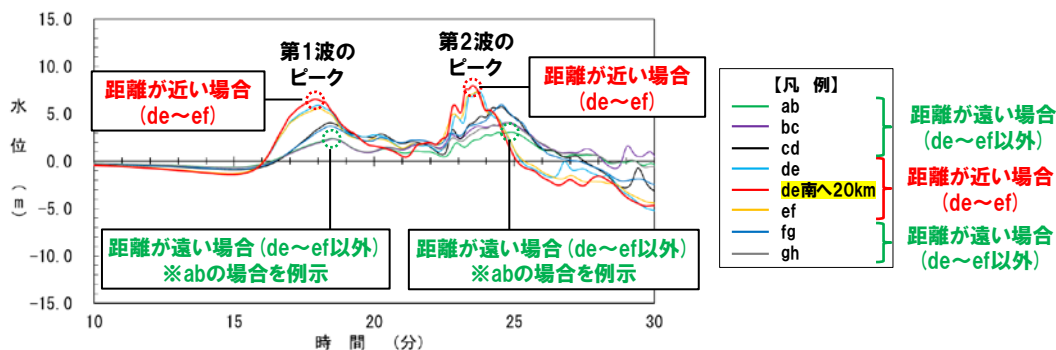
【(参考)アスペリティ位置(ab~gh)の変動による位相・水位への影響】

- 津波の初期水位は、アスペリティ位置(大すべり域)で大きく、「アスペリティ位置」と泊発電所との距離に応じて、地震に伴う津波の位相・水位に、以下の影響を与える。
- 距離が近い場合 (de~ef) : ピークの水位は高く、ピークの発生時刻が早い。
- 距離が遠い場合 (de~ef以外) : 上記と比較してピークの水位は低く、ピークの発生時刻が遅くなる。

【アスペリティ位置(泊発電所との距離)】



【アスペリティ位置(ab~gh)の変動に伴う位相・水位への影響】



※水位時刻歴波形は、3号伊取水口前面の代表点から抽出した。
 ※波源:まとも資料「3.地震に伴う津波」のSTEP1-2・STEP4の検討ケース、地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

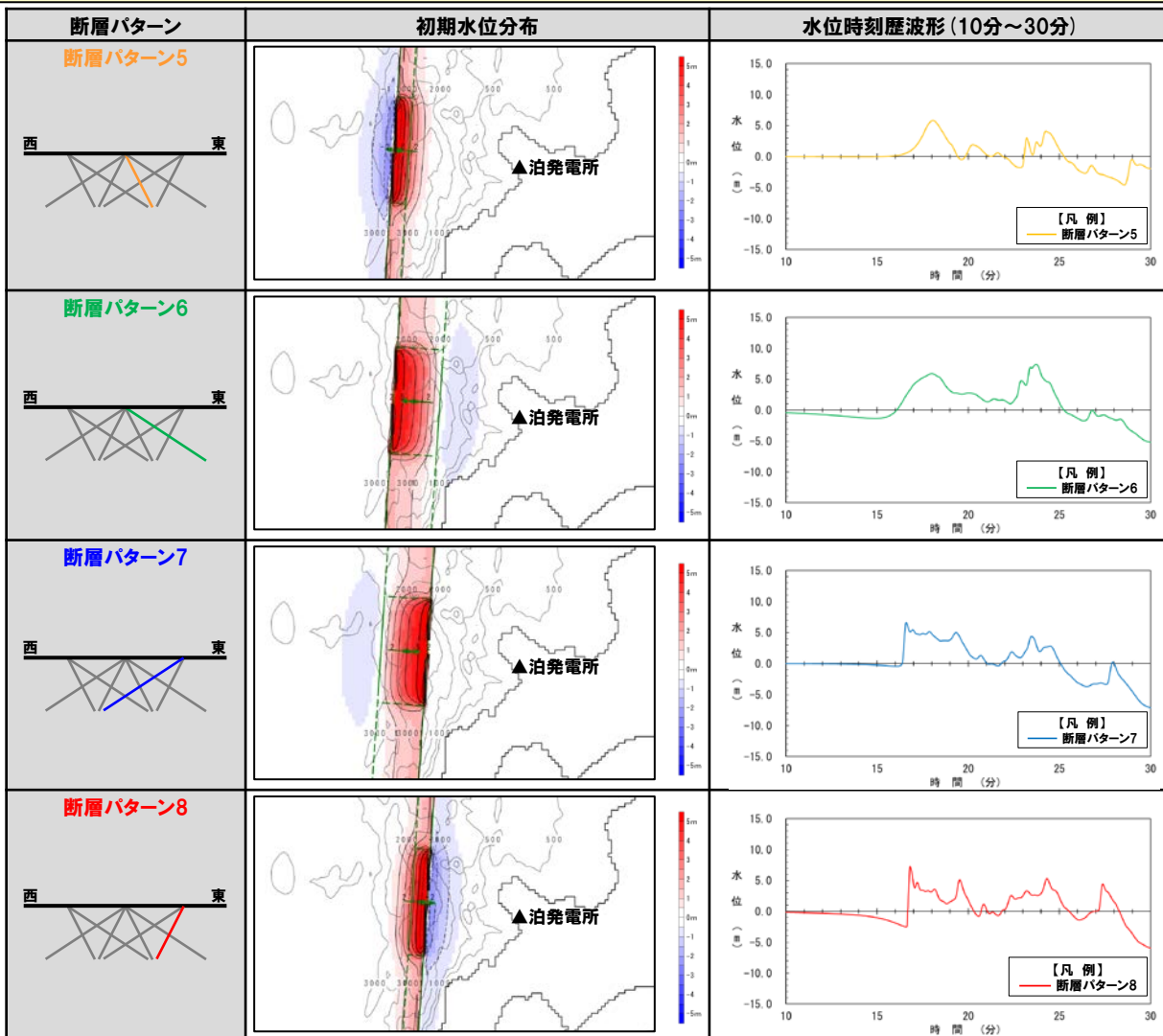
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)

① 検討対象波源(断層パターン)(1/2) 断層パターンの違いによる影響

再掲(R5/10/20審査会合)

- 断層パターン5~8の違いにより、初期水位分布が異なるため、水位時刻歴波形が異なる(下図参照)。
- 特に、傾斜方向の違い(東傾斜:断層パターン5・6, 西傾斜:断層パターン7・8の違い)により、水位時刻歴波形が大きく異なる。



【断層パターン1~4の扱い】

○断層パターン1~4については、断層パターン5~8をそれぞれ西へ25km移動した位置にある同じ傾斜方向・傾斜角となる断層パターンの波源であることから、断層パターン5~8を基準位置として東西への移動を検討することで、断層パターン1~4を評価可能である(以降、断層パターン1~4を、下記のとおり呼ぶ。)

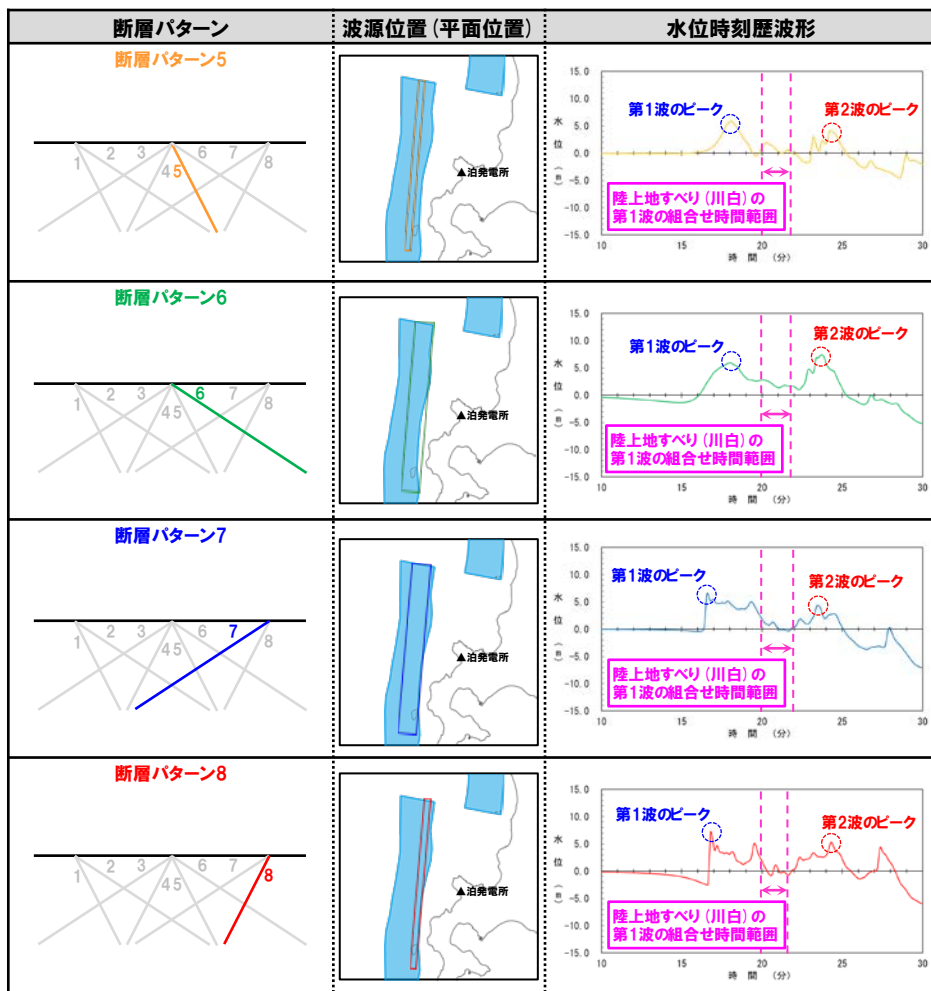
- 断層パターン1:断層パターン5(西へ25km移動)
- 断層パターン2:断層パターン6(西へ25km移動)
- 断層パターン3:断層パターン7(西へ25km移動)
- 断層パターン4:断層パターン8(西へ25km移動)

(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)

① 検討対象波源(断層パターン)(2/2) 検討対象波源の設定

再掲(R5/10/20審査会合)

○断層パターン5～8の基準位置では、陸上地すべり(川白)と第2波・第1波のピークが重ならない。



○断層パターン5～8の基準位置では、ピークが重ならないが、波源位置(位相)の変動を考慮した場合に、以下が想定される。

《波源位置を東へ移動》

- 地震に伴う津波の第2波のピークと陸上地すべり(川白)の第1波のピークが重なり、組合せ評価における水位が高くなる可能性がある。

《波源位置を西へ移動》

- 地震に伴う津波の第1波のピークと陸上地すべり(川白)の第1波のピークが重なり、組合せ評価における水位が高くなる可能性がある。

○以下の理由から、断層パターン5～8を検討対象波源とした。

- 断層パターン5～8の違いにより、水位時刻歴波形が異なること(前頁参照)。
- 断層パターン5～8のいずれの波源も、波源位置(位相)の変動を考慮すると陸上地すべり(川白)の第1波のピークが重なり、組合せ評価における水位が高くなる可能性があること。
- 断層パターン5～8の検討に基づく「②波源位置の設定範囲」が、断層パターン毎にそれぞれ異なる設定となること。

(1) ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)

②波源位置の設定範囲

再掲 (R5/10/20審査会合)

○波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部に想定される地震に伴う津波」の評価と同様にする(「日本海東縁部の範囲」を網羅できる東西方向位置とし、「断層パターン」及び「矩形モデル・くの字モデル」の違いにより、それぞれ異なる設定となる)。

		断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
②波源位置の設定範囲	矩形モデル	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ45km～東へ30kmとなる。</p> <p>西へ45km移動 東へ30km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ45km～東へ5kmとなる。</p> <p>西へ45km移動 東へ5km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ35km～東へ15kmとなる。</p> <p>西へ35km移動 東へ15km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ60km～東へ15kmとなる。</p> <p>西へ60km移動 東へ15km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>
	くの字モデル	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ55km～東へ35kmとなる。</p> <p>西へ55km移動 東へ35km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ55km～東へ10kmとなる。</p> <p>西へ55km移動 東へ10km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ45km～東へ20kmとなる。</p> <p>西へ45km移動 東へ20km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>	<p>波源位置の設定範囲は、「日本海東縁部の範囲」を網羅できる西へ70km～東へ20kmとなる。</p> <p>西へ70km移動 東へ20km移動</p> <p>※断面図は、平面図を基にしたイメージとして作成</p>

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

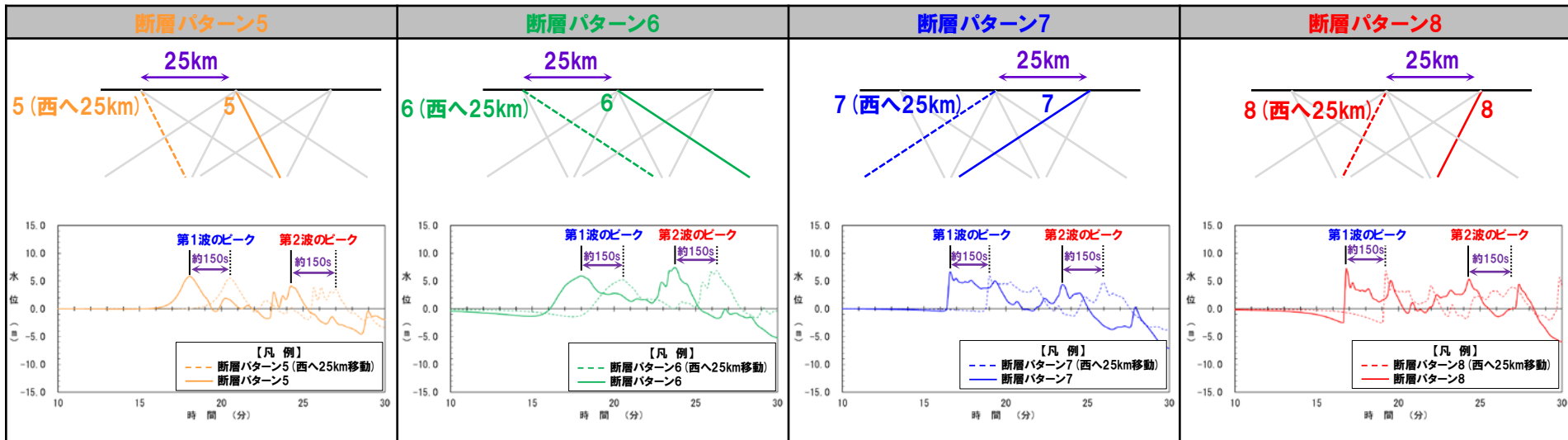
(1) ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)

③ピークが重なる波源 (1/3) 検討方法 (矩形モデル)

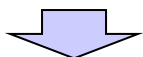
再掲 (R5/10/20審査会合)

- 断層パターン5～8と「東西方向位置」を西へ25km移動させた場合の水位時刻歴波形の比較を下图に示す。
- 「東西方向位置」を25km変動させた場合に、水位時刻歴波形の位相が約150s変動する(5kmでは約30s変動する)ことを確認した。

【断層パターン5～8と「東西方向位置」を西へ25km移動させた水位時刻歴波形の比較】



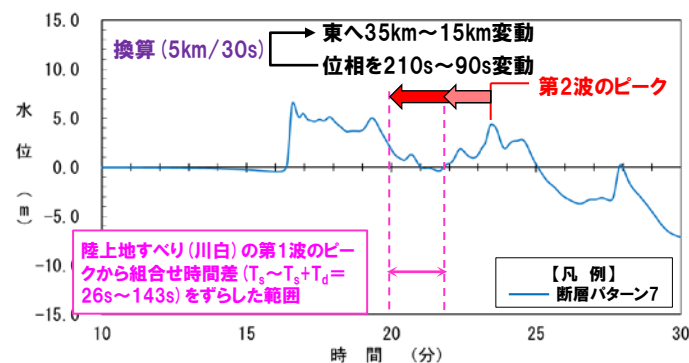
※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。 ※波源:「地震に伴う津波」のSTEP1-1の検討ケース、地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。



【検討方法 (矩形モデル)】

- 「東西方向位置」を5km変動させた場合に約30s変動することを踏まえ、地震に伴う津波の第2波・第1波のピーク発生時刻から、どの程度、位相(東西方向位置)を変動させた場合に、陸上地すべり(川白)の第1波の組合せ時間範囲に入るかを検討する(右記の検討例を参照)。
- 検討に当たっては、「②波源位置の設定範囲」を考慮したうえで、ピークが重なる波源を特定する。

検討例:地震に伴う津波の第2波(東移動)のピークが重なる波源の特定



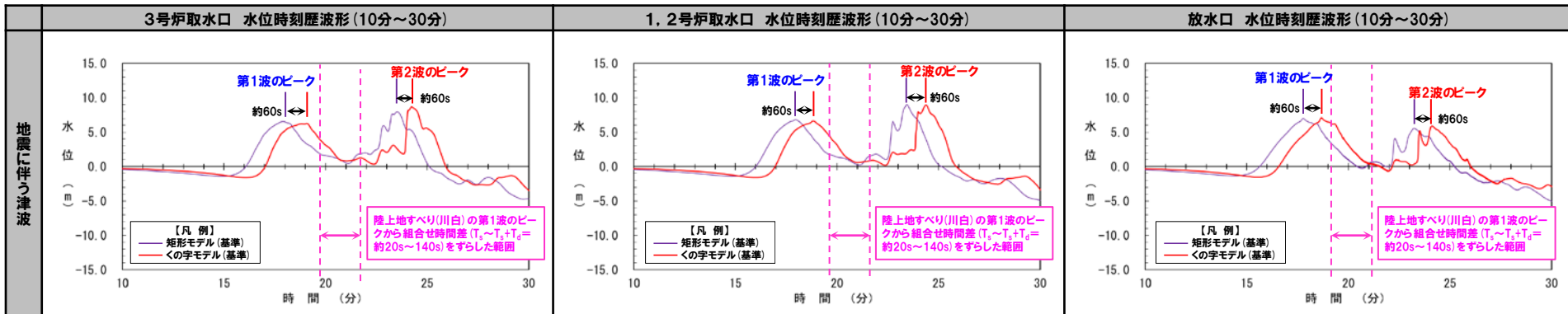
(1) ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)

③ピークが重なる波源 (2/3) 検討方法 (くの字モデル)

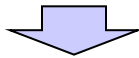
再掲 (R5/10/20審査会合)

- 「矩形モデル・くの字モデル」を変動させた場合の水位時刻歴波形の比較を下図に示す。
- 「矩形モデル・くの字モデル」の違いにより、水位時刻歴波形の位相に約60sの差が発生することを確認した。

【「矩形モデル・くの字モデル」の変動による影響 (「地震に伴う津波」より整理)】



※水位時刻歴波形は、それぞれ3号炉取水口前面・1, 2号炉取水口前面・放水口前面の代表点から抽出した。
 ※波源:「地震に伴う津波」のSTEP3の検討ケース、地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。



【検討方法 (くの字モデル)】

○「矩形モデル・くの字モデル」の違いにより、水位時刻歴波形の位相に約60sの差が発生することを踏まえ、「くの字モデル」のピークが重なる波源位置を以下のように特定する。

- 「くの字モデル (東へ○km)」のピーク発生時刻は、「矩形モデル (東へ○km-10km)」のピーク発生時刻と同等となる※。
- 「くの字モデル (西へ○km)」のピーク発生時刻は、「矩形モデル (西へ○km+10km)」のピーク発生時刻と同等となる※。

※「東西方向位置」を5km変動させた場合に約30s変動することを踏まえ、 $60s \times 5km / 30s$ より換算した (この換算により矩形モデル・くの字モデルの位相の差がなくなることを確認している)。

○検討に当たっては、「②波源位置の設定範囲」を考慮したうえで、ピークが重なる波源を特定する。

(1) ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)

③ピークが重なる波源 (3/3) 検討結果

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「②波源位置の設定範囲」を考慮したうえで、陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第2波・第1波のピークが重なる波源を下表のとおり特定した。

○ピークが重なる波源位置は、下表に示す「日本海東縁部の範囲」のうち黄色ハッチング箇所となる。

【地震に伴う津波の第2波(東移動)のピークが重なる波源】

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
矩形モデル		重ならない		重ならない
くの字モデル	重ならない	重ならない	重ならない	重ならない

【地震に伴う津波の第1波(西移動)のピークが重なる波源】

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
矩形モデル				
くの字モデル				

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

④概略検討 (1/5) 検討方法

再掲 (R5/10/20審査会合)

○概略検討では、「(1) ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)」において検討した断層パラメータである「断層パターン」「東西方向位置」「矩形モデル・くの字モデル」を対象に、水位の観点から影響の大きいパラメータをそれぞれ選定する。

【東西方向位置】

➢ 「③ピークが重なる波源」のうち、泊発電所に近づく (東へ移動する) につれて水位が高くなる (下図参照) ため、最も東に位置する波源の解析を実施する。

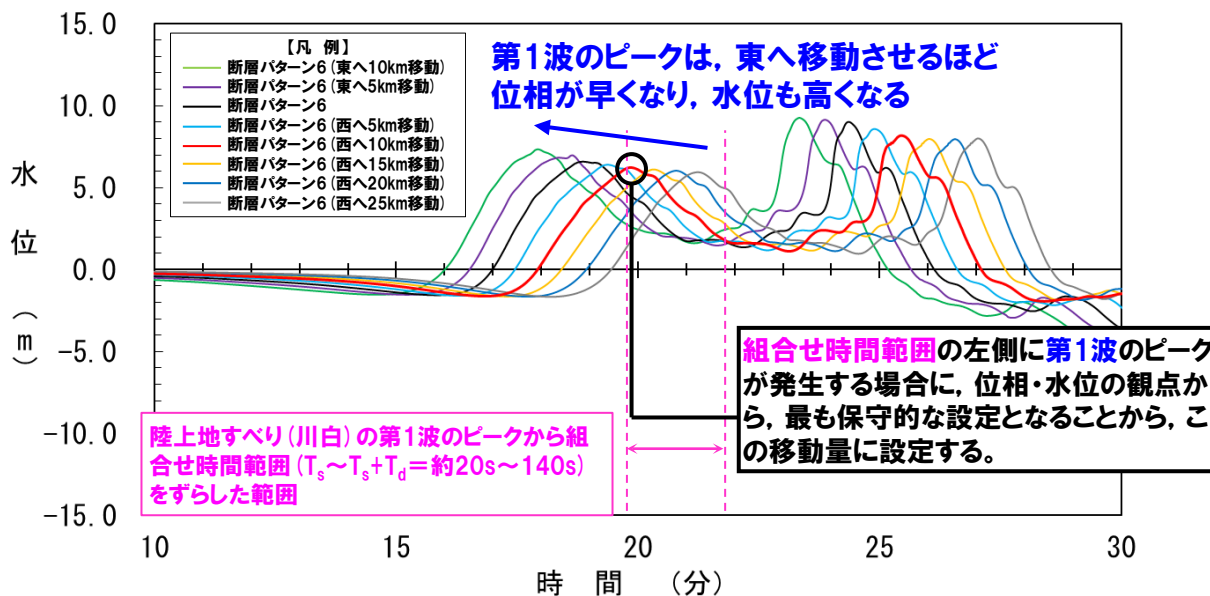
【矩形モデル・くの字モデル】

➢ 「矩形モデル・くの字モデル」の変動を考慮した場合における水位時刻歴波形の比較を行い、ピークの水位が高い波源を選定する。

【断層パターン】

➢ 「断層パターン」の変動を考慮した場合における水位時刻歴波形の比較を行い、ピークの水位が高い波源を選定する。

【東西方向位置の変動による影響】



※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

④概略検討 (2/5) 検討結果 (東西方向位置)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「③ピークが重なる波源」のうち、泊発電所に近づく (東へ移動する) につれて水位が高くなるため、最も東に位置する波源として以下の解析を実施した。

- 地震に伴う津波の第2波 (東移動) : 断層パターン5 (矩形モデル, 東へ30km), 断層パターン7 (矩形モデル, 東へ15km) の解析を実施した。
- 地震に伴う津波の第1波 (西移動) : 断層パターン5 (矩形モデル, 西へ20km), 断層パターン5 (くの字モデル, 西へ10km), 断層パターン6 (矩形モデル, 西へ20km), 断層パターン6 (くの字モデル, 西へ10km), 断層パターン7 (矩形モデル, 西へ35km), 断層パターン7 (くの字モデル, 西へ25km), 断層パターン8 (矩形モデル, 西へ35km), 断層パターン8 (くの字モデル, 西へ25km) の解析を実施した。

		断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波 (東移動)	矩形モデル	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: 矩形モデル (東へ30km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	重ならない	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル (東へ15km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	重ならない
	くの字モデル	③ピークが重なる波源	重ならない	③ピークが重なる波源	重ならない
地震に伴う津波の第1波 (西移動)	矩形モデル	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: 矩形モデル (西へ20km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: 矩形モデル (西へ20km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル (西へ35km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: 矩形モデル (西へ35km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km
	くの字モデル	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: のの字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: のの字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: のの字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	 <p>③ピークが重なる波源</p> <p>概略検討の対象波源</p> <ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: のの字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

④概略検討 (3/5) 検討結果 (矩形モデル・くの字モデル)

再掲 (R5/10/20審査会合)

- 「矩形モデル・くの字モデル」を変動させた場合の水位時刻歴波形を比較し、ピークの水位が高い波源として以下を選定した。
 - 地震に伴う津波の第2波 (東移動) : 「矩形モデル」を選定した (「くの字モデル」はピークが重ならないため、選定しない)。
 - 地震に伴う津波の第1波 (西移動) : 「矩形モデル・くの字モデル」は第1波の波形が同じ傾向であり、「くの字モデル」とした場合に第1波のピークの水位が高い傾向があることから、「矩形モデル」を選定した。

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波 (東移動)				
	「くの字モデル」はピークが重ならないため、「矩形モデル」との比較ができない。			

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第1波 (西移動)	<p>【矩形モデル・くの字モデル】</p> <p>○「矩形モデル・くの字モデル」は第1波の波形が同じ傾向であり、「くの字モデル」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>【凡例】</p> <ul style="list-style-type: none"> --- 断層パターン5, 矩形モデル (西へ20km) — 断層パターン5, くの字モデル (西へ10km) <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>	<p>【矩形モデル・くの字モデル】</p> <p>○「矩形モデル・くの字モデル」は第1波の波形が同じ傾向であり、「くの字モデル」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>【凡例】</p> <ul style="list-style-type: none"> --- 断層パターン6, 矩形モデル (西へ20km) — 断層パターン6, くの字モデル (西へ10km) <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>	<p>【矩形モデル・くの字モデル】</p> <p>○「矩形モデル・くの字モデル」は第1波の波形が同じ傾向であり、「くの字モデル」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>【凡例】</p> <ul style="list-style-type: none"> --- 断層パターン7, 矩形モデル (西へ35km) — 断層パターン7, くの字モデル (西へ25km) <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>	<p>【矩形モデル・くの字モデル】</p> <p>○「矩形モデル・くの字モデル」は第1波の波形が同じ傾向であり、「くの字モデル」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>【凡例】</p> <ul style="list-style-type: none"> --- 断層パターン8, 矩形モデル (西へ35km) — 断層パターン8, くの字モデル (西へ25km) <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>

※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

④概略検討 (4/5) 検討結果 (断層パターン)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「断層パターン」を変動させた場合の水位時刻歴波形を比較し、ピークの水位が高い波源として以下を選定した。

- 地震に伴う津波の第2波 (東移動) :断層パターン5, 断層パターン7の第2波の波形が異なり, いずれの波源も組合せ評価の水位が高くなる可能性があることから, 断層パターン5, 断層パターン7を選定した。
- 地震に伴う津波の第1波 (西移動) :断層パターン6・断層パターン7・断層パターン8の第1波の波形が異なり, いずれの波源も組合せ評価の水位が高くなる可能性があることから, 断層パターン6・断層パターン7・断層パターン8を選定した*。

*断層パターン5は, 断層パターン6と第1波の波形が同じ傾向であり, 断層パターン6の方が第1波の水位が高いことより, 断層パターン6で代表させる。

断層パターン5

断層パターン6

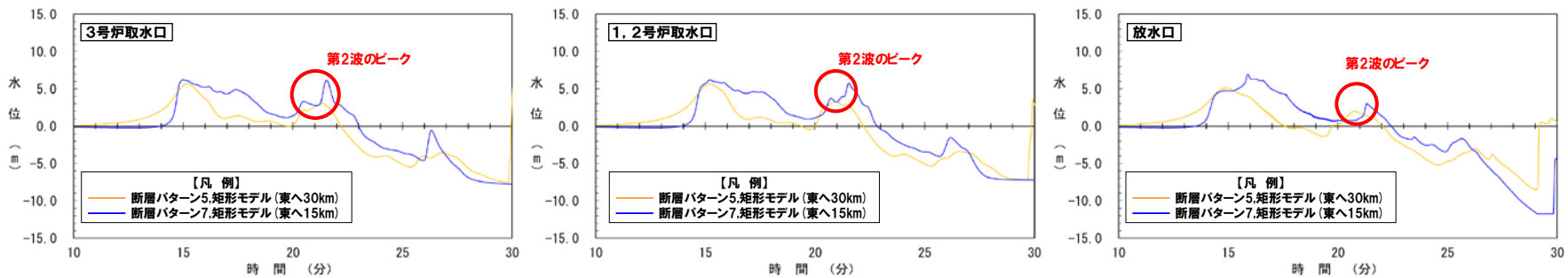
断層パターン7

断層パターン8

地震に伴う津波の第2波 (東移動)

【断層パターン】

○断層パターン5・断層パターン7の第2波の波形が異なり, いずれの波源も組合せ評価の水位が高くなる可能性がある。



全地形モデルのうち組合せ評価においてピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③)を用いて整理した。

断層パターン5

断層パターン6

断層パターン7

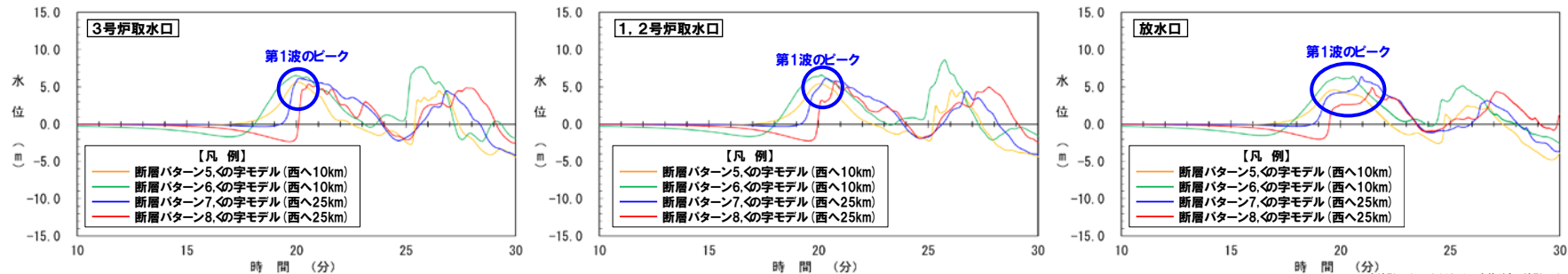
断層パターン8

地震に伴う津波の第1波 (西移動)

【断層パターン】

○断層パターン6・断層パターン7・断層パターン8の第1波の波形が異なり, いずれの波源も組合せ評価の水位が高くなる可能性がある。

○断層パターン5は, 断層パターン6と第1波の波形が同じ傾向であり, 断層パターン6の方が第1波の水位が高いことより, 断層パターン6で代表させる。



全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③)を用いて整理した。

*水位時刻歴波形は, 3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

④概略検討 (5/5) 検討結果 (まとめ)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「④概略検討」の結果に基づく「⑤詳細検討」の対象波源の選定結果は、以下のとおりである。

- 地震に伴う津波の第2波 (東移動) : **断層パターン5 (矩形モデル, 東へ30km)**,
断層パターン7 (矩形モデル, 東へ15km) を選定した。
- 地震に伴う津波の第1波 (西移動) : **断層パターン6 (くの字モデル, 西へ10km)**,
断層パターン7 (くの字モデル, 西へ25km),
断層パターン8 (くの字モデル, 西へ25km) を選定した。

		断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波 (東移動)	矩形モデル	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: 矩形モデル (東へ30km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	重ならない	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル (東へ15km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	重ならない
	くの字モデル	重ならない	重ならない	重ならない	重ならない
地震に伴う津波の第1波 (西移動)	矩形モデル	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: 矩形モデル (西へ20km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: 矩形モデル (西へ20km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル (西へ35km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: 矩形モデル (西へ35km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km
	くの字モデル	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: くの字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: くの字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: くの字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: くの字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de 断層面上縁深さ: 5km

「矩形モデル・くの字モデル」の比較結果 (前々頁参照) より選定しない。

「断層パターン」の比較結果 (前頁参照) より選定しない。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑤ 詳細検討 (1/4) 検討方法

再掲 (R5/10/20 審査会合)

○詳細検討では、「アスペリティ位置」「断層面上縁深さ」を変動させた解析を実施し、水位時刻歴波形の比較から、ピークの水位が高くなる波源を選定する。

○変動範囲は、以下のとおりとする。

【アスペリティ位置】

○アスペリティ位置: de~ef においてピークの水位が高くなることを確認していることから、以下の変動範囲を考慮する。

➢ de~ef (10kmピッチ) ※

※「アスペリティ位置: de~ef (10kmピッチ)」の変動範囲内においてピークの水位が高くなるアスペリティ位置を選定できている (次頁参照)。

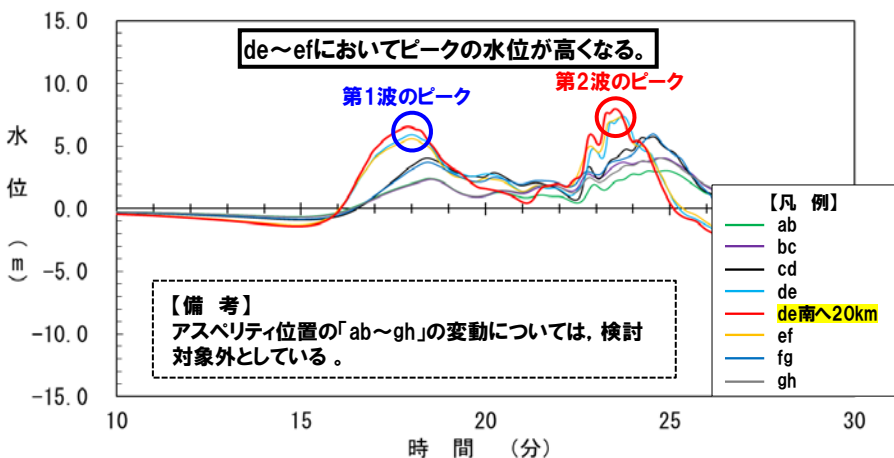
【断層面上縁深さ】

○断層面上縁深さの変動に伴うピークの水位への影響は小さいことを確認している。

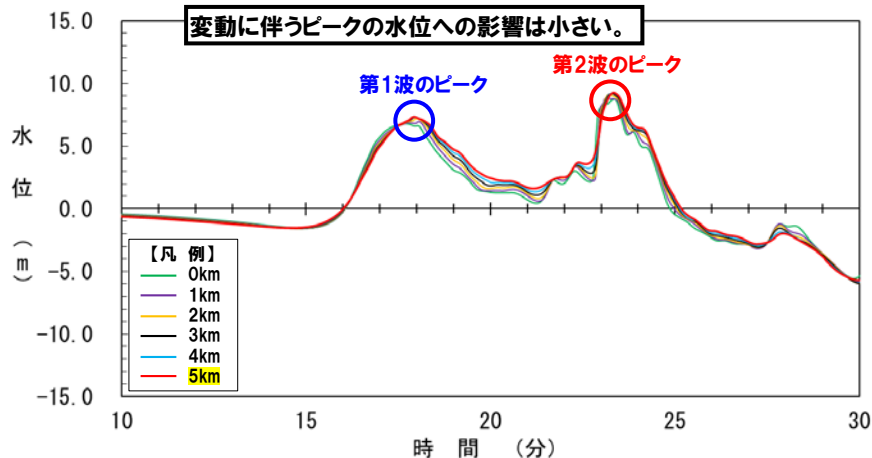
○一方、ピークの水位に与える影響を定量的に評価するため、以下の3点 (上限値・中間値・下限値) の変動範囲を考慮する。

- 0km
- 3km
- 5km

【アスペリティ位置の変動による影響】



【断層面上縁深さの変動による影響】



※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。
※波源:「地震に伴う津波」のSTEP1-2・STEP4の検討ケース、地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①の結果を用いて整理した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑤詳細検討 (2/4) 検討結果 (アスペリティ位置)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「アスペリティ位置」を変動させた場合の水位時刻歴波形を比較し、ピークの水位が高い波源として以下を選定した。

- 地震に伴う津波の第2波 (東移動) : 断層パターンに応じ、ピークの水位が高くなる「de南20km」、若しくは、「de南30km」を選定した*。
- 地震に伴う津波の第1波 (西移動) : 断層パターンに応じ、ピークの水位が高くなる「de南20km」、若しくは、「de南30km」を選定した。

※地震に伴う津波の第2波 (東移動) の断層パターン7では、「組合せ評価の最大ケース」の選定過程の波源であることから、評価項目毎にピークの水位が高くなるアスペリティ位置を選定した。

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波 (東移動)	<p>【アスペリティ位置】</p> <p>○「de南へ30km」とした場合に第2波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (健全地形モデル) を用いて整理した。</p>	<p>○重ならないため検討対象としない (「③ピークが重なる波源」参照)。</p>	<p>【アスペリティ位置】</p> <p>○3号炉取水口・1, 2号炉取水口では、「de南へ20km」とした場合、放水口では「de南へ30km」とした場合に、第2波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル②) を用いて整理した。</p>	<p>○重ならないため検討対象としない (「③ピークが重なる波源」参照)。</p>
			<p>※断層パターン7は、「組合せ評価の最大ケース」の選定過程の波源であることから、評価項目毎にピークの水位が高くなる「アスペリティ位置」を選定した。</p>	

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第1波 (西移動)	<p>○断層パターン5は、断層パターン6と第1波の波形が同じ傾向であり、断層パターン6の方が第1波の水位が高いことより、断層パターン6にて代表させる (「④概略検討」参照)。</p>	<p>【アスペリティ位置】</p> <p>○「de南へ20km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>	<p>【アスペリティ位置】</p> <p>○「de南へ20km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル③) を用いて整理した。</p>	<p>【アスペリティ位置】</p> <p>○「de南へ30km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル①) を用いて整理した。</p>

※水位時刻歴波形は、それぞれ3号炉取水口前面・放水口前面の代表点から抽出した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑤詳細検討 (3/4) 検討結果 (断層面上縁深さ)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「断層面上縁深さ」を変動させた場合の水位時刻歴波形を比較し、ピークの水位が高い波源として以下を選定した。

- 地震に伴う津波の第2波 (東移動) : 断層パターンに応じ、ピークの水位が高くなる「0km」、若しくは、「5km」を選定した※。
- 地震に伴う津波の第1波 (西移動) : 断層パターンに応じ、ピークの水位が高くなる「0km」、若しくは、「5km」を選定した。

※地震に伴う津波の第2波 (東移動) の断層パターン7では、「組合せ評価の最大ケース」の選定過程の波源であることから、評価項目毎にピークの水位が高くなる断層面上縁深さを選定した。

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波 (東移動)	<p>【断層面上縁深さ】</p> <p>○「0km」とした場合に第2波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル2) を用いて整理した。</p>	<p>○重ならないため検討対象としない (「③ ピークが重なる波源」参照)。</p>	<p>【断層面上縁深さ】</p> <p>○3号炉取水口・1, 2号炉取水口及び放水口において、「5km」とした場合に第2波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル2) を用いて整理した。</p>	<p>○重ならないため検討対象としない (「③ ピークが重なる波源」参照)。</p>

※断層パターン7は、「組合せ評価の最大ケース」の選定過程の波源であることから、評価項目毎にピークの水位が高くなる「断層面上縁深さ」を選定した。

	断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第1波 (西移動)	<p>○断層パターン5は、断層パターン6と第1波の波形が同じ傾向であり、断層パターン6の方が第1波の水位が高いことより、断層パターン6にて代表させる (「④概略検討」参照)。</p>	<p>【断層面上縁深さ】</p> <p>○「5km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル3) を用いて整理した。</p>	<p>【断層面上縁深さ】</p> <p>○「5km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル3) を用いて整理した。</p>	<p>【断層面上縁深さ】</p> <p>○「0km」とした場合に第1波のピークの水位が高い。</p> <p>全地形モデルのうちピークの水位が高い地形モデル (防波堤の損傷を考慮した地形モデル1) を用いて整理した。</p>

※水位時刻歴波形は、3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑤詳細検討(4/4) 検討結果(まとめ)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「⑤詳細検討」の結果に基づく「⑥組合せ評価」の対象波源の選定結果は、以下のとおりである。

- 地震に伴う津波の第2波(東移動): 「断層パターン5, 矩形モデル(東へ30km), アスペリティ位置: de南へ30km, 断層面上縁深さ: 0km」, 「断層パターン7, 矩形モデル(東へ15km), アスペリティ位置: de南へ20km, 断層面上縁深さ: 5km」, 「断層パターン7, 矩形モデル(東へ15km), アスペリティ位置: de南へ30km, 断層面上縁深さ: 5km」を選定した。
- 地震に伴う津波の第1波(西移動): 「断層パターン6, くの字モデル(西へ10km), アスペリティ位置: de南へ20km, 断層面上縁深さ: 5km」, 「断層パターン7, くの字モデル(西へ25km), アスペリティ位置: de南へ20km, 断層面上縁深さ: 5km」, 「断層パターン8, くの字モデル(西へ25km), アスペリティ位置: de南へ30km, 断層面上縁深さ: 0km」を選定した。

		断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第2波(東移動)	矩形モデル	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 5 波源位置: 矩形モデル(東へ30km) アスペリティ位置: de南へ30km 断層面上縁深さ: 0km 	重ならない	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 	重ならない
	くの字モデル			<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置: de南へ30km 断層面上縁深さ: 5km 	

※断層パターン7は、「組合せ評価の最大ケース」の選定過程の波源であることから、評価項目毎にピークの水位が高くなる「アスペリティ位置」を選定した。

		断層パターン5	断層パターン6	断層パターン7	断層パターン8
地震に伴う津波の第1波(西移動)	矩形モデル				
	くの字モデル	<p>断層パターン5は、断層パターン6と第1波の波形が同じ傾向であり、断層パターン6の方が第1波の水位が高いことより、断層パターン6にて代表させる(「④概略検討」参照)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: くの字モデル(西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: くの字モデル(西へ25km) アスペリティ位置: de南へ30km 断層面上縁深さ: 0km

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑥ 組合せ評価 (1/2) 検討結果 (地震に伴う津波の第2波 (東移動))

一部修正 (R5/10/20審査会合)

○地震に伴う津波の第2波 (東移動) について、「⑤詳細検討」より選定した右記の3波源を対象に、組合せの時間差 ($T_s \sim T_s + T_d$) を5sピッチで考慮した組合せ評価を実施した。

○上記より得られた最大ケースを下表に示す。

「⑤詳細検討」より選定した波源

- ・断層パターン: 5
- ・波源位置: 矩形モデル (東へ30km)
- ・アスペリティ位置: de南へ30km
- ・断層面上縁深さ: 0km

- ・断層パターン: 7
- ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km)
- ・アスペリティ位置: de南へ20km
- ・断層面上縁深さ: 5km

- ・断層パターン: 7
- ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km)
- ・アスペリティ位置: de南へ30km
- ・断層面上縁深さ: 5km

地震に伴う津波の第2波 (東移動) の組合せ評価結果

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
防潮堤前面 (上昇側)	12.90m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 75s 	15.65m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 115s 	14.98m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 115s 	15.68m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 110s
3号炉取水口 (上昇側)	10.45m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 110s 	13.14m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 110s 	11.86m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 115s 	12.89m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 110s
1, 2号炉取水口 (上昇側)	9.11m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 80s 	12.74m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 115s 	12.01m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 85s 	11.50m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 120s
放水口 (上昇側)	10.91m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 135s 	10.84m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 135s 	10.85m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 135s 	10.66m	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 135s
「貯留堰を下回る時間」	704s	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 65s 	626s	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 5 ・波源位置: 矩形モデル (東へ30km) ・アスペリティ位置: de南へ30km ・断層面上縁深さ: 0km ・組合せの時間差: 115s 	743s	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 135s 	844s	<ul style="list-style-type: none"> ・断層パターン: 7 ・波源位置: 矩形モデル (東へ15km) ・アスペリティ位置: de南へ20km ・断層面上縁深さ: 5km ・組合せの時間差: 80s

黄色ハッチング: 「組合せ評価の最大ケース」となる波源

5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価

(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

⑥ 組合せ評価 (2/2) 検討結果 (地震に伴う津波の第1波 (西移動))

一部修正 (R5/10/20 審査会合)

○地震に伴う津波の第1波 (西移動) について、「⑤ 詳細検討」より選定した右記の3波源を対象に、組合せの時間差 ($T_s \sim T_s + T_d$) を5sピッチで考慮した組合せ評価を実施した。

○上記より得られた最大ケースを下表に示す。

「⑤ 詳細検討」より選定した波源

- 断層パターン: 6
- 波源位置: <の字モデル (西へ10km)
- アスペリティ位置: de南へ20km
- 断層面上縁深さ: 5km

- 断層パターン: 7
- 波源位置: <の字モデル (西へ25km)
- アスペリティ位置: de南へ20km
- 断層面上縁深さ: 5km

- 断層パターン: 8
- 波源位置: <の字モデル (西へ25km)
- アスペリティ位置: de南へ30km
- 断層面上縁深さ: 0km

地震に伴う津波の第1波 (西移動) の組合せ評価結果

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
防潮堤前面 (上昇側)	13.05m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 65s 	13.09m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ30km 断層面上縁深さ: 0km 組合せの時間差: 40s 	13.03m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 60s 	13.13m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 40s
3号炉取水口 (上昇側)	8.38m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 55s 	11.75m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 40s 	9.39m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 90s 	11.97m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 40s
1, 2号炉取水口 (上昇側)	8.60m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 30s 	10.66m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 8 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ30km 断層面上縁深さ: 0km 組合せの時間差: 55s 	10.42m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 105s 	10.41m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 30s
放水口 (上昇側)	10.45m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 70s 	10.14m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 135s 	10.43m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 70s 	10.21m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 135s
「貯留堰を下回る時間」	712s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 30s 	698s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル (西へ25km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 45s 	719s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 30s 	715s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル (西へ10km) アスペリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 55s

黄色ハッチング: 「組合せ評価の最大ケース」となる波源

余白

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価

検討方法

再掲 (R5/10/20審査会合)

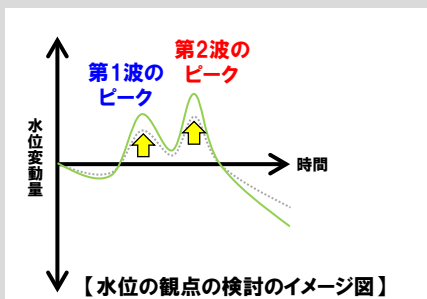
○地震に伴う津波のうち水位が高い波源であれば、組合せ評価の水位が高くなる可能性があるため、「地震に伴う津波の水位」について着目する。

○上記の組合せ評価として、「B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価」を実施する。

「地震に伴う津波」

○地震に伴う津波の全波源を対象として、各断層パラメータの変動を考慮したパラメータスタディから、ピークの水位が高い波源を選定した(水位の観点の検討)。

○各評価項目の最大ケースとして計18ケースが選定された。



「B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価」

○「地震に伴う津波」の最大ケース(計18ケース)を検討対象波源として、組合せ評価を実施した。

「地震に伴う津波」より選定した各評価項目の最大ケース(計18ケース)

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要				
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスペリティ位置	断層面上縁深さ
ケース①	健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース②		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース③		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケースI		断層パターン7	くの字モデル	基準	de南へ20km	5km
ケース⑤	防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑥		断層パターン5	くの字モデル	西へ55km	de南へ10km	1km
ケース⑦		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース⑧		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケースII	防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン7	矩形モデル	基準	de南へ20km	1km
ケース⑩		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑪		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース⑫		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケース⑭	防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	1km
ケース⑮		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	4km
ケース⑯		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	0km
ケース⑰		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース⑱		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	3km
ケースIII		断層パターン7	くの字モデル	東へ20km	de北へ10km	2km

(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価

組合せ評価結果

一部修正 (R5/10/20審査会合)

○「地震に伴う津波」の最大ケース(計18ケース)を検討対象波源として、組合せ評価を実施した結果は下表のとおりである。

「B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価」の最大ケース

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
防潮堤前面 (上昇側)	13.44m	・【ケース①】 ・断層パターン:6 ・波源位置:くの字モデル(東へ10km) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:115s	14.11m	・【ケース⑧】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:115s	13.55m	・【ケース⑩】 ・断層パターン:6 ・波源位置:くの字モデル(東へ10km) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:115s	13.48m	・【ケース⑫】 ・断層パターン:6 ・波源位置:くの字モデル(東へ10km) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:4km ・組合せの時間差:110s
3号炉 取水口 (上昇側)	9.51m	・【ケース③】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:110s	11.82m	・【ケース⑧】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:110s	10.93m	・【ケース⑫】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:115s	11.52m	・【ケース⑭】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:3km ・組合せの時間差:120s
1, 2号炉 取水口 (上昇側)	8.74m	・【ケース①】 ・断層パターン:6 ・波源位置:くの字モデル(東へ10km) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:23s	11.84m	・【ケース⑧】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:115s	11.57m	・【ケース⑩】 ・断層パターン:6 ・波源位置:くの字モデル(東へ10km) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:45s	10.68m	・【ケース⑭】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:3km ・組合せの時間差:131s
放水口 (上昇側)	10.28m	・【ケース①】 ・断層パターン:7 ・波源位置:くの字モデル(基準) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せ時間差:30s	9.97m	・【ケース⑧】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:133s	9.94m	・【ケース⑫】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:133s	9.25m	・【ケース⑭】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:3km ・組合せの時間差:133s
「貯留堰を 下回る時間」	715s	・【ケース①】 ・断層パターン:7 ・波源位置:くの字モデル(基準) ・アスペリティ位置:de南へ20km ・断層面上縁深さ:5km ・組合せ時間差:150s	677s	・【ケース⑥】 ・断層パターン:5 ・波源位置:くの字モデル(西へ55km) ・アスペリティ位置:de南へ10km ・断層面上縁深さ:1km ・組合せの時間差:172s	728s	・【ケース⑫】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:5km ・組合せの時間差:133s	863s	・【ケース⑭】 ・断層パターン:7 ・波源位置:矩形モデル(東へ15km) ・アスペリティ位置:de ・断層面上縁深さ:3km ・組合せの時間差:90s

黄色ハッチング:「組合せ評価の最大ケース」となる波源

余白

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

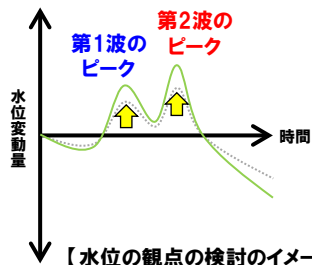
検討方法

再掲 (R5/10/20審査会合)

- 地震に伴う津波のうち水位が高い波源であれば、組合せ評価の水位が高くなる可能性があるため、「地震に伴う津波の水位」について着目する。
- 上記の組合せ評価として、「B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価」を実施する。

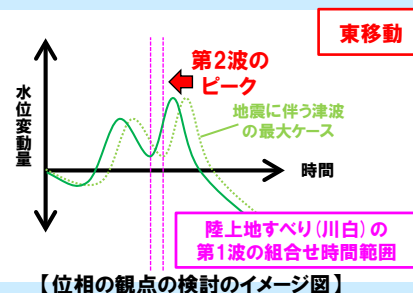
「地震に伴う津波」

- 地震に伴う津波の全波源を対象として、各断層パラメータの変動を考慮したパラメータスタディから、ピークの水位が高い波源を選定した(水位の観点の検討)。
- 各評価項目の最大ケースとして計18ケースが選定された。



「B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価」

- 「地震に伴う津波」の最大ケース(計18ケース)のうち、第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源を検討対象波源として、陸上地すべり(川白)の第1波のピークと重なる東西方向に、波源位置(位相)の変動を考慮した組合せ評価を実施する(位相の観点の検討)。



西移動(地震に伴う津波の第1波を対象)も検討しているが、東移動(地震に伴う津波の第2波を対象)の場合のイメージ図を例示

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

検討対象波源の選定 (1/3)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○「地震に伴う津波」の最大ケースのうち、第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源(下表:黄色ハッチングケース)を検討対象波源として選定した。

【「地震に伴う津波」の最大ケース(黄色ハッチング:第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源)】

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要					ピークの水位					
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスベリティ位置	断層面上縁深さ	第1波のピークの水位			第2波のピークの水位		
							3号炉取水口	1,2号炉取水口	放水口	3号炉取水口	1,2号炉取水口	放水口
ケース①	健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km	6.03m	6.35m	7.64m	8.40m	8.59m	6.20m
ケース②		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km	5.02m	5.08m	5.88m	6.76m	7.03m	4.61m
ケース③		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km	5.59m	5.50m	6.46m	5.94m	5.71m	2.80m
ケースI		断層パターン7	くの字モデル	基準	de南へ20km	5km	5.78m	5.64m	6.43m	5.50m	5.58m	3.30m
ケース⑤	防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km	7.34m	7.62m	7.61m	9.26m	10.20m	6.32m
ケース⑥		断層パターン5	くの字モデル	西へ55km	de南へ10km	1km	5.05m	4.97m	4.16m	6.23m	5.38m	5.28m
ケース⑦		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km	5.82m	5.94m	5.91m	6.95m	7.72m	4.80m
ケース⑧		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km	6.24m	6.20m	6.96m	6.16m	5.80m	3.03m
ケースII		断層パターン7	矩形モデル	基準	de南へ20km	1km	6.82m	6.41m	6.95m	6.08m	5.32m	2.93m
ケース⑩	防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km	6.54m	6.78m	7.63m	9.38m	10.40m	6.32m
ケース⑪		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km	5.44m	5.52m	5.86m	7.19m	7.98m	4.60m
ケース⑫		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km	6.02m	5.85m	6.48m	7.35m	7.05m	2.71m
ケース⑭	防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	1km	7.24m	7.31m	7.12m	7.58m	9.02m	5.62m
ケース⑮		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	4km	7.74m	7.87m	7.62m	8.98m	9.05m	6.18m
ケース⑯		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	0km	7.51m	7.63m	7.32m	8.30m	9.28m	6.40m
ケース⑰		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km	6.42m	6.37m	6.02m	6.63m	7.46m	4.74m
ケース⑱		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	3km	6.76m	6.76m	7.03m	4.17m	4.07m	2.83m
ケースIII		断層パターン7	くの字モデル	東へ20km	de北へ10km	2km	5.28m	5.48m	5.91m	5.76m	5.40m	4.17m

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

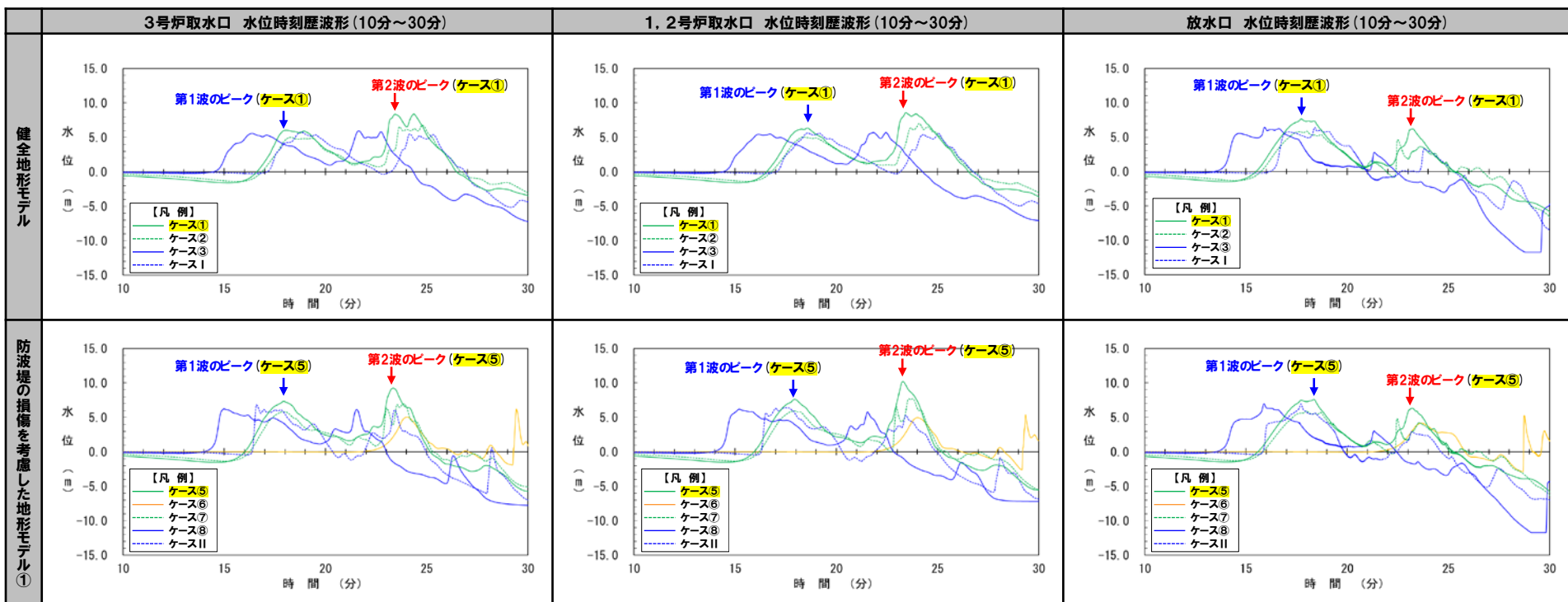
検討対象波源の選定 (2/3) 健全地形モデル・防波堤の損傷を考慮した地形モデル①

再掲 (R5/10/20審査会合)

○第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源として、以下の波源を選定した。

- 健全地形モデル: ケース①
- 防波堤の損傷を考慮した地形モデル①: ケース⑤

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要				
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスペリティ位置	断層面上縁深さ
ケース①	健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース②		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース③		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケース④		断層パターン7	くの字モデル	基準	de南へ20km	5km
ケース⑤	防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑥		断層パターン5	くの字モデル	西へ55km	de南へ10km	1km
ケース⑦		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース⑧		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケースII		断層パターン7	矩形モデル	基準	de南へ20km	1km



※水位時刻歴波形は、それぞれ3号炉取水口前面・1, 2号炉取水口前面・放水口前面の代表点から抽出している。

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

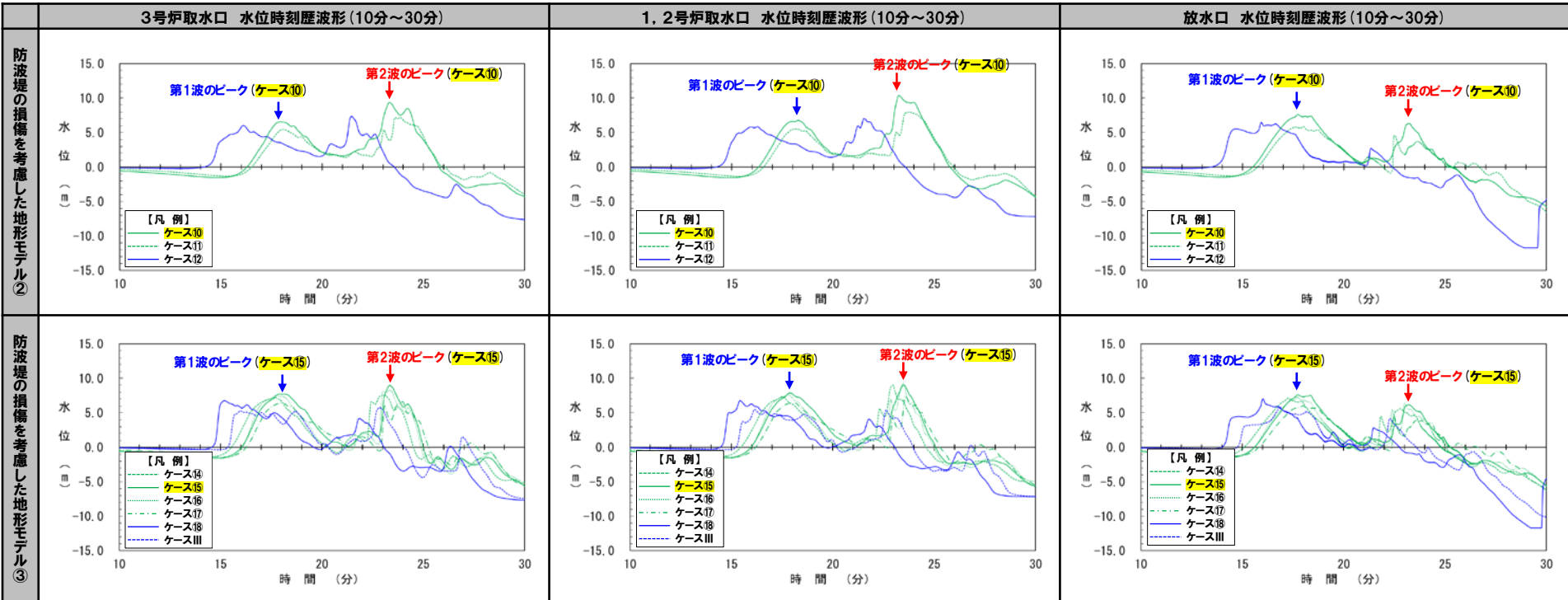
検討対象波源の選定 (3/3) 防波堤の損傷を考慮した地形モデル②・③

再掲 (R5/10/20審査会合)

○第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位が高い波源として、以下の波源を選定した。

- 防波堤の損傷を考慮した地形モデル②: ケース10
- 防波堤の損傷を考慮した地形モデル③: ケース15

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要				
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスペリティ位置	断層面上縁深さ
ケース10	防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース11		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース12		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	5km
ケース14	防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	1km
ケース15		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	4km
ケース16		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	0km
ケース17		断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de北へ10km	0km
ケース18		断層パターン7	矩形モデル	東へ15km	de	3km
ケースIII		断層パターン7	くの字モデル	東へ20km	de北へ10km	2km



※水位時刻歴波形は、それぞれ3号炉取水口前面・1, 2号炉取水口前面・放水口前面の代表点から抽出している。

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

各断層パラメータの変動による影響 (1/2)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○各断層パラメータの変動による影響を確認した結果(下表参照), 位相に影響のある断層パラメータは「東西方向位置」「矩形モデル・くの字モデル」である。

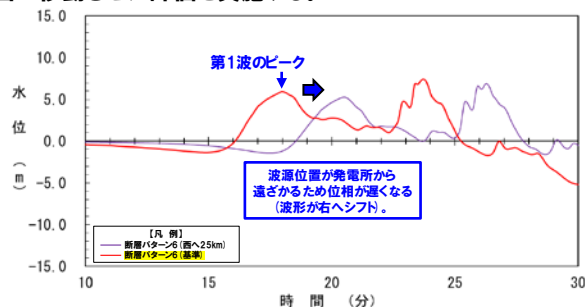
○以上を踏まえ, 検討対象波源(右表)について, 以下の断層パラメータの変動を考慮した組合せ評価を実施する。

- 陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第1波の組合せ評価:「東西方向位置」を西へ移動
- 陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第2波の組合せ評価:「矩形モデル」に変更

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要				
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスベリティ位置	断層面上縁深さ
ケース①	健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑤	防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑩	防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑮	防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	4km

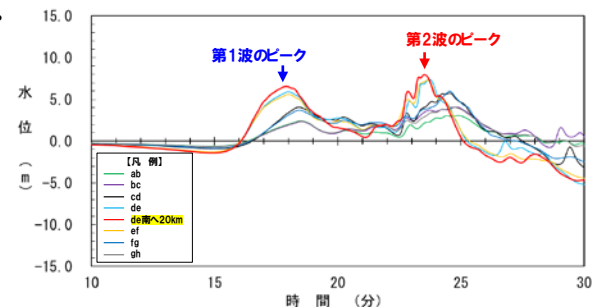
【東西方向位置】

- 東西方向位置を西へ移動させることで, 波源位置が発電所から遠ざかるため, 位相が遅くなる(第1波のピークの波形が右へシフト)。
- 「陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第1波」の組合せ評価として, 「東西方向位置」を西へ移動させた評価を実施する。



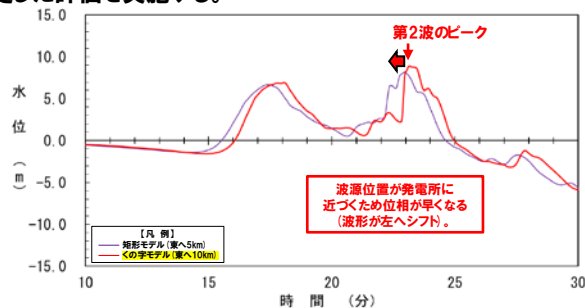
【アスベリティ位置】

- 第1波・第2波のピークが最大となるアスベリティ位置は, 「de南へ20km」である。
- 「アスベリティ位置」は, 以下の理由により検討対象としない。
 - 「東西方向位置」と比較して, 「アスベリティ位置」の方が位相への影響が小さいこと。
 - 「アスベリティ位置」の変動に伴い, 位相は変動する(ただし, 影響が小さい)が, 水位も同時に低下すること。



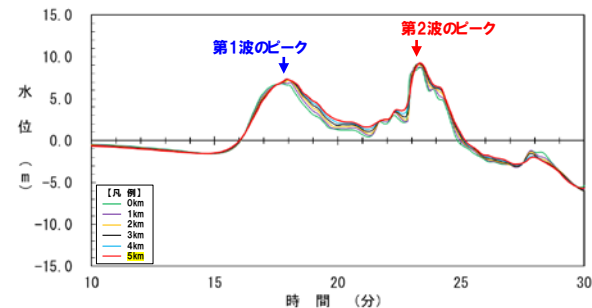
【矩形モデル・くの字モデル】

- 「くの字モデル」から「矩形モデル」に変更することで, 波源位置が発電所に近づくため, 位相が早くなる(第2波のピークの波形が左へシフト)。
- 「陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第2波」の組合せ評価として, 「矩形モデル」に変更した評価を実施する。



【断層面上縁深さ】

- 第1波・第2波のピークの位相に大きな影響がないため, 断層面上縁深さの変動は考慮しない。



※例として, 地形モデル:防波堤の損傷を考慮した地形モデル①, 評価地点:3号炉取水口を用いて整理した(黄色ハッチング)「地震に伴う津波」の各検討STEPにおける決定ケース。

5.3 水位が高い波源の組合せ評価

(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

各断層パラメータの変動による影響 (2/2)

再掲 (R5/10/20審査会合)

○検討対象波源 (右上表) について、以下の断層パラメータの変動を考慮した組合せ評価を実施した。

- ▶陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第1波の組合せ評価: 「東西方向位置」を西へ移動
- ▶陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第2波の組合せ評価: 「矩形モデル」に変更

ケース名	地形モデル	断層パラメータの概要				
		断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスベリティ位置	断層面上縁深さ
ケース①	健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑤	防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑩	防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	5km
ケース⑮	防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	くの字モデル	東へ10km	de南へ20km	4km

「陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第2波の組合せ評価」実施ケース

地形モデル	断層パラメータの概要				
	断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスベリティ位置	断層面上縁深さ
健全地形モデル	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	矩形モデル	東へ5km	de南へ20km	4km

波源位置が発電所に近づくため位相が早くなる (波形が左へシフト)。

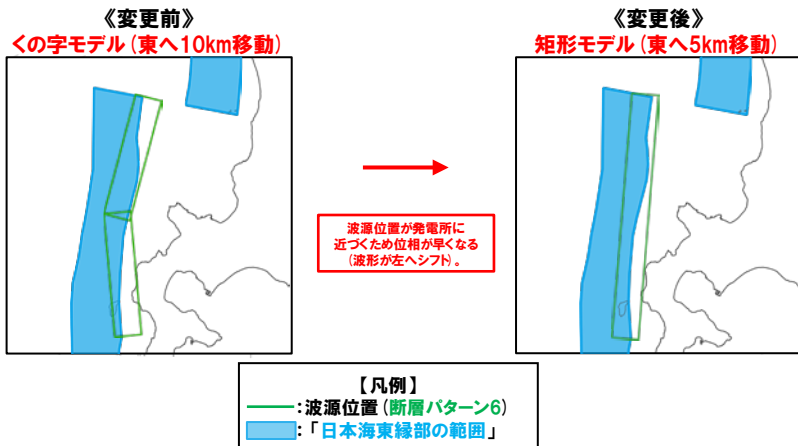
波源位置が発電所から遠ざかるため位相が遅くなる (波形が右へシフト)。

「陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第1波の組合せ評価」実施ケース

地形モデル	断層パラメータの概要				
	断層パターン	矩形モデル・くの字モデル	東西方向位置	アスベリティ位置	断層面上縁深さ
健全地形モデル	断層パターン6	くの字モデル	西へ10km	de南へ20km	5km
	断層パターン6	くの字モデル	西へ20km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル①	断層パターン6	くの字モデル	西へ25km	de南へ20km	5km
	断層パターン6	くの字モデル	西へ10km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル②	断層パターン6	くの字モデル	西へ10km	de南へ20km	5km
	断層パターン6	くの字モデル	西へ15km	de南へ20km	5km
防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	断層パターン6	くの字モデル	西へ10km	de南へ20km	4km
	断層パターン6	くの字モデル	西へ15km	de南へ20km	4km

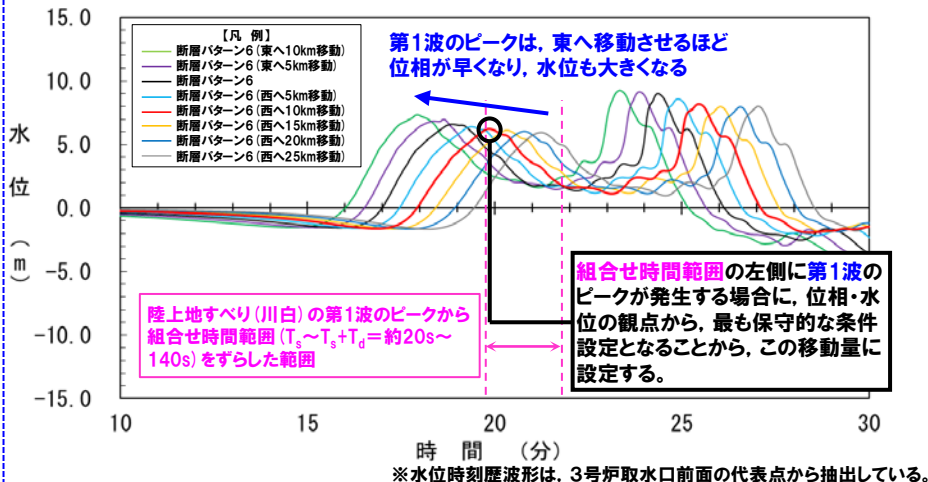
【備考: 「陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第2波の組合せ評価」実施ケースの考え方】

- 「東西方向位置」の移動量については、5kmピッチで東に移動させた場合に、日本海東縁部の範囲を網羅できる位置に設定した。
- なお、「矩形モデル・くの字モデル」の違いにより、それぞれ日本海東縁部の範囲を網羅できる移動量が異なるため、くの字モデル (東へ10km移動) ・矩形モデル (東へ5km) に設定している。



【備考: 「陸上地すべり (川白) の第1波と地震に伴う津波の第1波の組合せ評価」実施ケースの考え方】

- 東西方向位置を5km毎に変動させた解析 (地震に伴う津波) を実施し、組合せ時間範囲に入る西への移動量のうち保守的な条件となる移動量 (組合せ時間範囲において最も東側) に設定している。



(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価

組合せ評価結果

一部修正 (R5/10/20審査会合)

○「地震に伴う津波」の最大ケース(計18ケース)のうち、**第1波のピークの水位及び第2波のピークの水位**が高い波源を検討対象波源として、**波源位置(位相)**の変動を考慮した組合せ評価を実施した結果は下表のとおりである。

「B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価」の最大ケース

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
防潮堤前面 (上昇側)	13.05m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:65s 	12.69m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:100s 	13.03m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:60s 	12.62m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:100s
3号炉 取水口 (上昇側)	9.09m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 	11.02m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:35s 	10.33m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:30s 	11.13m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:40s
1, 2号炉 取水口 (上昇側)	9.34m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 	10.23m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:45s 	11.05m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 	10.38m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:30s
放水口 (上昇側)	10.45m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:70s 	9.87m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:70s 	10.43m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:70s 	9.92m	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:70s
「貯留堰を 下回る時間」	721s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ20km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:40s 	682s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:80s 	719s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:30s 	742s	<ul style="list-style-type: none"> 断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:35s

黄色ハッチング:「組合せ評価の最大ケース」となる波源

余白

5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源（組合せ評価結果の最大ケース）

一部修正 (R5/12/8審査会合)

○以下の組合せ評価の最大ケースをまとめた結果は、下表のとおりである。

- 5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価
- 5.3 水位が高い波源の組合せ評価

○組合せ評価結果の最大ケースを「敷地に対して大きな影響を及ぼす波源」として選定する。

【敷地に対して大きな影響を及ぼす波源（水位上昇側）】

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ
防潮堤前面 (上昇側)	13.44m	断層バターン:6 波源位置:くの字モデル(東へ10km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 A	15.65m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	14.98m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	15.68m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 F
3号炉 取水口 (上昇側)	10.45m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 B	13.14m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 F	11.86m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	12.89m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 B
1, 2号炉 取水口 (上昇側)	9.34m	断層バターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 C	12.74m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	12.01m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:85s 波源 G	11.50m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:120s 波源 H
放水口 (上昇側)	10.91m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.84m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.85m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.66m	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ30km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D

※4地形モデル×4評価項目=16最大ケースに対して、一部の最大ケースが重複する(同一波源が選定される)ため、波源 A~波源 Hの8波源となる。

【敷地に対して大きな影響を及ぼす波源（水位下降側）】

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
「貯留堰を 下回る時間」	721s	断層バターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ20km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:40s 波源 I	698s	断層バターン:7 波源位置:くの字モデル(西へ25km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:45s 波源 J	743s	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 K	863s	断層バターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置:de 断層面上縁深さ:3km 組合せの時間差:90s 波源 L

5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

水位上昇側の最大ケースの妥当性確認

一部修正 (R5/10/20 審査会合)

【津波の水位が最大となる波源の選定】

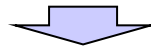
○地震に伴う津波の最大ケースではない波源であっても、陸上地すべり(川白)に伴う津波と重なる場合、組合せ後の水位上昇側の最大ケースとなる特徴があるため、地震に伴う津波と陸上地すべり(川白)に伴う津波の「**ピークが重なる波源**」及び、地震に伴う津波のうち、陸上地すべり(川白)に伴う津波とピークが重ならないが「**水位が高い波源**」を検討対象波源として、全波源の中から津波の水位上昇量が最大となる波源を網羅的に選定した。

《A:ピークが重なる波源の組合せ評価》

- 組合せ後の水位に影響の大きい波源の選定に当たっては、泊発電所の波源の特徴を踏まえて、地震に伴う津波と陸上地すべり(川白)に伴う津波のピークが重なるものを網羅的に抽出した。
- そのうえで、水位の高さに着目したアスペリティ位置などのパラメータスタディを行い、ピークの水位が高い波源を選定し、組合せ評価を実施した。

《B:水位が高い波源の組合せ評価》

- 地震に伴う津波のうち、陸上地すべり(川白)に伴う津波とピークが重ならないが水位が高い波源についても、組合せ評価を実施した。



○「**A:ピークが重なる波源の組合せ評価**」及び「**B:水位が高い波源の組合せ評価**」を実施することで、全波源の中から津波の水位上昇量が最大となる波源を網羅的に選定したことから、評価結果(選定した最大ケース)は妥当である。

5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源

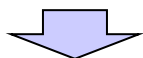
「貯留堰を下回る時間」の最大ケースの妥当性確認

一部修正 (R5/12/8審査会合)

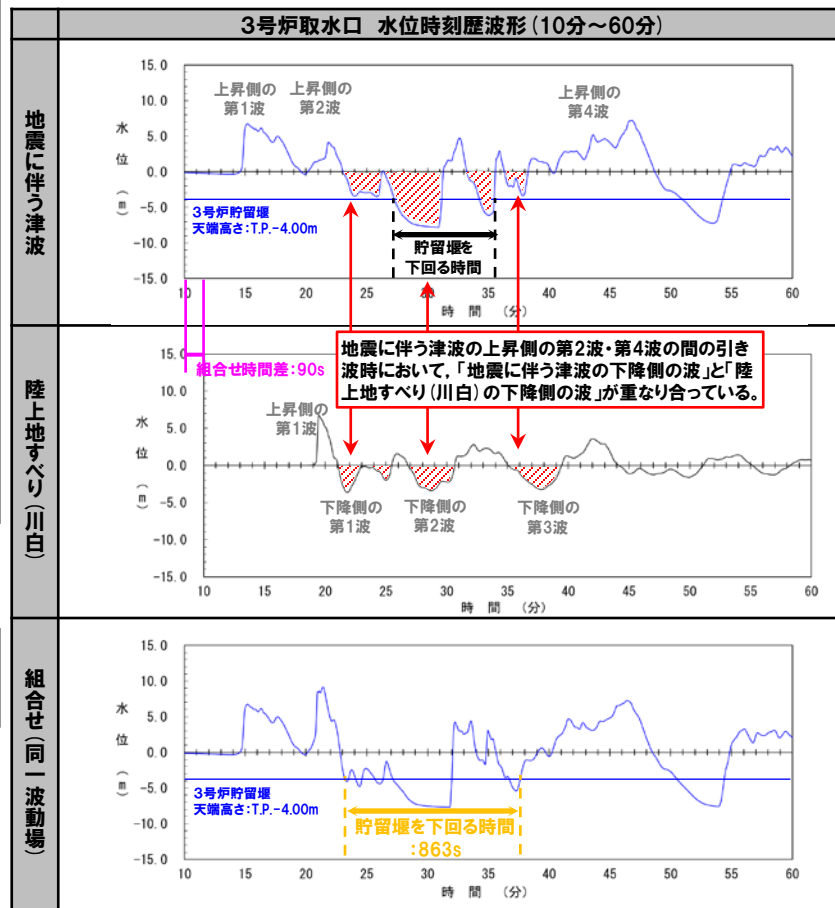
【「貯留堰が下回る時間」が最大となる波源の選定】

○組合せ評価において考慮する対象波源は、地震に伴う津波の「貯留堰を下回る時間」の最大ケース(検討対象波源①)に加え、地震に伴う津波において水位変動量が大きい波源は振幅が大きく、「貯留堰を下回る時間」が長い傾向があることから、地震に伴う津波の水位変動量が大きい波源(検討対象波源②)も検討対象とした。

○上記の検討対象波源①②を用いた組合せ評価の結果、地震に伴う津波の上昇側の第2波・第4波の間の引き波時(組合せ評価において水位時刻歴波形の着目する時間帯)において、「地震に伴う津波の下降側の波」と「陸上地すべり(川白)の下降側の波」が組合せ後の「貯留堰を下回る時間」に対する影響が大きくなるように重なり合い(右図参照)、組合せ前の時間より長くなっている。



○以上から、水位下降側の評価方法(波源の選定方法)及び評価結果(選定した最大ケース)は妥当である。



※水位時刻歴波形は、防波堤の損傷を考慮した地形モデル③の3号炉取水口前面の代表点から抽出した。

「貯留堰を下回る時間」の最大ケース

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要	評価値	断層パラメータの概要
「貯留堰を下回る時間」	721s ※水位下降量: 7.28m	「B-2:地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価」 断層パターン: 6 波源位置: <の字モデル(西へ20km) アスベリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 40s	698s ※水位下降量: 8.95m	「A:ピークが重なる波源の組合せ評価」 断層パターン: 7 波源位置: <の字モデル(西へ25km) アスベリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 45s	743s ※水位下降量: 10.77m	「A:ピークが重なる波源の組合せ評価」 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置: de南へ20km 断層面上縁深さ: 5km 組合せの時間差: 135s	863s ※水位下降量: 12.19m	「B-1:地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価」 断層パターン: 7 波源位置: 矩形モデル(東へ15km) アスベリティ位置: de 断層面上縁深さ: 3km 組合せの時間差: 90s

※参考値として、「貯留堰を下回る時間」の最大ケースにおける水位下降量を記載する。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

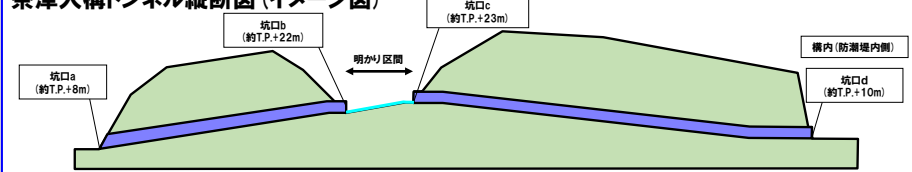
茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネルの概要

- 泊発電所の構内（防潮堤内側）へのアクセスのため、茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネルを設置する計画である。
- これらのトンネルの設置に伴い、津波評価が必要となる箇所は、以下の2箇所である。
 - 茶津入構トンネル明かり区間（標高約T.P.+23m）
 - アクセスルートトンネル坑口（標高約T.P.+21m）
- このため、茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴い、これらのトンネル坑口からの津波の流入の有無を確認する。

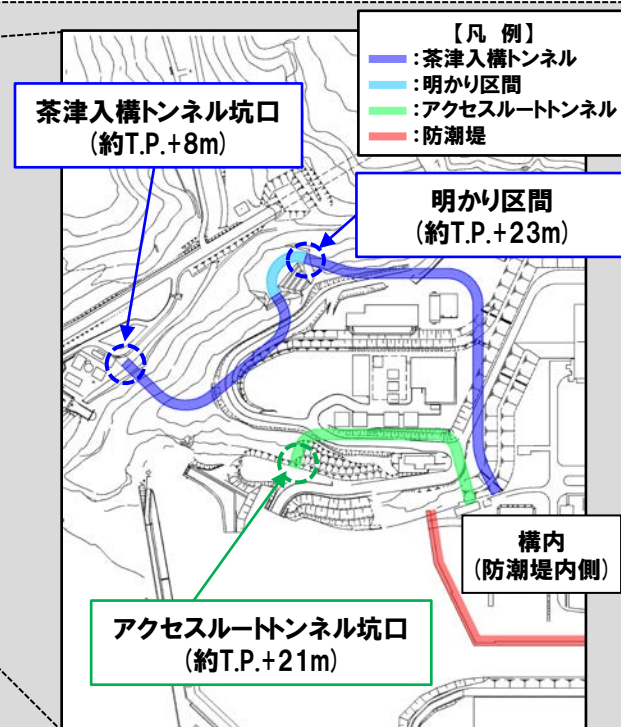
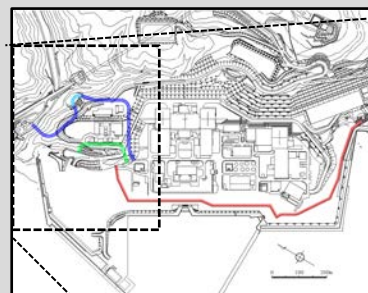
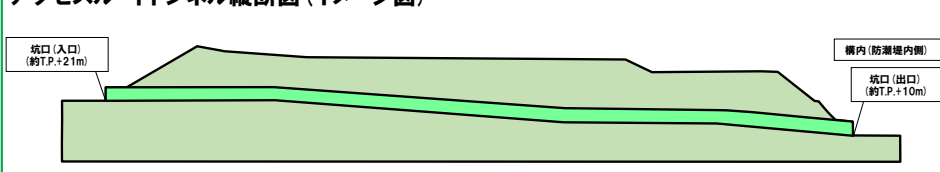
【茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネルの概要】

- 茶津入構トンネルは、茶津入構トンネル坑口（約T.P.+8m）から、明かり区間（約T.P.+22～23m）を経て構内（防潮堤内側）へ入るトンネルである。
- アクセスルートトンネルは、アクセスルートトンネル坑口（約T.P.+21m）から、構内（防潮堤内側）へ入るトンネルである。

茶津入構トンネル縦断面図（イメージ図）



アクセスルートトンネル縦断面図（イメージ図）



※茶津入構トンネルの構造については、今後、変更となる可能性がある。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

検討方針・検討フロー

【検討方針】

- 「敷地に対して大きな影響を及ぼす波源(次頁参照)※1」を対象に、両トンネル坑口の標高と津波の水位を比較することで、津波の流入の有無を確認する。
※1:「防潮堤前面・3号炉取水口・1, 2号炉取水口・放水口」に対して水位が高くなる波源。
- 「敷地に対して大きな影響を及ぼす波源」は、必ずしも「茶津入構トンネル・アクセスルートトンネル」に対しても水位が高くなる波源であるとは限らない。
- そのため、「茶津入構トンネル・アクセスルートトンネル」に対して水位が高くなる波源(以降、「影響確認波源」と呼ぶ)を選定し、トンネル坑口の標高と津波の水位を比較することで、津波の流入の有無を確認する。

【検討フロー】

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源による評価

影響確認波源による評価

: 5.5章の説明範囲

【敷地に対して大きな影響を及ぼす波源の選定】

- ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)
ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)
- 陸上地すべり(川白)の水位のピークと重なる日本海東縁部の「波源の位置」及び「断層パターン」並びに「水位に影響する断層パラメータ」を網羅的に検討して特定したうえで、組合せ評価により上昇側の水位を評価する。

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源による影響確認

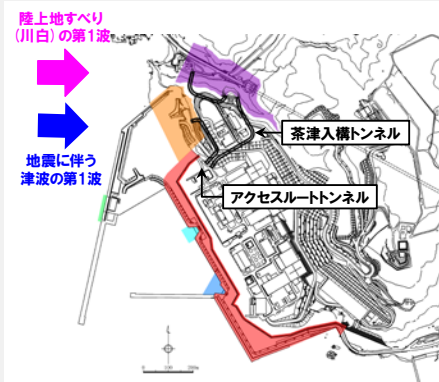
- 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源を対象に、以下の比較から、津波の流入の有無を確認する。
 - 茶津入構トンネル明かり区間(標高約T.P.+23m)と津波の水位の比較
 - アクセスルートトンネル坑口(標高約T.P.+21m)と津波の水位の比較

【影響確認波源の選定】

水位上昇メカニズムの分析

- 既往の解析結果を用いて、「茶津入構トンネル・アクセスルートトンネル」に影響の大きい津波の組合せを選定する。

分析結果を踏まえ、陸上地すべり(川白)の第1波と地震に伴う津波の第1波を選定する。



ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)

- ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)
- 陸上地すべり(川白)の水位のピークと重なる日本海東縁部の「波源の位置」及び「断層パターン」並びに「水位に影響する断層パラメータ」を網羅的に検討して特定したうえで、組合せ評価により上昇側の水位を評価する。

「茶津入構トンネル・アクセスルートトンネル」の最大ケースによる影響確認

- 影響確認波源を対象に、以下の比較から、津波の流入の有無を確認する。
 - 茶津入構トンネル明かり区間(標高約T.P.+23m)と津波の水位の比較
 - アクセスルートトンネル坑口(標高約T.P.+21m)と津波の水位の比較

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源による影響確認

○「敷地に対して大きな影響を及ぼす波源(波源A~H)」を対象として、トンネル坑口の標高と津波の水位を比較した結果は、以下のとおりである。

- 茶津入構トンネル明かり区間(約T.P.+23m)に対し、茶津入構トンネルの水位(約T.P.+13.22m^{*1})が低い。
- アクセスルートトンネル坑口(約T.P.+21m)に対し、アクセスルートトンネルの水位(約T.P.+14.01m^{*1})が低い。

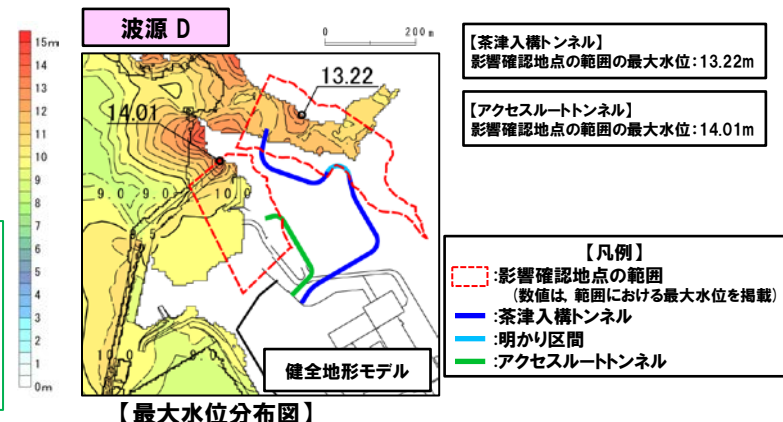
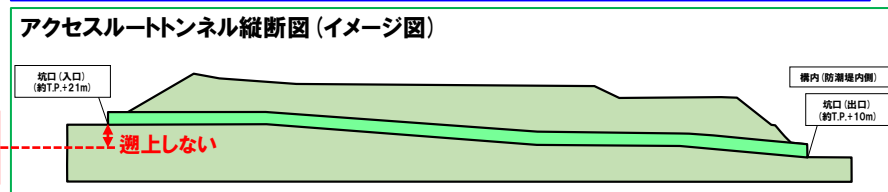
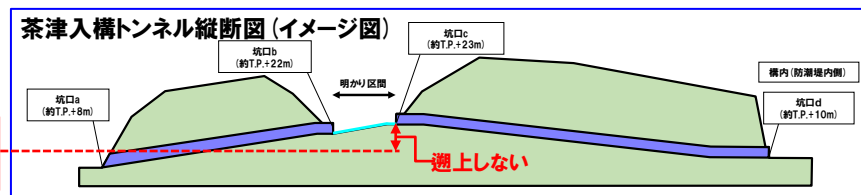
※1:トンネル坑口に遡上しないことから、影響確認地点における水位を記載。

敷地に対して大きな影響を及ぼす波源(水位上昇側):「組合せ評価の最大ケース」(水位上昇側:防波堤前面・3号炉取水口・1,2号炉取水口・放水口)^{*2}

評価項目	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ
防波堤前面(上昇側)	13.44m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(東へ10km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 A	15.65m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	14.98m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	15.68m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 F
3号炉取水口(上昇側)	10.45m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 B	13.14m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 F	11.86m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	12.89m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:110s 波源 B
1,2号炉取水口(上昇側)	9.34m	断層パターン:6 波源位置:矩形モデル(東へ5km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 C	12.74m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:115s 波源 E	12.01m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:85s 波源 G	11.50m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:120s 波源 H
放水口(上昇側)	10.91m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.84m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.85m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D	10.66m	断層パターン:7 波源位置:矩形モデル(東へ15km) アスペリティ位置:de南へ30km 断層面上線深さ:5km 組合せの時間差:135s 波源 D

※2:4地形モデル×4評価項目=16最大ケースに対して、一部の最大ケースが重複する(同一波源が選定される)ため、波源A~波源Hの8波源となる。

※3:波源A~Hのうち影響確認地点の水位が最も高い波源である波源Dを用いて整理した。

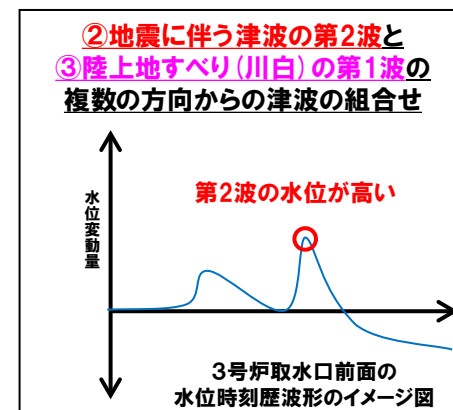
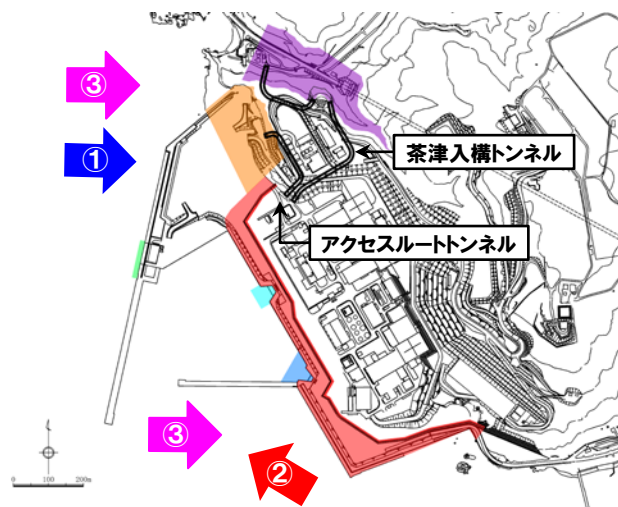
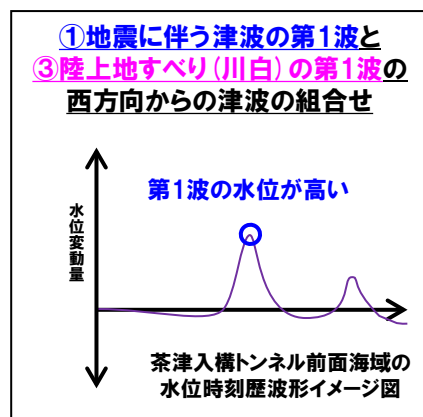


○以上より、トンネル坑口の標高に対して、津波の水位は低く、津波が流入しないことを確認した。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

水位上昇メカニズムの分析

○評価位置の違いにより、泊発電所周辺の地形・津波の伝播方向の影響が異なるため、評価項目（防潮堤前面他）と影響確認地点（茶津入構トンネル他）で水位が高くなる津波の組合せが異なることがわかった。



凡例		分析結果
影響確認地点	茶津入構トンネル	<ul style="list-style-type: none"> ○評価位置が海域に面しているのが西方向であり、地震に伴う津波の第2波（南東からの津波）と比較して、地震に伴う津波の第1波（西からの津波）による影響が大きい。 ○茶津入構トンネルは沢地形に位置し、西方向以外からは、遡上しない。 ○その結果、地震に伴う津波の第1波と陸上地すべり(川白)の第1波の、西方向からの津波の組合せの影響が大きい(上図の①③)。
	アクセスルートトンネル	

凡例		分析結果
評価項目	防潮堤前面	<ul style="list-style-type: none"> ○評価位置が海域に面している方向が限定的ではないため、様々な方向からの津波の影響を受ける。 ○更に防波堤の損傷の有無によって、防波堤の内側に位置する3号炉取水口・1, 2号炉取水口の水位は、津波の伝播方向の違いによる影響が大きい。 ○その結果、地震に伴う津波の第2波（南東からの津波）と陸上地すべり(川白)の第1波（西からの津波）の、複数の方向からの津波の組合せの影響が大きい(上図の②③)。
	3号炉取水口	
	1, 2号炉取水口	
	放水口	

《茶津入構トンネル・アクセスルートトンネルに影響の大きい津波の組合せ》

- 評価位置が海域に面しているのが西方向であり、地震に伴う津波の第2波（南東からの津波）と比較して、地震に伴う津波の第1波（西からの津波）による影響が大きい。
- 茶津入構トンネルは沢地形に位置し、西方向以外からは、遡上しない。
- その結果、**地震に伴う津波の第1波と陸上地すべり(川白)の第1波**の、西方向からの津波の組合せの影響が大きい。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)・ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

- 前頁の水位上昇メカニズムの分析結果より、西方向からの津波の組合せの影響が大きいことから、地震に伴う津波の第1波と陸上地すべり(川白)の第1波を組合せ評価の対象とする。
- 各断層パターンの波源位置(「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」)を変動させることで、位相が変動する(下記の「備考:断層パラメータの変動による影響」を参照)。
- これより、各断層パターンを検討対象波源として、位相に影響する断層パラメータを変動させた検討より、組合せ時間範囲において陸上地すべり(川白)の第1波のピークと地震に伴う津波の第1波のピークが重なる波源を特定する。
- そのうえで、水位に影響する断層パラメータ(「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」・「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」)を変動させた検討より、地震に伴う津波の第1波のピークの水位が高くなる波源を選定のうえ、組合せ評価を実施する。

ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)

- 各断層パターンを検討対象波源として、「東西方向位置」・「矩形モデル・くの字モデル」を変動させた検討により、組合せ時間範囲において、地震に伴う津波の第1波のピークが重なる波源を特定する。

【検討対象波源(断層パターン)】

- 断層パターン5~8を検討対象波源とする※1。
- ※1:断層パターン1~4については、断層パターン5~8をそれぞれ西へ25km移動した位置にある同じ傾斜となる断層パターンの波源であることから、断層パターン5~8を基準位置として東西への移動を検討することで、断層パターン1~4を評価可能である。

ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価 (水位の観点の検討)

- 全ての断層パラメータが水位に影響を与えることから、各断層パラメータの変動を考慮し、第1波のピークの水位が高くなる波源を選定のうえ、組合せ評価を実施する。

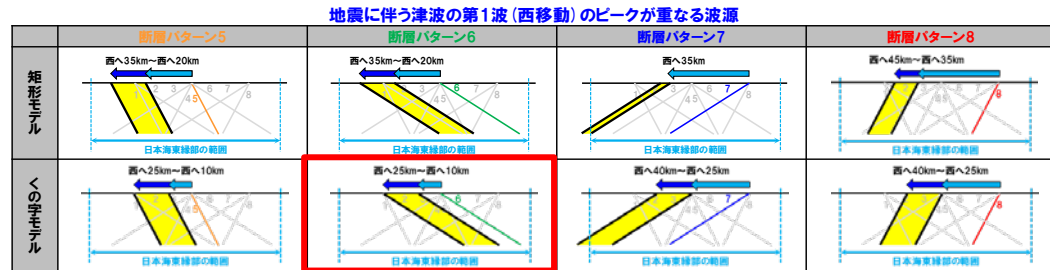
備考:断層パラメータの変動による影響

- 各断層パラメータが変動した場合に、水位時刻歴波形の位相・水位に与える影響は下表のとおりとなる。
- 変動を考慮する断層パラメータは、「地震に伴う津波」で検討した「断層パターン」・「波源位置」・「アスペリティ位置」・「断層面上縁深さ」とし、「ピークが重なる波源の特定」を先に実施するため、検討順序を変更する。

断層パラメータ	位相への影響	水位への影響
断層パターン	-(水位時刻歴波形が異なるため、網羅的に検討する)	
波源位置	○:有り	○:有り
アスペリティ位置	○:有り	○:有り
断層面上縁深さ	X:無し	○:有り

ピークが重なる波源の特定 (位相の観点の検討)の検討結果

○ピークが重なる波源位置は、下表に示す「日本海東縁部の範囲」のうち黄色ハッチング箇所となる。



ピークの水位が高くなる波源の選定 (水位の観点の検討)の検討結果

○各断層パラメータの変動を網羅的に考慮し、ピークの水位が高くなる波源を選定した。

※2:「組合せ評価の最大ケースとなる断層パターン6(くの字モデル)の結果を掲載

断層パラメータ	解析対象とした変動範囲	検討結果※2
断層パターン	断層パターン5~8	断層パターン6
波源位置	東西方向位置: 4章(3)で特定した「ピークが重なる波源」のうち最も東へ位置する波源 矩形モデル・くの字モデル	くの字モデル(西へ10km)
アスペリティ位置	de~ef(10kmピッチ)	de南へ10km, 若しくは、de南へ20km
断層面上縁深さ※3	0km, 3km, 4km, 5km	4km, 若しくは、5km

※3:茶津入構トンネル・アクセスルートトンネルでは、断層面上縁深さは4kmに変動した場合に水位が高い傾向があることから、ピークの水位が高くなる断層面上縁深さ4kmも実施する。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

「茶津入構トンネル・アクセスルートトンネル」最大ケースによる影響確認

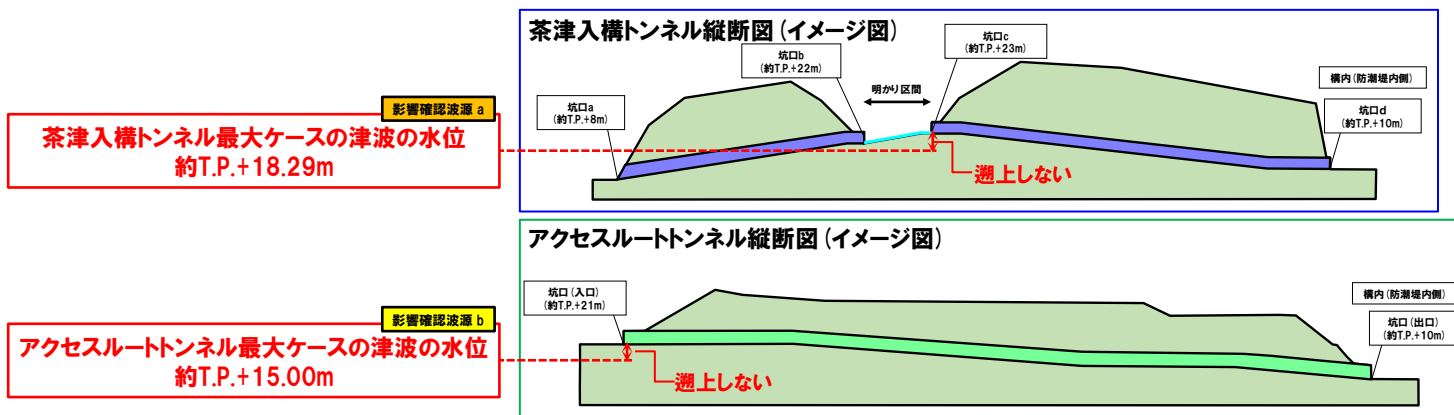
- 茶津入構トンネル・アクセスルートトンネルの最大ケースとして、5波源を選定した(以降では、これらの波源を「影響確認波源a~e」と呼ぶ)。
- 「影響確認波源a~e」を対象として、トンネル坑口の標高と津波の水位を比較した結果は、以下のとおりである。
 - 茶津入構トンネル明かり区間(約T.P.+23m)に対し、茶津入構トンネルの水位(約T.P.+18.29m^{※1})が低い。
 - アクセスルートトンネル坑口(約T.P.+21m)に対し、アクセスルートトンネルの水位(約T.P.+15.00m^{※1})が低い。

※1:トンネル坑口に遡上しないことから、影響確認地点における水位を記載。

影響確認波源:「組合せ評価の最大ケース」(茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル) ※2

影響確認地点	健全地形モデル		防波堤の損傷を考慮した地形モデル①		防波堤の損傷を考慮した地形モデル②		防波堤の損傷を考慮した地形モデル③	
	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ	評価値	断層パラメータ
茶津入構トンネル (上昇側)	18.29m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ10km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:35s 影響確認波源 a	17.65m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ10km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:30s 影響確認波源 c	18.29m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ10km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:30s 影響確認波源 e	17.68m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ10km 断層面上縁深さ:5km 組合せの時間差:30s 影響確認波源 c
アクセスルート トンネル (上昇側)	15.00m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:55s 影響確認波源 b	14.83m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:50s 影響確認波源 d	14.98m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:55s 影響確認波源 b	14.87m	断層パターン:6 波源位置:くの字モデル(西へ10km) アスペリティ位置:de南へ20km 断層面上縁深さ:4km 組合せの時間差:55s 影響確認波源 b

※2:4地形モデル×2影響確認地点=8最大ケースに対して、一部の最大ケースが重複する(同一波源が選定される)ため、影響確認波源 a~影響確認波源 eの5波源となる。



※3:影響確認波源a~e・全地形モデルのうち、水位が最も高い波源・地形モデルの結果を用いて整理した。

○以上より、トンネル坑口の標高に対して、津波の水位は低く、津波が流入しないことを確認した。

5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価

参考：影響確認波源の位置付け

《ガイドを踏まえた基準津波の選定方針》

- 「基準津波及び耐津波設計方針に係る審査ガイド」を踏まえ、基準津波は津波防護施設等に最も影響を与える波源※1として選定する。
 ※1：津波防護施設等の設計に用いる荷重条件を設定する観点から影響の大きい波源を選定する。

《茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う影響評価結果》

- トンネル坑口の標高に対して、津波の水位は低く、津波が流入しないことを確認した。

3.5 津波評価結果からの基準津波の選定

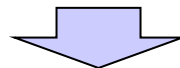
3.5.1 基準津波の選定方針

- (1) 基準津波は、発生要因を考慮した波源モデルに基づき、津波の伝播の影響等を踏まえた津波を複数作成して検討した上で、安全側の評価となるよう、想定される津波の中で施設に最も大きな影響を与えるものとして策定されていることを確認する。

「基準津波及び耐津波設計方針に係る審査ガイド」に一部加筆

【トンネル坑口の標高と津波の水位の比較】

		トンネル坑口の標高	津波の水位
影響確認地点	茶津入構トンネル (上昇側)	明かり区間 約T.P.+23m	影響確認波源 a 約T.P.+18.29m
	アクセスルートトンネル (上昇側)	トンネル坑口 約T.P.+21m	影響確認波源 b 約T.P.+15.00m



《今後の耐津波設計方針における説明内容》

- 今後、耐津波設計方針の審査において、影響確認波源を用いた当該トンネルからの津波の流入の可能性について評価結果を説明する。

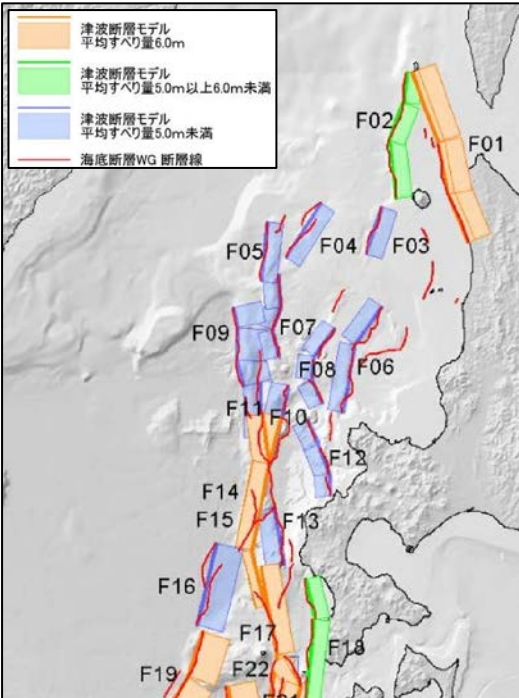
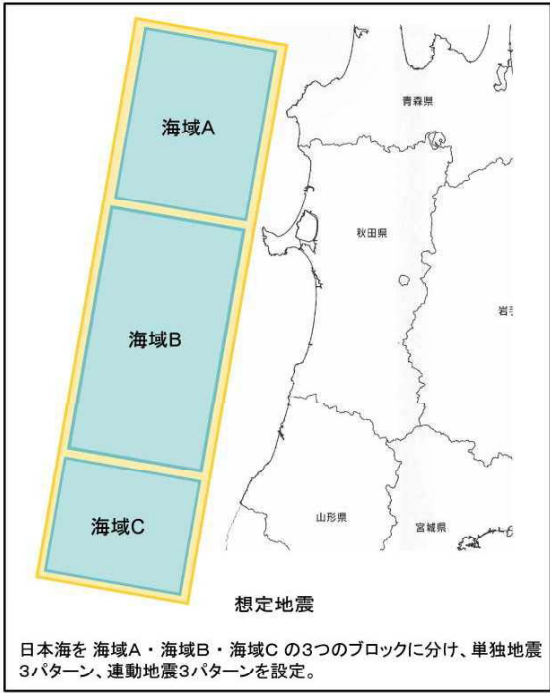
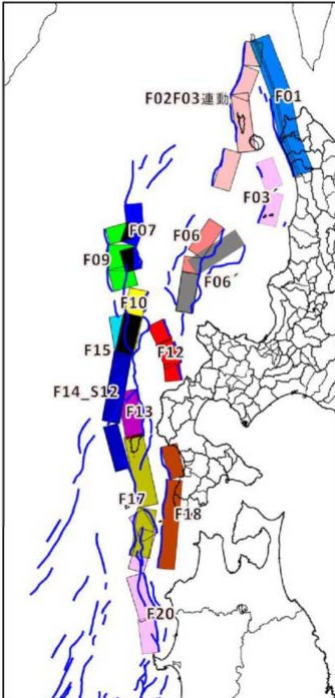
7. 行政機関による津波評価

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

検討方針

一部修正 (R4/7/1審査会合)

- 行政機関における津波評価について、必要な科学的・技術的知見を基準津波策定に反映するため、泊発電所の敷地周辺への影響が大きいと考えられる「日本海を波源域とした津波評価」を実施している行政機関（国の検討会モデル1件、地方自治体モデル11件（資料3の7.2「地方自治体モデルによる検討」参照））のうち、想定している断層モデルの泊発電所との距離及び規模の大きさを考慮し、下表に示す3件の断層モデルを用いた津波の数値シミュレーションを実施し、日本海東縁部に想定される地震に伴う津波（当社評価結果）との比較を行う。
- 計算条件は、日本海東縁部に想定される地震に伴う津波と同様とする。

	国の検討会モデルによる検討	日本海を波源域とした地方自治体モデルによる検討	
	国交省ほか (2014)	秋田県 (2013)	北海道 (2017)
断層モデル	F12断層, F14断層及びF15断層	海域A+B+C連動モデル	F12断層, F14断層及びF15断層
選定理由	泊発電所に近い位置に断層モデルを想定している。	最も地震規模の大きい断層モデル (M_w 8.69, 断層長さ350km) を想定している。	泊発電所に近い位置に断層モデルを想定している。
断層モデル位置	 <p>(国交省ほか (2014) に一部加筆)</p>	 <p>想定地震 日本海を 海域A・海域B・海域C の3つのブロックに分け、単独地震3パターン、連動地震3パターンを設定。</p> <p>(秋田県 (2013) より引用)</p>	 <p>(北海道 (2017) より引用)</p>

7. 1 国の検討会モデルによる検討

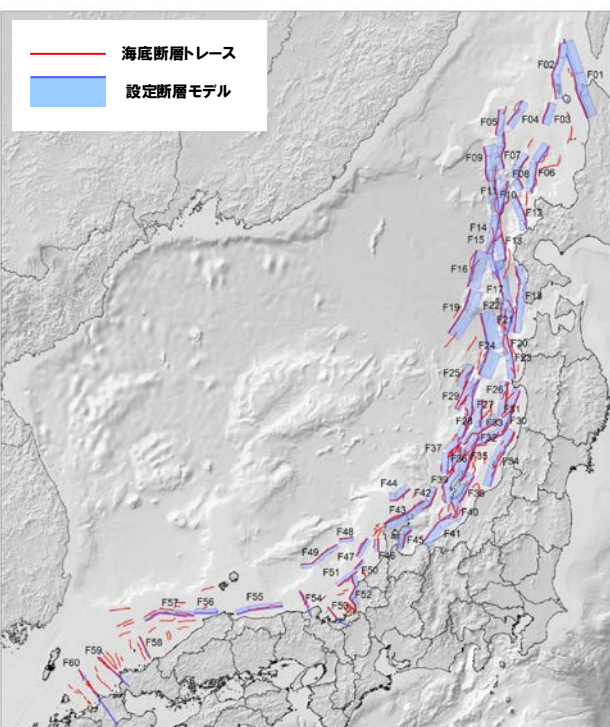
1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

7.1 国の検討会モデルによる検討

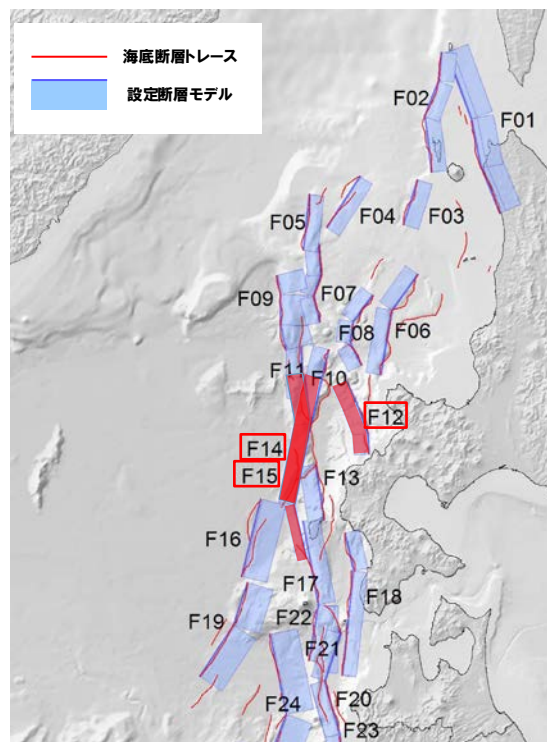
国交省ほか(2014)の断層モデルによる検討(1/4) 検討方針

一部修正(H26/12/5審査会合)

- 国交省ほか(2014)では、複数のセグメントからなる断層モデルを設定しており、セグメント毎に大すべり域の位置の不確かさを考慮している。
- 以上を踏まえ、国交省ほか(2014)より公表された断層モデルのうち、泊発電所に近い位置に断層モデルであるF12断層、F14断層及びF15断層を用いて、大すべり域の位置の不確かさを考慮した津波の数値シミュレーションを実施する。

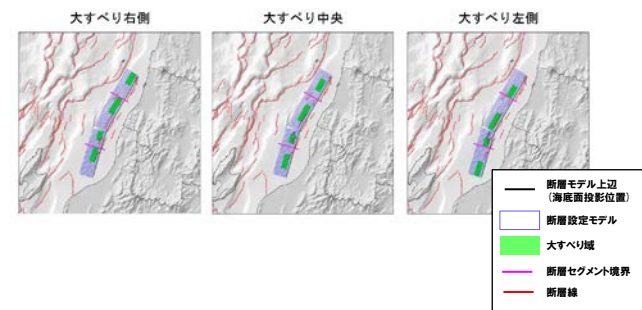


津波断層モデル位置

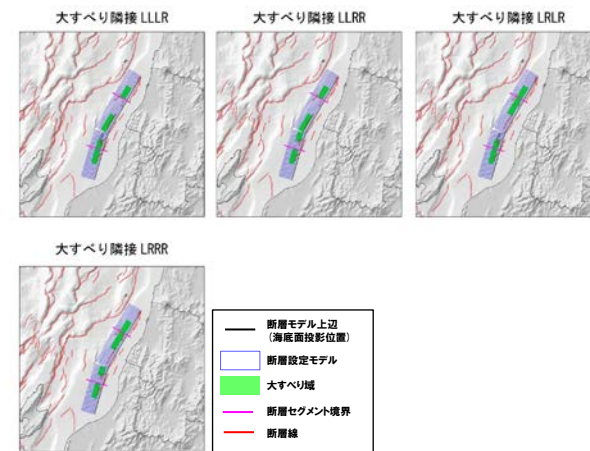


抽出した津波断層モデル(北海道)

(国交省ほか(2014)に一部加筆)



大すべり域の位置の基本ケース(設定例)



大すべり域の位置の隣接ケース(4セグメントの場合の設定例)

7.1 国の検討会モデルによる検討

国交省ほか(2014)の断層モデルによる検討(2/4) 断層モデル(1/2)

一部修正(H26/12/5審査会合)

○国交省ほか(2014)より断層モデル諸元を下表のとおり設定した。

[断層モデル諸元]

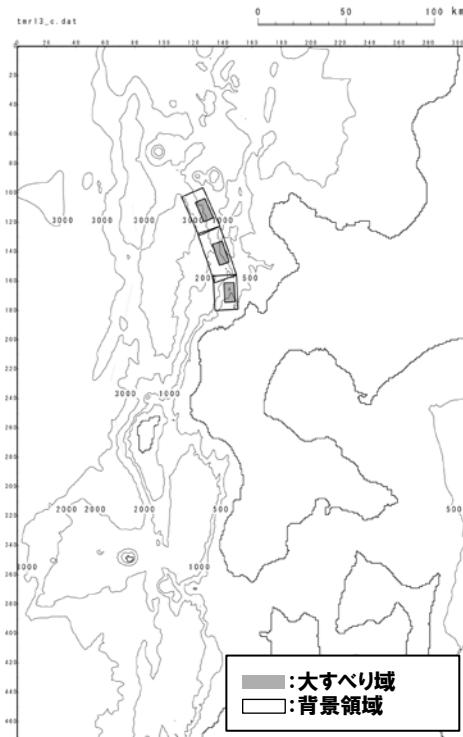
断層パラメータ	F12断層			F14断層				F15断層			
	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④
モーメント マグニチュード M_w	7.4			7.8				7.8			
合計断層長さ L	73.0m			175.0km				177.0km			
断層長さ	24.0km	29.3km	19.7km	43.3km	57.1km	22.5km	51.9km	45.2km	57.1km	22.5km	51.9km
断層幅 W	18.7km	18.7km	18.7km	20.3km	20.3km	20.3km	16.6km	20.1km	20.1km	20.1km	16.4km
平均すべり量 D	3.71m			6.00m				6.00m			
すべり量(背景領域)	2.65m	2.84m	2.49m	4.36m	4.36m	4.24m	4.31m	4.67m	4.36m	4.24m	4.31m
すべり量(大すべり域)	7.42m	7.42m	7.42m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m
断層面上縁深さ d	1.0km			1.0km				1.0km			
走向 θ	156°	161°	177°	195°	192°	192°	167°	173°	192°	192°	167°
傾斜角 δ	45°	45°	45°	45°	45°	45°	60°	45°	45°	45°	60°
すべり角 λ	62°	65°	79°	99°	111°	111°	105°	97°	111°	111°	105°

※断層パラメータは、国交省ほか(2014)より設定した。

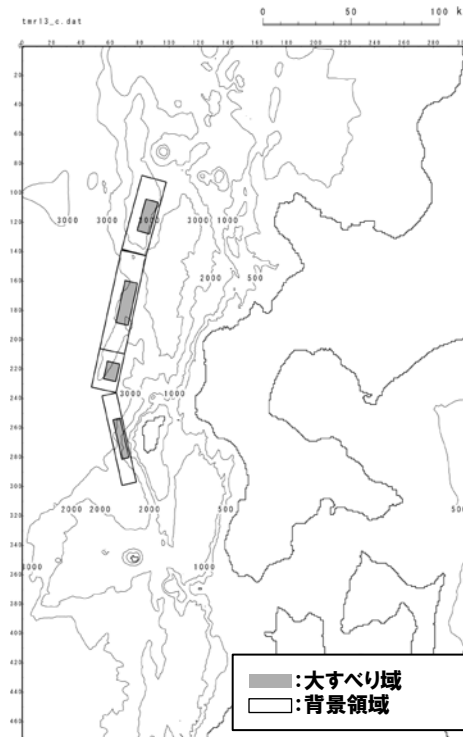
7.1 国の検討会モデルによる検討

国交省ほか(2014)の断層モデルによる検討(3/4) 断層モデル(2/2)

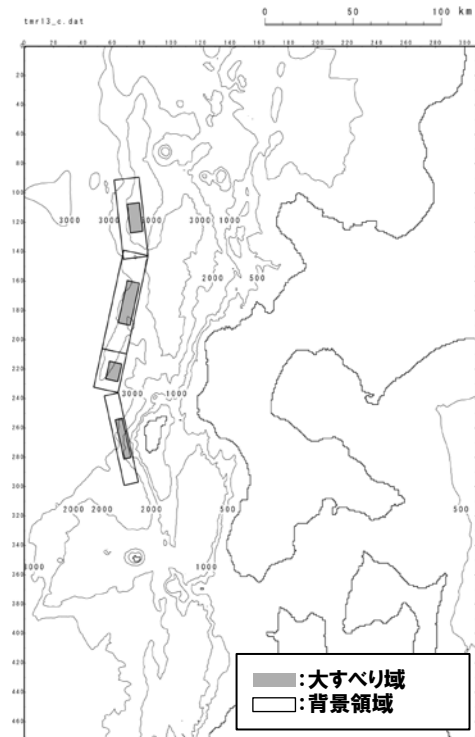
一部修正(H26/12/5審査会合)



F12断層



F14断層



F15断層

※記載例:大すべり域中央。

7.1 国の検討会モデルによる検討

国交省ほか(2014)の断層モデルによる検討(4/4) 数値シミュレーション結果

一部修正(H26/12/5審査会合)

○国交省ほか(2014)の断層モデル(F12断層, F14断層及びF15断層)の数値シミュレーション結果は, 以下のとおりである

国交省ほか(2014)の断層モデル(F12断層, F14断層及びF15断層)の数値シミュレーション結果

区分	国交省ほか(2014)						【参考】 日本海東縁部に 想定される地震に伴う津波 (当社評価結果)
	F12断層		F14断層		F15断層		
	評価値	大すべり域の位置	評価値	大すべり域の位置	評価値	大すべり域の位置	評価値
防潮堤前面 (上昇側)	4.05m	大すべり域隣接LRR	4.29m	大すべり域隣接LRRR	4.87m	大すべり域隣接LRRR	10.20m
3号炉取水口 (上昇側)	2.47m	大すべり域隣接LRR	3.49m	大すべり域中央	3.37m	大すべり域右側	8.50m
1, 2号炉取水口 (上昇側)	2.50m	大すべり域隣接LRR	3.44m	大すべり域右側	3.37m	大すべり域右側	8.63m
放水口 (上昇側)	2.57m	大すべり域隣接LLR	3.54m	大すべり域隣接LRLR	3.13m	大すべり域隣接LRLR	9.20m
3号炉取水口 (下降側)	2.50m	大すべり域中央	2.74m	大すべり域隣接LLRR	3.33m	大すべり域隣接LRLR	9.11m (参考値)
「貯留堰を 下回る時間」	0s	—	0s	—	0s	—	706s

※黄ハッチングは評価項目の最大ケースである。

○国交省ほか(2014)の断層モデル(F12断層, F14断層及びF15断層)の数値シミュレーション結果は, 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波(当社評価結果)を上回らないことを確認した。

7.2 地方自治体モデルによる検討

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

7.2 地方自治体モデルによる検討

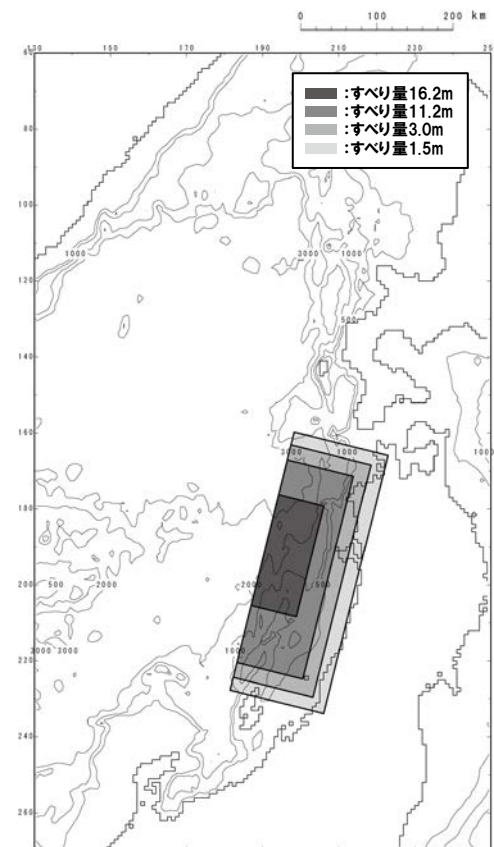
(1) 秋田県の断層モデルによる検討

秋田県(2013)の断層モデルによる検討(1/2) 断層モデル

- 秋田県(2013)では、連動地震として3領域の同時破壊を想定した断層モデルを設定している。
- 秋田県(2013)より公表された断層モデル(海域A+B+C連動モデル)を用いて、津波の数値シミュレーションを実施する。

[断層モデル諸元]

断層パラメータ	海域A+B+C 連動モデル	備考
モーメントマグニチュード M_w	8.69	○秋田県(2013)より設定した。
断層長さ L	350km	○秋田県(2013)より設定した。
断層幅 W	135km	○秋田県(2013)より設定した。
すべり量 D	8.1m	○秋田県(2013)より設定した。
断層面上縁深さ d	0km	○秋田県(2013)より設定した。
走向 θ	14°	○秋田県(2013)より設定した。
傾斜角 δ	20°	○秋田県(2013)より設定した。
すべり角 λ	90°	○秋田県(2013)より設定した。



海域A+B+C連動

7.2 地方自治体モデルによる検討

(1) 秋田県の断層モデルによる検討

秋田県(2013)の断層モデルによる検討(2/2) 数値シミュレーション結果

○秋田県(2013)の断層モデル(海域A+B+C連動モデル)の数値シミュレーション結果は、以下のとおりである。

秋田県(2013)の断層モデル(海域A+B+C連動モデル)の数値シミュレーション結果

区分	秋田県(2013)	【参考】 日本海東縁部に 想定される地震に伴う津波 (当社評価結果)
	海域A+B+C 連動モデル	
	評価値	評価値
防潮堤前面 (上昇側)	2.53m	10.20m
3号炉取水口 (上昇側)	2.15m	8.50m
1, 2号炉取水口 (上昇側)	2.15m	8.63m
放水口 (上昇側)	1.78m	9.20m
3号炉取水口 (下降側)	2.07m	9.11m (参考値)
「貯留堰を 下回る時間」	0s	706s



○秋田県(2013)の断層モデル(海域A+B+C連動モデル)の数値シミュレーション結果は、日本海東縁部に想定される地震に伴う津波(当社評価結果)を上回らないことを確認した。

7.2 地方自治体モデルによる検討

(2) 北海道の断層モデルによる検討

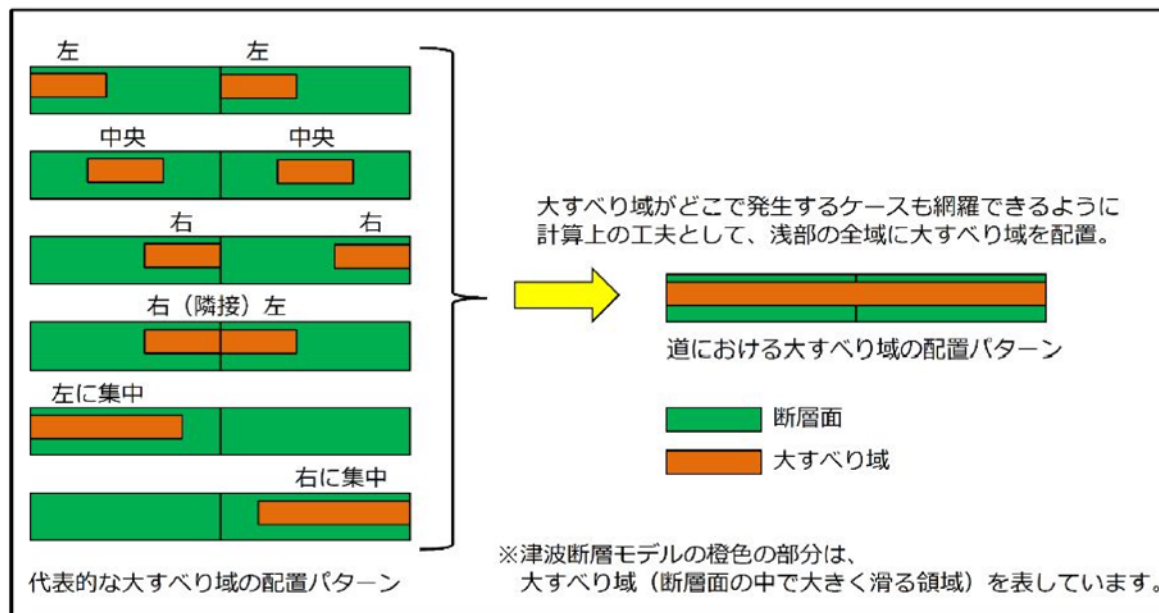
1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

7.2 地方自治体モデルによる検討

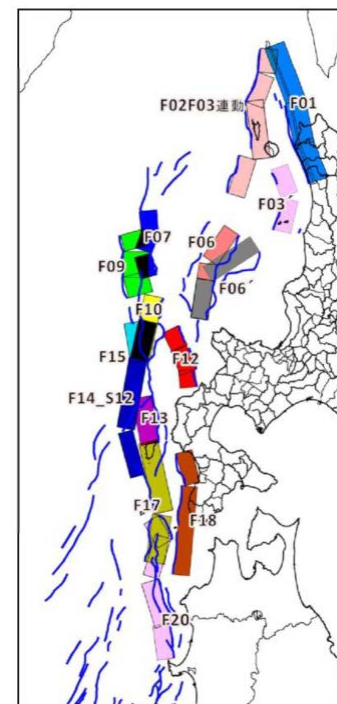
(2) 北海道の断層モデルによる検討

北海道(2017)の断層モデルによる検討(1/5) 検討方針(1/2)

- 北海道(2017)では、国交省ほか(2014)における大すべり域の位置の不確かさを考慮した断層モデルに対して、大すべり域を浅部の全域に配置した断層モデルとしている。
 - 以上を踏まえ、北海道(2017)より公表された断層モデルのうち、泊発電所に近い位置に断層モデルであるF12断層、F14断層※及びF15断層を用いて、浅部の大すべり域を全域に配置した津波の数値シミュレーションを実施する。
- ※F14断層については、北海道(2017)の検討を踏まえ、南部のセグメント全体に大すべり域を配置した津波の数値シミュレーションを実施する(詳細は次頁参照)。



大すべり域の配置の考え方



(北海道(2017)より引用)

7.2 地方自治体モデルによる検討

(2) 北海道の断層モデルによる検討

北海道 (2017) の断層モデルによる検討 (2/5) 検討方針 (2/2)

- F12断層, F14断層①及びF15断層は, 浅部の大すべり域を全域に配置した断層モデルを設定する。
 - 上記に加え, F14断層②は, 南部のセグメント全体に大すべり域を配置した断層モデル※を設定する。
- ※北海道南西沖地震の既存研究の再現性の高いモデルでは, 南部のセグメント全体が大すべり域であることを踏まえ, 設定したモデル。

対象地震	F12
想定地震の規模	モーメントマグニチュード 7.4 ※
概要	説明 国の報告書により設定された津波断層モデル F12 モデルをベースに、大すべり域を1つに繋げたモデルを設定
	波源域と地殻変動量

対象地震	F15
想定地震の規模	モーメントマグニチュード 7.8 ※
概要	説明 国の報告書により設定された津波断層モデル F15 モデルをベースに、大すべり域を1つに繋げたモデルを設定
	波源域と地殻変動量

対象地震	F14_S12
想定地震の規模	モーメントマグニチュード 7.9
概要	説明 国の報告書により設定された津波断層モデル F14 モデルをベースに、大すべり域を1つに繋げたモデル ① 北海道南西沖地震の既存研究の再現性の高いモデルでは、南部のセグメント全体が大すべり域であることから、国が示した F14 モデルの南側のセグメント全体を大すべり域として配置したモデル ② これら2つの津波シミュレーション結果を重ね合せ設定
	波源域と地殻変動量 ①大すべり域を一つに繋げたモデル ②南側セグメント全体を大すべり域としたモデル

F14断層①
F14断層②

2つの津波シミュレーション結果を重ね合せたモデル
F14_S12
F14断層②

(2) 北海道の断層モデルによる検討

北海道(2017)の断層モデルによる検討(3/5) 断層モデル(1/2)

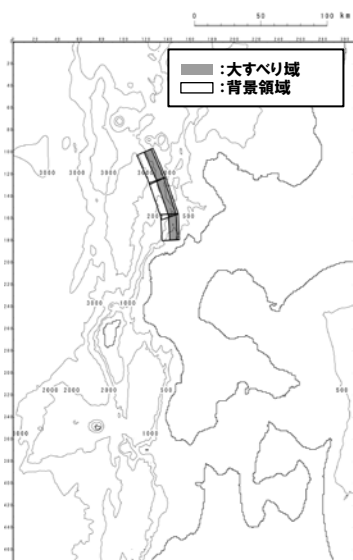
○北海道(2017)より断層モデル諸元を下表のとおり設定した。

[断層モデル諸元]

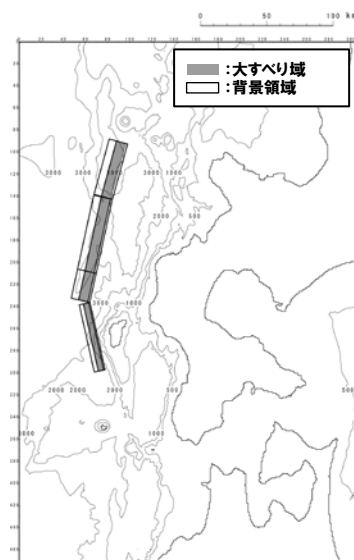
断層パラメータ	F12断層			F14断層①				F14断層②				F15断層			
	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④	セグメント①	セグメント②	セグメント③	セグメント④
モーメント マグニチュード M_w	7.50			7.92				7.89				7.92			
合計断層長さ L	73.0m			175.0km				175.0km				177.0km			
断層長さ	24.0km	29.3km	19.7km	43.3km	57.1km	22.5km	51.9km	43.3km	57.1km	22.5km	51.9km	45.2km	57.1km	22.5km	51.9km
断層幅 W	18.7km	18.7km	18.7km	20.3km	20.3km	20.3km	16.6km	20.3km	20.3km	20.3km	16.6km	20.1km	20.1km	20.1km	16.4km
平均すべり量 D	4.8m			8.2m				7.5m				8.2m			
すべり量(背景領域)	2.65m	2.84m	2.49m	4.36m	4.36m	4.24m	4.31m	6.00m	6.00m	6.00m	12.00m	4.67m	4.36m	4.24m	4.31m
すべり量(大すべり域)	7.42m	7.42m	7.42m	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m	—	—	—	—	12.00m	12.00m	12.00m	12.00m
断層面上縁深さ d	1.0km			1.0km				1.0km				1.0km			
走向 θ	156°	161°	177°	195°	192°	192°	167°	195°	192°	192°	167°	173°	192°	192°	167°
傾斜角 δ	45°	45°	45°	45°	45°	45°	60°	45°	45°	45°	60°	45°	45°	45°	60°
すべり角 λ	62°	65°	79°	99°	111°	111°	105°	99°	111°	111°	105°	97°	111°	111°	105°

※断層パラメータは、北海道(2017)より設定した。

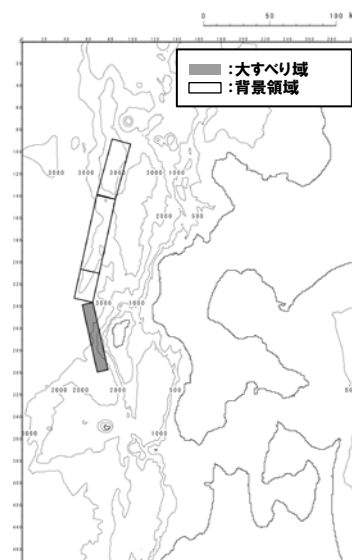
北海道 (2017) の断層モデルによる検討 (4/5) 断層モデル (2/2)



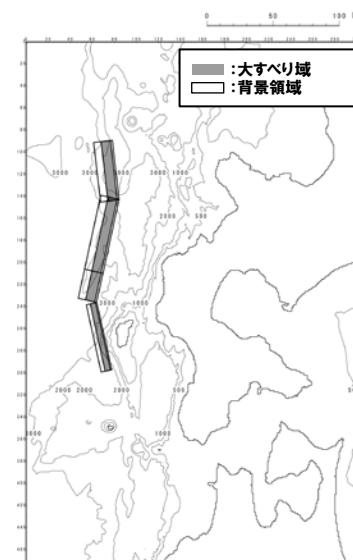
F12断層



F14断層①



F14断層②



F15断層

(2) 北海道の断層モデルによる検討

北海道(2017)の断層モデルによる検討(5/5) 数値シミュレーション結果

○北海道(2017)の断層モデル(F12断層, F14断層①, F14断層②及びF15断層)の数値シミュレーション結果は、以下のとおりである

北海道(2017)の断層モデル(F12断層, F14断層①, F14断層②及びF15断層)の数値シミュレーション結果

区分	北海道(2017)				【参考】 日本海東縁部に 想定される地震に伴う津波 (当社評価結果)
	F12断層	F14断層①	F14断層②	F15断層	
	評価値	評価値	評価値	評価値	評価値
防潮堤前面 (上昇側)	4.76m	4.72m	3.92m	5.62m	10.20m
3号炉取水口 (上昇側)	2.78m	3.70m	3.81m	3.82m	8.50m
1, 2号炉取水口 (上昇側)	2.58m	3.77m	3.55m	3.76m	8.63m
放水口 (上昇側)	2.59m	3.95m	2.66m	3.35m	9.20m
3号炉取水口 (下降側)	2.81m	3.40m	2.54m	4.07m	9.11m (参考値)
「貯留堰を 下回る時間」	0s	0s	0s	16s	706s

※黄ハッチングは評価項目の最大ケースである。

○北海道(2017)の断層モデル(F12断層, F14断層①, F14断層②及びF15断層)の数値シミュレーション結果は、日本海東縁部に想定される地震に伴う津波(当社評価結果)を上回らないことを確認した。

1. 申請時からの主な変更内容	
2. 既往津波の検討	4
2.1 既往津波の文献調査	5
2.2 津波堆積物調査	9
2.3 既往津波の再現解析	19
3. 地震に伴う津波	
3.1 日本海東縁部に想定される地震に伴う津波	
3.2 海域活断層に想定される地震に伴う津波	
4. 地震以外の要因に伴う津波	25
4.1 火山による山体崩壊に伴う津波	27
4.2 海底地すべりに伴う津波	34
4.3 陸上の斜面崩壊(陸上地すべり)に伴う津波	39
4.4 陸上の斜面崩壊(岩盤崩壊)に伴う津波	48
5. 地震に伴う津波と地震以外の要因に伴う津波の組合せ	54
5.1 評価方針	55
5.2 ピークが重なる波源の組合せ評価	68
(1) ピークが重なる波源の特定(位相の観点の検討)	73
(2) ピークの水位が高くなる波源の選定・組合せ評価(水位の観点の検討)	80
5.3 水位が高い波源の組合せ評価	93
(1) 地震に伴う津波の最大ケースの組合せ評価	94
(2) 地震に伴う津波の最大ケースの位相変動を考慮した波源の組合せ評価	97
5.4 敷地に対して大きな影響を及ぼす波源	106
5.5 茶津入構トンネル及びアクセスルートトンネル設置に伴う基準津波への影響評価	110
6. 基準津波策定	
6.1 基準津波	
6.2 基準津波と津波堆積物の比較	
7. 行政機関による津波評価	118
7.1 国の検討会モデルによる検討	120
7.2 地方自治体モデルによる検討	125
(1) 秋田県の断層モデルによる検討	126
(2) 北海道の断層モデルによる検討	128
8. 超過確率の参照	
9. 基準津波による安全性評価	
参考文献	134

参考文献

- ・渡辺偉夫 (1998) : 日本被害津波総覧 [第2版], 東京大学出版会, 238p.
- ・羽鳥徳太郎 (1984a) : 北海道渡島沖津波 (1741年) の挙動の再検討, 東京大学地震研究所彙報, 59, pp.115-125.
- ・宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子 (2013) : 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 694p.
- ・羽鳥徳太郎 (1996) : 日本近海における津波マグニチュードの特性, 津波工学研究報告, Vol.13, pp.17-26.
- ・羽鳥徳太郎 (1986) : 津波の規模階級の区分, 東京大学地震研究所彙報, Vol.61, pp.503-515.
- ・国立天文台編 (2016) : 理科年表, 平成28年版, 丸善出版.
- ・羽鳥徳太郎 (1995) : 日本海沿岸における津波エネルギー分布, 地震, 第2輯, 第48巻, pp.229-233.
- ・北海道 (2013) : 平成24年度日本海沿岸の津波浸水想定の特長・見直し報告書, 北海道に津波被害をもたらす想定地震の再検討ワーキンググループ.
- ・川上源太郎・仁科健二・加瀬善洋・廣瀬亘・田近淳・渡邊達也・石丸聡・嵯峨山積・林圭一・高橋良・深見浩司・田村慎・輿水健一・岡崎紀俊・大津直 (2015) : 北海道の日本海・オホーツク海沿岸における津波履歴: 充填研究「北海道の津波災害履歴の研究-未解明地域を中心に-」成果報告書, 北海道地質研究所調査研究報告, 第42号, pp1-218.
- ・川上源太郎・加瀬善洋・ト部厚志・高清水康博・仁科健二 (2017a) : 日本海東縁の津波とイベント堆積物, 地質学雑誌, 第123巻, 第10号, pp.857-877.
- ・Gentaro Kawakami, Kenji Nishina, Yoshihiro Kase, Jun Tajika, Keiichi Hayashi, Wataru Hirose, Tsumoru Sagayama, Tatsuya Watanabe, Satoshi Ishimaru, Ken'ichi Koshimizu, Ryo Takahashi and Kazuomi Hirakawa. (2017b) : Stratigraphic record tsunami along the Japan Sea, southwest Hokkaido, northern Japan, Island Arc, Volume26, Issue4, p.18.
- ・東大地震研 (2017) : 平成29年度「日本海地震・津波調査プロジェクト」成果報告書.
- ・北海道立総合研究機構 (2013) : 平成24年度津波堆積物調査研究業務報告書.
- ・羽鳥徳太郎・片山通子 (1977) : 日本海沿岸における歴史津波の挙動とその波源域, 東京大学地震研究所彙報, Vol.52, pp.49-70.
- ・宮部直巳 (1941) : 昭和15年8月2日日本海に起つた津浪, 東京帝國大學地震研究所彙報, pp.104-114.
- ・中央气象台 (1940) : 「気象要覧」, 第492号, pp.954-956.
- ・斎藤博英 (1941) : 北海道西岸を襲ひし津浪, 北海道気象要報, 第1巻, 第3号, pp.107-125.
- ・気象庁 (1984) : 昭和58年 (1983年) 日本海中部地震調査報告, 気象庁技術報告, 第106号, p.254.
- ・後藤章夫・高橋浩晃・宇津木充・小野忍・大島弘光・笠原稔・竹中博士・齊田智治 (1994) : 北海道南西沖地震に伴う津波-小樽から礼文島まで, 月刊海洋, 号外No.7, pp.153-158.
- ・相田勇 (1977) : 三陸沖の古い津波のシミュレーション, 東京大学地震研究所彙報, Vol.52, pp.71-101.
- ・土木学会 (2016) : 「原子力発電所の津波評価技術」, 土木学会原子力土木委員会津波評価部会.
- ・嶋原良典・犬井将堯・山本阿子・森木ひかる・隈元崇 (2022,2023) : 日本周辺海域で過去に発生した海底地すべり津波の規模推定, 日本地震学会2022年度秋季大会.
- ・犬井将堯・嶋原良典 (2023) : 日本海の過去の海底地すべり津波の規模推定, 日本地球惑星科学連合2023年大会.
- ・Watts,P.,S.T.Grilli,D.R.Tappin,and G.J.Fryer (2005) :Tsunami Generation by Submarine Mass Failure. II:Predictive Equations and Case Studies,Journal of Waterway,Port,Coastal,and Ocean Engineering,ASCE,pp.298-310.

参考文献

- ・西来邦章・伊藤順一・上野龍之編(2012):第四紀火山岩体・貫入岩体データベース.
- ・中野俊・西来邦章・宝田晋治・星住英夫・石塚吉浩・伊藤順一・川辺禎久・及川輝樹・古川竜太・下司信夫・石塚治・山元孝広・岸本清行編(2013):日本の火山(第3版),200万分の1地質編集図,No.11,産業技術総合研究所 地質調査総合センター.
- ・兼岡一郎・井田喜朗(1997):火山とマグマ,東京大学出版社.
- ・中村浩之・井上公夫・土屋智・石川芳治(2000):地震砂防,古今書院.
- ・太田一也(1987a):眉山大崩壊のメカニズムと津波,月刊地球,9巻4号,pp.214-220.
- ・山元孝広(2014):日本の主要第四紀火山の積算マグマ噴出量階段図,地質調査総合センター研究資料,No.613,産総研地質調査総合センター
- ・小嶋尚・野上道男・小野有五・平川一臣(2003):日本の地形2 北海道,東京大学出版会.
- ・児玉浩・宇井忠英・中川光弘(1998b):ニセコ火山群の火山活動史,日本岩石鉱物鉱床学会 平成9年度学術講演会予稿集, p.8.
- ・勝井義雄・岡田弘・中川光弘(2007):北海道の活火山,北海道新聞社.
- ・気象庁(2013):日本活火山総覧(第4版).
- ・奥野充(2003):ニセコ・イワオヌプリ,大雪山・旭岳,屈斜路・アトヌプリにおける最新噴火の年代学的研究,文部省科学研究費重点領域研究 北海道における完新世火山の火山活動特性の評価研究成果報告書, pp.13-23.
- ・北海道日本海沿岸における大規模岩盤崩落検討委員会(2000):北海道日本海沿岸における大規模岩盤崩落検討委員会報告書,平成12年10月.
- ・阿部勝征(1989):地震と津波のマグニチュードに基づく津波高の予測 東京大学地震研究所彙報, Vol.64,pp.51-69.
- ・後藤智明・小川由信(1982):Leap-frog法を用いた津波の数値計算法,東北大学工学部土木工学科資料.
- ・小谷美佐・今村文彦・首藤伸夫(1998):GISを利用した津波遡上計算と被害推定法,海岸工学論文集,第45巻, pp.356-360.
- ・Mansinha, L. and Smylie, D.(1971):The displacement fields of inclined faults, Bulletin of the Seismological Society of America,Vol.61, No.5, pp.1433-1440.
- ・長谷川賢一・鈴木孝夫・稲垣和男・首藤伸夫(1987):津波の数値実験における格子間隔と時間積分間隔に関する研究,土木学会論文集, No.381, II-7, pp.111-120.
- ・S.Noda, K.Yashiro, K.Takahashi, M.Takemura, S.Ohno, M.Tohdo and T.Watanabe (RESPONSE SPECTRA FOR DESIGN PURPOSE OF STIFF STRUCTURES ON ROCK SITES,OECD Workshop on the Relations Between Seismological DATA and Seismic Engineering,Oct.16-18,Istanbul,399)
- ・新エネルギー総合開発機構(1986):昭和60年度全国地熱資源総合調査(第2次)火山性熱水対流系地域タイプ①
(ニセコ地域)調査 火山岩分布年代調査報告書 要旨.
- ・新エネルギー総合開発機構(1987)(1):昭和61年度全国地熱資源総合調査(第2次)火山性熱水対流系地域タイプ①
(ニセコ地域)地熱調査成果図集.
- ・気象庁(2011):地震年報.
- ・Kaneoka Ichiro, Hiromitsu Yamagishi and Masahiro Yahata(1987):K-Ar Ages of the Neogene Submarine Volcanic Rocks and Overlying Quaternary Subaerial Lavas from the Mt.karibayama Area, Southwest Hokkaido, Buji. Volcanol. Soc. Japan, Ser.2, Vol, 32, No.4, pp. 329-333.
- ・火山噴火予知連絡会(2003):火山噴火予知連絡会による活火山の選定及び火山活動度による分類(ランク分け)について,気象庁, 報道発表資料
- ・新エネルギー総合開発機構(1994):地熱開発促進調査報告書No.33,奥尻地域.
- ・秦光男・佐藤博之・須田芳朗・小川健三(1979):20万分の1地質図「久遠」,工業技術院地質調査所.

参考文献

- ・井口隆(2006):日本の第四紀火山で生じた山体崩壊・岩屑なだれの特徴-発生状況・規模と運動形態・崩壊地形・流動堆積状況・発生原因について-, Journal of the Japan Landslide Society, Vol.42, No.5 (2006) January, pp.409-420.
- ・第四紀火山カタログ委員会編(2000):日本の第四紀火山カタログ, 日本火山学会.
- ・雁沢好博(1992):西北海道渡島半島の第三系層序と古地理, 地理学論集, No.37, pp.11-23.
- ・玉生志郎(1978):ガラスによるフィッション・トラック年代測定, 日本地質学会第85年学術大会講演要旨, p.288.
- ・宇井忠英・中川光弘(1999):第四紀火山カタログ委員会編 日本の第四紀火山カタログ1999, 日本火山学会.
- ・Satake,K.(2007):Volcanic origin of the 1741 Oshima-Oshima tsunami in the Japan Sea, Earth Planets Space, Vol.59, pp.381-390.
- ・秦光男・瀬川秀良・矢島淳吉(1982):奥尻島北部及び南部地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 地質調査所, p.83.
- ・鹿野和彦・吉村洋平・石山大三・Geoffrey J.Orton・大口健志(2006):北海道奥尻島 勝間山火山の噴出物と構造, 火山, 第51巻(2006), 第4号, pp.211-229.
- ・高速道路調査会(1985):地すべり地形の安定度評価に関する研究報告書, p.36.
- ・松本智裕・橋和正・今村文彦・首藤伸夫(1998):土石流による津波発生・伝播モデルの開発, 海岸工学論文集, 第45巻, pp.346-350.
- ・土木学会(2002):「原子力発電所の津波評価技術」, 土木学会原子力土木委員会津波評価部会.
- ・Kawamata,K., K.Takaoka, K.Ban, F.Imamura, S.Yamaki, and E.Kobayashi(2005):Model of tsunami generation by collapse of volcanic eruption: The 1741 Oshima-Oshima Tsunami, Tsunamis, Vol23, pp.79-96.
- ・Hampton and Lee(1996):SUBMARINE LANDSLIDES, Reviews of Geophysics, Volume 34, Issue 1, pp.33-59.
- ・鈴木博・長嶋昭(1980):高圧力下における海水の粘性係数, 日本機械学会論文集(B編), 46巻, 408号, pp.1574-1582.
- ・東日本高速道路(株), 中日本高速道路(株), 西日本高速道路(株)(2006):設計要領第一集土工編:pp.1-44.
- ・東日本高速道路(株), 中日本高速道路(株), 西日本高速道路(株)(2007):設計要領第二集橋梁建設編:pp.4-8.
- ・高橋保・小林幸一郎(1993):粘性土石流の流動機構に関する研究, 京都大学防災研究所年報第36号B-2, pp.433-449.
- ・地盤工学会(2009):地盤材料試験の方法と解説-二分冊の1-, 丸善, p.55.
- ・日本機械学会(2006):機械工学便覧基礎編α4 流体力学, 丸善, p.84.
- ・水山高久・吉松弘行・鈴木浩之(1985):湛水した砂防ダムに流入する土石流の影響, 第29回水理講演会論文集, pp.639-644.
- ・道上正規・檜谷浩・木戸 正二(1996):貯水池内での土砂流入に伴う水面波に関する実験的研究.
- ・松村和樹・高濱淳一郎・嶋大尚・村上正人・道上正規・檜谷浩・哇森雅樹・北栄雅人(1997):土塊が水域に突入することによる段波の形成過程に関する実験的研究.
- ・山岸宏光・石井正之(1979):5万分の1地質図幅説明書「余別および積丹岬」北海道立地下資源調査所.
- ・藤原明敏(1970):地すべり調査と解析, pp.148-149.
- ・稲垣秀輝・大久保拓郎・長谷川修一・矢田部龍一(2005):古期地すべりの安定性, 土と基礎, Vol.53, No.2, pp.17-19.
- ・柳田誠・長谷川修一(2000):地すべり地形の年齢-地すべり地形の形成から消失までの時間-, 第39回日本地すべり学会研究発表会講演集, pp.591-594.
- ・国土交通省(2008):地すべり防止技術指針及び同解説, 平成20年4月, 国土交通省砂防部 独立行政法人土木研究所, p.52.
- ・森脇寛(1987):崩土の到達距離予測, 日本地すべり学会誌, 地すべり, 第24巻, 第2号, pp.10-16.
- ・山田剛二・渡正亮・小橋澄治(1971):地すべり・斜面崩壊の実態と対策, pp.310-325.
- ・土木学会(1997):大規模岩盤崩壊に関する技術検討委員会報告書.
- ・川本眺万(1975):岩盤力学, p.161.

参考文献

- ・ 北海道地すべり学会 (2012) : 北海道の地すべり2012, pp.249-257.
- ・ 国土交通省・内閣府・文部科学省 (2014) : 日本海における大規模地震に関する調査検討会 報告書, 平成26年9月日本海における大規模地震に関する調査検討会.
- ・ 地震本部 (2003) : 日本海東縁部の地震活動の長期評価について, 地震調査研究推進本部, p.62

(WEB)

- ・ 東北大学・原子力規制庁 (2014) : 津波痕跡データベース.
<https://tsunami-db.irides.tohoku.ac.jp/tsunami/mainframe.php>
- ・ 海上保安庁 (2022) : 海域火山データベース: <http://www1.kaiho.mlit.go.jp/GIJUTSUKOKUSAI/kaiikiDB/list-2.htm>
- ・ 気象庁 火山活動解説資料: https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
- ・ 防災科学技術研究所 (2010) : 地すべり地形分布図データベース: <https://www.j-shis.bosai.go.jp/map/>
- ・ (独)産業技術総合研究所地質調査総合センター 日本の火山: <https://gbank.gsj.jp/volcano/>
- ・ 秋田県 (2013) : 「地震被害想定調査」に係る津波関連データについて.
<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/6779>
- ・ 北海道 (2017) : 北海道日本海沿岸における津波浸水想定公表について.
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/sbs/nihonkai_tsunami-sinnsuisoutei.html
- ・ 青森県 (2015) : 津波浸水想定設定.
<https://www.pref.aomori.lg.jp/kotsu/build/tunami-sinsuisoutei.html>
- ・ 山形県 (2014) : 山形県津波浸水想定, 被害想定検討委員会について.
<https://www.pref.yamagata.jp/020072/bosai/kochibou/bousaijouhou/jishintsunami/tsunami/shinsuisoutei/tsunamiinkai.html>
- ・ 新潟県 (2014) : 新潟県地域防災計画.
<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bosaikikaku/sec-bousaikikaku-chiikibousaieikaku.html>
- ・ 富山県 (2012) : 津波浸水想定公表について.
<https://www.pref.toyama.jp/1900/bousaianzen/bousai/suigai/kj00017580.html>
- ・ 石川県 (2012) : 石川県津波浸水想定区域図の作成について.
https://www.pref.ishikawa.lg.jp/bousai/kikikanri_g/tsunami_info.html
- ・ 福井県 (2012) : 福井県における津波シミュレーション結果の公表について.
<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/kikitaisaku/kikitaisaku/tunami-soutei.html>
- ・ 鳥取県 (2012) : 鳥取県津波対策検討委員会.
<https://www.pref.tottori.lg.jp/273953.htm>
- ・ 島根県 (2012) : 島根県津波浸水想定区域マップ.
https://web-gis.pref.shimane.lg.jp/bousai_shiryo/tsunamishinsui_souteizuH29.html
https://www.pref.shimane.lg.jp/bousai_info/bousai/bousai/bosai_shiryo/tsunamishinsui_souteizuH29.html
- ・ 山口県 (2015) : 山口県津波浸水想定図.
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/6/12640.html>